

県道米子岸本線（坂長バイパス）改良工事に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県西伯郡伯耆町

# 大殿狐谷遺跡 長者原16・18号墳

2008

財団法人 鳥取県教育文化財団





長者原18号墳埴輪出土状況





長者原18号墳出土埴輪

## 序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、それらの遺跡の調査成果に基づいて当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

遺跡という貴重な情報を秘めた先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務と考えております。

さて、西伯郡伯耆町において県道米子岸本線（坂長バイパス）の道路改良工事が着々と進められているところではありますが、当財団は、鳥取県からの委託を受け、この事業に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

平成19年度に調査を行った大殿狐谷遺跡および長者原16・18号墳では、弥生時代の竪穴住居跡や古墳の周溝が発掘され、多くの埴輪などが出土し、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。

このたび、それらの調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、鳥取県西部総合事務所県土整備局、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団  
理事長 有田 博 充



## 例 言

1. 本報告書は「県道米子岸本線（坂長バイパス）改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査」として実施した大殿狐谷遺跡および長者原16・18号墳の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に記載した大殿狐谷遺跡等の所在地は、以下のとおりである。  
鳥取県西伯郡伯耆町大殿字南狐谷2553ほか
3. 本発掘調査では、1,140m<sup>2</sup>を調査した。
4. 本報告書における座標は、世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標を、方位は座標方位を用いている。また、レベルは海拔標高である。
5. 本報告書に使用した地図は、岸本町（現伯耆町）発行の1/2,500地形図および国土地理院発行の1/50,000地形図を縮小し、加筆して利用した。
6. 鉄関連遺物の分類と抽出は、たたら研究会委員 穴澤義功氏にお願いした。なお、鉄関連遺物観察表および第33図鉄関連遺物構成図は穴澤氏による。記して感謝いたします。
7. 本発掘調査における基準点測量と方眼測量、および放射性炭素年代測定は業者に委託したものである。
8. 掲載した遺構図面は文化財主事または調査補助員が作成し、文化財主事、調査補助員または整理作業員が浄書を行った。
9. 遺物の実測および浄書は文化財主事または整理作業員が行った。
10. 遺構および遺物の撮影は文化財主事が行った。
11. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、および出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
12. 本報告書の作成は文化財主事が協議して行い、高橋章司が執筆した。
13. 現地調査および報告書の作成にあたっては、多くの方々からご指導、ご助言、ご支援いただいた。感謝いたします。

## 凡 例

1. 遺跡の略称は「大キツネ」とした。
2. 遺物には、すべて遺跡略称および遺構番号を記載している。
3. 遺構の略称は下記のとおりである。  
S I：竪穴住居跡    S B：掘立柱建物跡    S K：土坑
4. 本報告書における遺物の略称および縮尺は下記のとおりである。  
番号のみ：土器、土製品（縮尺：1/4）    S：石器（縮尺：1/2）    F：鉄製品、鉄滓（縮尺1/2）
5. 本文中、挿図および写真図版の遺物番号は一致する。
6. 長者原18号墳については、本文に記すとおり、調査時点では長者原17号墳と呼んでいた。したがって、遺物の注記および図面・写真等の調査記録はすべて長者原17号墳となっているが、正しくは長者原18号墳である。調査資料を活用される際には十分注意願いたい。なお、長者原17号墳は、長者原18号墳の西方約420mの米子市域内に、別に存在する。

# 目 次

序

例言・凡例

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査体制	4
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 大殿狐谷遺跡	9
第1節 遺跡の立地と層序	9
第2節 遺構と遺物	10
1. 概要	10
2. 竪穴住居跡	15
3. 掘立柱建物跡	22
4. 土坑	23
5. 遺構外出土遺物	24
第4章 長者原16号墳	27
第1節 遺跡の立地と層序	27
第2節 遺構と遺物	27
1. 概要	27
2. 周溝	27
3. 出土遺物	29
第5章 長者原18号墳	30
第1節 遺跡の立地と層序	30
第2節 遺構と遺物	30
1. 概要	30
2. 周溝	31
3. 古墳時代の遺物	36
4. 古代の遺物	43
第6章 大殿狐谷遺跡等の放射性炭素年代	50
株式会社 加速器分析研究所	50
第7章 考察 長者原18号墳の円筒埴輪について	54
第8章 まとめ	63



# 挿図目次

## 第1章 調査の経緯と経過

- 第1図 調査地位置図……………1
- 第2図 調査区グリッド図……………3

## 第2章 位置と環境

- 第3図 遺跡位置図……………5
- 第4図 周辺遺跡分布図……………7

## 第3章 大殿狐谷遺跡

- 第5図 過去の調査範囲……………10
- 第6図 遺構分布図……………11
- 第7図 1区全体図……………12
- 第8図 2区全体図……………12
- 第9図 3区全体図……………13
- 第10図 4区全体図……………14
- 第11図 S I 1 および出土遺物……………15
- 第12図 S I 2 および出土遺物……………16
- 第13図 S I 3 および出土遺物……………18
- 第14図 S I 4 および出土遺物……………19
- 第15図 S I 5 ……………21
- 第16図 S I 5 出土遺物……………22
- 第17図 S B 1 ……………23
- 第18図 S K 1 ……………23

- 第19図 遺構外出土遺物（1）……………25
- 第20図 遺構外出土遺物（2）……………26

## 第4章 長者原16号墳

- 第21図 周溝および出土遺物……………28

## 第5章 長者原18号墳

- 第22図 周溝……………32
- 第23図 周溝内遺物出土状況……………33
- 第24図 埴輪の配列状況の復元……………35
- 第25図 古墳時代の土器……………36
- 第26図 埴輪（1）……………38
- 第27図 埴輪（2）……………39
- 第28図 埴輪（3）……………40
- 第29図 埴輪（4）……………41
- 第30図 古代の土器および土製品……………44
- 第31図 鉄関連遺物（1）……………46
- 第32図 鉄関連遺物（2）……………47
- 第33図 鉄関連遺物構成図……………49

## 第7章 考察

- 第34図 計測位置と分類基準……………55

## 第8章 まとめ

- 第35図 周辺の古墳分布図……………64

# 挿表目次

## 第6章 自然科学分析

- 第1表 放射性炭素年代測定結果……………53

## 第7章 考察

- 第2表 長者原18号墳埴輪属性表……………57

# 図版目次

## 巻頭図版

- 1 長者原18号墳埴輪出土状況
- 2 長者原18号墳出土埴輪

## 図版

- 1—1 調査地周辺の地形（東から）
- 1—2 調査地周辺の地形（上が北）

## 大殿狐谷遺跡

- 2—1 1区完掘状況（北から）
- 2—2 S I 1完掘状況（北から）
- 2—3 S I 1土層断面（西から）
- 2—4 2区完掘状況（南から）
- 2—5 S K 1完掘状況（南から）
- 3—1 3区完掘状況（東から）
- 3—2 4区完掘状況（北西から）
- 4—1 S I 2検出状況（東から）
- 4—2 S I 2完掘状況（西から）
- 4—3 S I 3完掘状況（北西から）
- 5—1 S I 4検出状況（西から）
- 5—2 S I 4完掘状況（西から）
- 5—3 S I 4と18号墳間の土層断面（南から）
- 6—1 S I 5検出状況（北から）
- 6—2 S I 5床面検出状況（北から）
- 6—3 S I 5—P 5、P 6検出状況（北から）
- 7—1 S I 5完掘状況（南東から）
- 7—2 S I 5炭化物および焼土出土状況  
（北東から）
- 7—3 S I 5鉄製品出土状況（北から）
- 7—4 S B 1完掘状況（南西から）
- 8—1 竪穴住居跡出土土器
- 8—2 遺構外出土土器

## 長者原16号墳

- 9—1 周溝検出状況（北東から）
- 9—2 周溝土層断面（南西から）
- 9—3 周溝完掘状況（北西から）
- 10—1 長者原16号墳出土遺物
- 10—2 大殿狐谷遺跡 遺構外出土埴輪

## 長者原18号墳

- 11—1 周溝検出状況（東から）
- 11—2 周溝内埴輪出土状況（東から）
- 11—3 周溝完掘状況（東から）
- 11—4 周溝内炭化物出土状況（南から）
- 12—1 周溝土層断面（東から）
- 12—2 埴輪出土状況 東半（東から）
- 12—3 埴輪出土状況 西半（西から）
- 13—1 埴輪A群出土状況 その1（南東から）
- 13—2 埴輪A群出土状況 その2（南東から）
- 13—3 埴輪B群出土状況（南東から）
- 14—1 埴輪D群出土状況 その1（南から）
- 14—2 埴輪D群出土状況 その2（南から）
- 14—3 埴輪D群出土状況 その3（南から）
- 15 埴輪（1）
- 16 埴輪（2）
- 17 埴輪（3）
- 18 埴輪（4）
- 19—1 古墳時代の土器
- 19—2 土製品
- 19—3 古代の土器（1）
- 20 古代の土器（2）
- 21 鉄関連遺物
- 22—1 鉄製品
- 22—2 石器および砥石

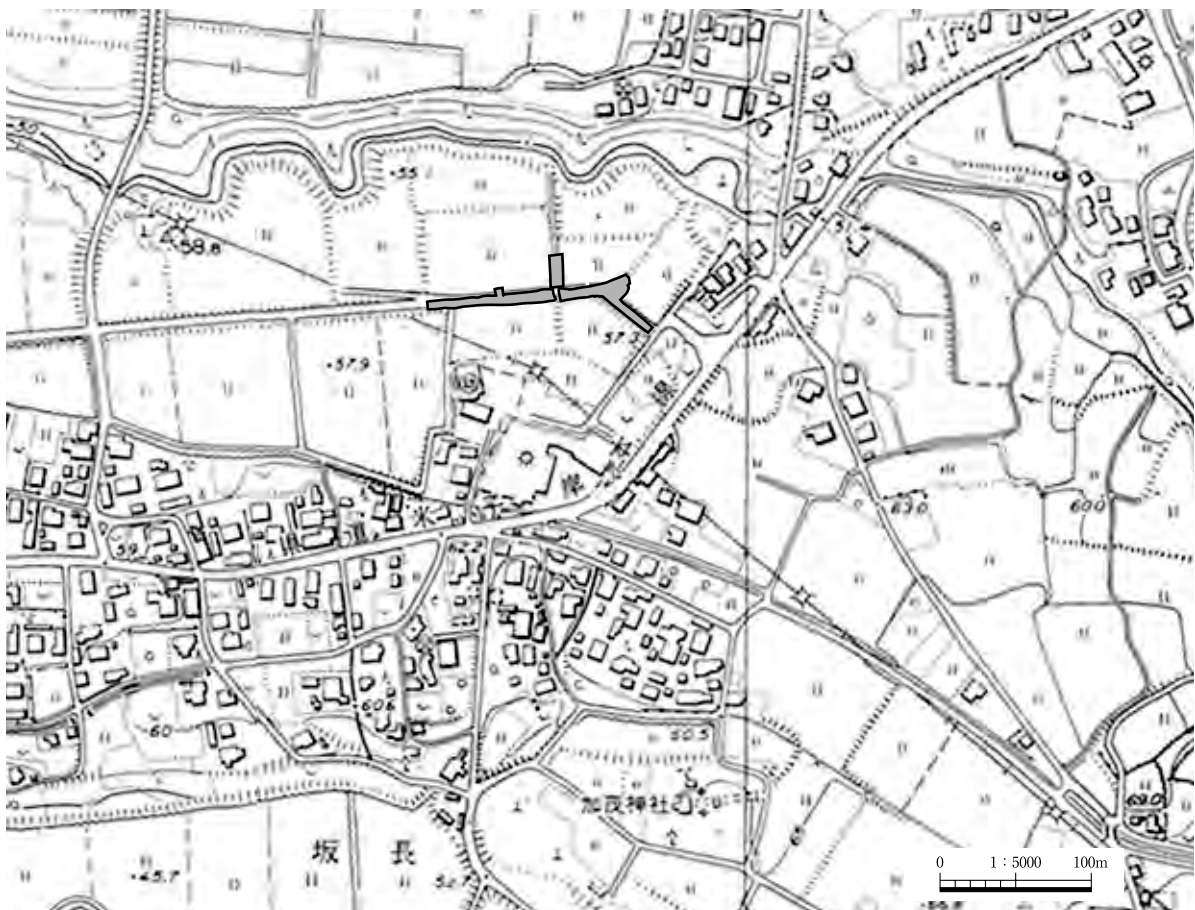


# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査にいたる経緯

大殿狐谷遺跡および長者原16・18号墳は、県道米子岸本線（坂長バイパス）改良工事に伴って発掘調査を実施した遺跡である。これらの遺跡は、鳥取県西伯郡伯耆町地内の道路ルート上に位置する周知の遺跡であり、岸本町（現伯耆町）教育委員会が平成16年度に隣接地で行った発掘調査の結果、古墳および古墳時代の集落跡の存在が確認されたものである。

この結果を受け、鳥取県西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会事務局文化課は遺跡の取り扱いについて協議を行ったが、現状保存は困難であり記録保存を行うとの結論にいたった。この結論に基づき、鳥取県西部総合事務所長は文化財保護法94条に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出し、事前発掘調査の指示を受けた。そのため、鳥取県西部総合事務所長は発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。そこで、当財団理事長が鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法92条に基づく発掘調査の届出を提出したうえで、当財団調査室岸本調査事務所が調査を実施した。



第1図 調査地位置図

## 第2節 調査の経過

大殿狐谷遺跡および長者原16・18号墳の調査は、道路工事の工程に関係して、2期に分けて実施した。

第1期は、平成19年4月12日から4月20日までで、農地への進入路部分を2箇所調査した。1区とした東側の進入路部分（調査面積30m<sup>2</sup>）を4月18日に、2区とした西側の進入路部分（調査面積25m<sup>2</sup>）を4月12日に、それぞれ重機による表土剥ぎを行った。発掘作業員を稼動しての調査は4月19日と20日の両日に実施し、1区では竪穴住居跡1棟を、2区では土坑1基を検出した。

第2期は、平成19年6月20日から8月23日までで、道路部分を調査した。

調査地は、長者原台地と呼ばれる洪積台地の縁辺近くに位置し、東西方向に走る道路の下にあたる。標高は最高所で約58.5mを測る。現状は平坦に近いが、これは昭和55年度から58年度にかけて実施された圃場整備の結果であり、本来の地形は台地縁辺部の複雑な微地形を反映して、やや起伏に富む。調査地の東側は、台地の舌状の張り出し部分があり、北東方向に緩やかに下っていく箇所にあたる。一方、調査地の西には狐谷の名をもつ深い谷があり、北西方向から入り込んでいる。調査地の中央を暗渠水路が横断しているため調査区を分割し、西側を3区（調査面積555m<sup>2</sup>）、東側を4区（調査面積530m<sup>2</sup>）とした。

6月20日から6月26日まで、重機による表土剥ぎを実施した。アスファルトと道路敷のバラスの下には、圃場整備時の造成土が盛られていた。この造成土は、ロームを主体とするもので、黒色土が一定量混ざっていた。造成土中には、本来黒色土に含まれていたと考えられる埴輪片などの遺物が多く含まれていたが、それらの遺物は遺跡の年代と矛盾しないので、造成土は客土ではなく、付近の土をローム層まで掘り下げた時のものと考えられる。実際、調査地の大部分はローム層までの削平を受けており、遺物包含層はほぼ残っていなかった。したがって、遺構の検出はローム層の上面で行うこととし、遺物が多く含まれる箇所では造成土を少し残した状態で表土剥ぎを止めた。

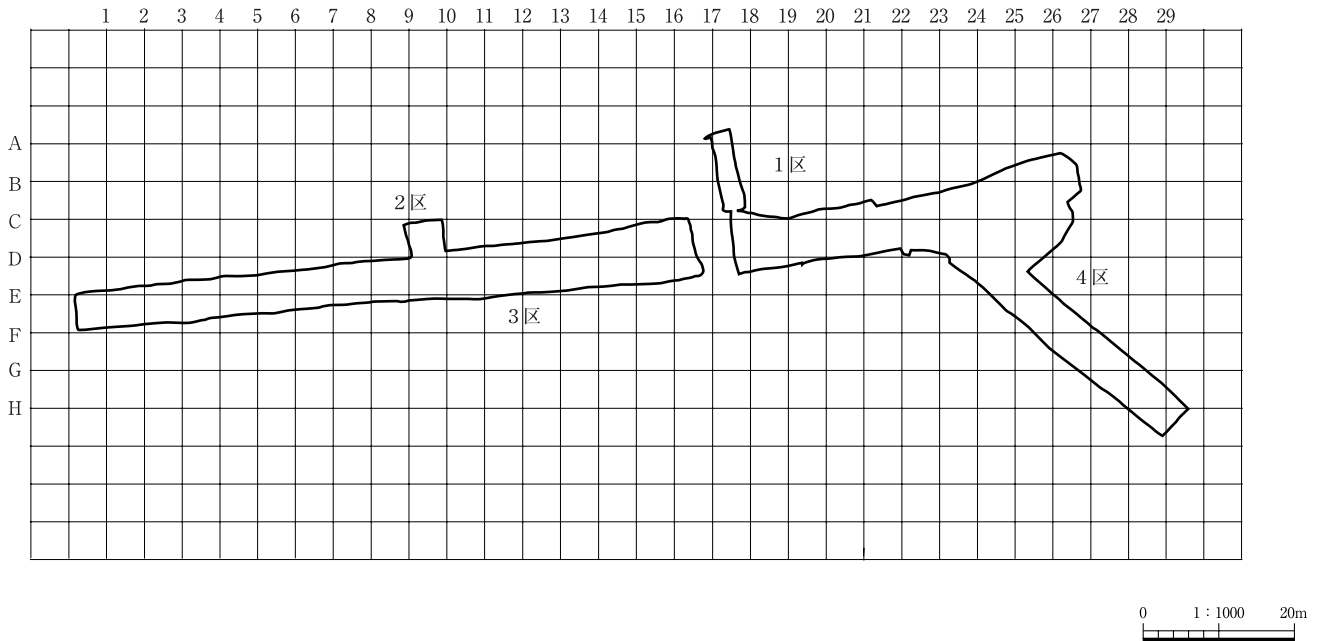
3区の西側は、通称狐谷に続く谷部となり、急激に深さを増す。調査区西端から約13mのところでは現道下2m、調査区西端では現道下5mで造成土下端の砂層（客土）および黒色土に達する。この黒色土は自然層であるが遺物は含まれていなかった。梅雨時の調査で、調査区の幅が狭い上に深く人工地盤のため崩落の危険性が大きいことと、頻繁にダンプカーが走る未舗装の道路に接していること、さらに、保育園児をはじめとする近隣住民が通行する状況を考慮した結果、重大事故が発生するおそれがあると判断し、3区西端の約65m<sup>2</sup>の部分は、重機での掘削時に遺構と遺物がないことを確認した上で、直ちに埋め戻しを行った。

表土剥ぎ後、測量業者に委託して、4級基準杭と公共座標第V系に基づく5m間隔の方眼杭を打設した。方眼軸には、北から南にアルファベットを、西から東に数字を付し、方眼の呼称は、例えばE9というように北東角の杭で代表した。

発掘作業員の稼動は7月3日に開始し、7月5日から人力による掘削に入った。調査は概ね3区西側から東方向に向けて実施し、3、4区合わせて4棟の竪穴住居跡や2基の円墳の周溝などを検出した。7月18日からは遺構の調査に着手し、長者原18号墳では、周溝内から多数の埴輪が出土した。盆休みと、雨天および台風による計7日間の作業中止を挟んで、8月21日に掘削作業を、8月23日に調査後の地形測量を終了し、全ての調査日程を終了した。



なお、長者原18号墳は、今回の調査時点では、平成16年度の旧岸本町教育委員会による同一古墳の調査結果を受けて、長者原17号墳と呼んでいた。しかし、昭和60年度に米子市教育委員会が調査した同じ古墳群に属する別の古墳が、既に長者原17号墳として報告されていることが判明したため、伯耆町教育委員会と協議のうえ、今回調査した古墳を長者原18号墳と名称変更することとした。



第2図 調査区グリッド図

## ○大殿狐谷遺跡および長者原16・18号墳の調査経過

- 4月12日 重機による表土剥ぎ（2区）
- 4月18日 重機による表土剥ぎ（1区）
- 4月19日～4月20日 1区および2区調査
- 6月20日～6月26日 重機による表土剥ぎ（3区および4区）
- 6月27日 基準点測量および方眼測量
- 7月3日 発掘作業員稼働開始
- 7月5日 3区掘削作業開始
- 7月6日 3区で竪穴住居跡S I 2およびS I 3を検出
- 7月9日 4区掘削作業開始
- 7月18日 遺構掘り下げ開始
- 7月26日 長者原18号墳周溝で多くの埴輪を検出  
4区で竪穴住居跡S I 5を検出
- 7月31日 岸本小学校児童ほか40名見学
- 7月31日～8月9日 長者原18号墳埴輪出土状況実測および取り上げ
- 8月6日 長者原16号墳周溝掘り下げ
- 8月11日～8月19日 盆休み
- 8月21日 遺構調査終了
- 8月23日 調査後地形測量を終え調査終了

### 第3節 調査体制

調査は以下の体制で実施した。

#### ○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 有田 博充

事 務 局 長 國弘 博之

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室 長 久保穰二郎（兼・県埋蔵文化財センター所長）

次長（事務） 中村 金一

文化財主事 西川 徹

事務職員 岡田美津子（事務局兼任） 福田早由里

#### ○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所 長 國田 俊雄

文化財主事 高橋 浩樹 坂本 嘉和（坂長第6遺跡担当）

高橋 章司（大殿狐谷遺跡および長者原16・18号墳担当）

#### ○調査協力

財団法人米子市教育文化事業団 西部土地改良区 伯耆町教育委員会

（五十音順、敬称略）



## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

大殿狐谷遺跡および長者原16・18号墳は、鳥取県西部、西伯郡伯耆町大殿に所在する。

周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変える。日野川の右岸は主に、大山のさまざまな火山噴出物からなる緩やかな台地で、第四紀更新世に形成された。一方、大殿狐谷遺跡等が位置する日野川左岸は主に、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北8km東西3kmにわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な洪積台地とで構成される。丘陵地帯は、第三期鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山砕屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤とし、上部はやはり大山上中部火山灰で覆われている。この他に、日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形も見られる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19年（1550）と元禄15年（1702）の洪水により、現在のような西寄りの流路になった。

大殿狐谷遺跡は、長者原台地の縁辺部に立地し、標高は58m前後である。長者原16・18号墳は、18基からなる長者原古墳群に属し、大殿狐谷遺跡内に重複して存在する。長者原台地上には、長者屋敷遺跡、諏訪遺跡群、福市遺跡、青木遺跡などの重要遺跡をはじめ、多くの遺跡が存在している。

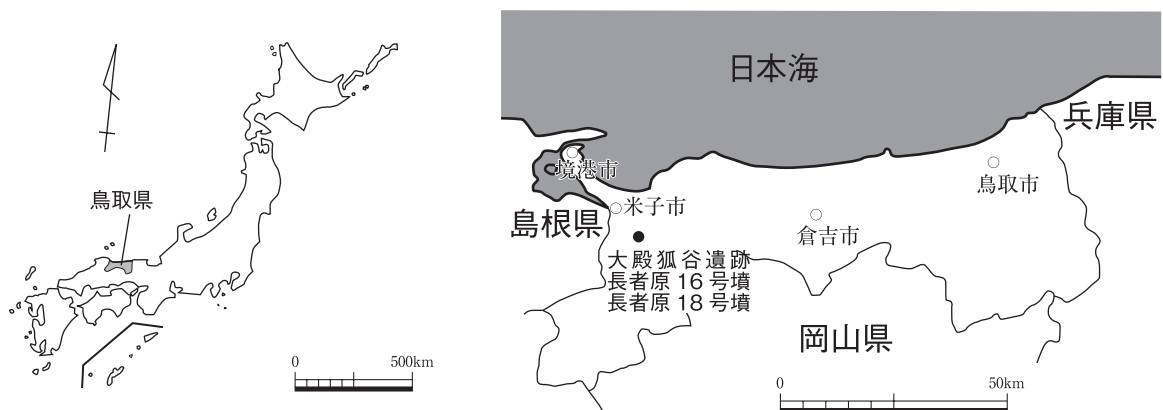
### 第2節 歴史的環境

#### 旧石器時代

長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡（24）では、ナイフ形石器がローム層中から出土した。2点のナイフ形石器はともに珪岩製で、小型の石刃を二側縁加工したものである。坂長村上遺跡（50）からも、黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している。この他に、泉中峰遺跡（79）と小波遺跡（80）からナイフ形石器が出土しているが、石器群が原位置でまとまって出土した例はまだない。

#### 縄文時代

坂長村上遺跡からは、多様な石材と形態の5点の尖頭器を中心とする草創期の石器群が出土した。他に、貝田原遺跡（61）、奈喜良遺跡（20）などで、サヌカイト製有茎尖頭器が見つまっている。



第3図 遺跡位置図

早期後半から、大山西麓では押型文土器を出土する遺跡が多く知られ、上福万遺跡（73）では集石遺構や土坑が多数検出されている。前期になると、中海沿岸にも集落が形成され、目久美遺跡（8）や陰田第9遺跡（9）では、土器や石器のほか、動植物遺体が豊富に出土している。中期になって新たに出現する遺跡は少なく、後期になると再び増加する。晩期には、古市河原田遺跡（12）をはじめ突帯文土器を伴う遺跡が多く見つかっている。周辺地域では非常に多くの落とし穴が発掘されていて、妻木晩田遺跡（83）で963基、青木遺跡（22）で228基、越敷山遺跡群（45）で341基を数える。年代の判明したものでは、後・晩期の例が多い。

### 弥生時代

前期の代表的な遺跡としては、目久美遺跡（8）や長砂第2遺跡（4）などの低湿地遺跡がある。両遺跡では、前期から中期にかけての水田跡が重層して検出され、農耕具などの木製品も多く出土している。この時期の集落は丘陵上にもあり、宮尾遺跡（28）や諸木遺跡（29）では環壕が発掘されている。特に清水谷遺跡（17）の環壕は内部に竪穴住居等をもたない点で注目される。

中期後葉以降は遺跡数が増加し、丘陵上には、妻木晩田遺跡（83）、青木遺跡（22）、福市遺跡（21）など大規模な拠点集落が出現する。越敷山遺跡群（45）は高い丘陵上に位置する集落跡で、多数の鉄器をもつ。同時期にこの地域には四隅突出型墳丘墓が分布し、妻木晩田遺跡洞ノ原地区・仙谷地区の墳丘墓群や父原墳丘墓群などが代表である。日下1号墓（75）は木棺墓群に、尾高浅山1号墓（76）は環壕集落に隣接して築造されているのが注目される。

なお、当地域では青銅器がほとんど出土しておらず、浅井土居敷遺跡（37）の環状の青銅器や、久古第3遺跡（60）の銅剣の可能性のある青銅器片などを挙げるのができるのみである。

### 古墳時代

主要な前期古墳には、三角縁神獣鏡が出土した前方後方墳と方墳の普段寺1・2号墳（35）、方墳で6基の埋葬施設をもつ日原6号墳（19）がある。当地域において前期に遡る前方後円墳は確認されていない。また、墳丘の規模も20m前後の比較的小さなものばかりである。

中期古墳では、全長108mの前方後円墳の三崎殿山古墳（26）が著名である。他には画文帯神獣鏡が出土した浅井11号墳（36）、宮前3号墳（32）といった小型の前方後円墳が築造されている。

後期に入ると古墳数は爆発的に増加し、多くの群集墳が営まれる。長者原台地上では諏訪古墳群や長者原古墳群（53）などが縁辺部に、丘陵地帯には越敷山古墳群が形成される。吉定1号墳（63）の割石小口積みによる持送り式横穴式石室や、東宗像5号墳（18）の横穴式箱式棺などは、九州地方との関連性を窺わせる。終末期には、陰田横穴墓群（9）や日下横穴墓群（75）などの横穴墓が造営される。

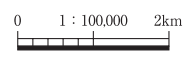
この時代の集落遺跡は、主に台地上や丘陵上に分布し、福市遺跡（21）や青木遺跡（22）のように、弥生時代後期から継続して営まれたものが多い。坂長第8遺跡（89）では中期中葉の竪穴住居跡が3棟発掘されていて、付近に比較的大規模の大きな集落跡が存在する可能性がある。

### 古代

白鳳期には、大寺廃寺（52）が創建される。東向きの法起寺式伽藍配置を取り、金堂の瓦積基壇と三段舍利孔を持つ塔心礎が確認されている。石製鴟尾は全国に他に1例しかない。創建時の瓦と同一文様の瓦は金田瓦窯（39）からも出土したという。付近の台地上には坂中廃寺（51）があり、塔心礎が残る。奈良末から平安初めの瓦が散布しているが、伽藍配置等は明らかでない。



1 錦町第1遺跡	17 清水谷遺跡	33 田住古墳群	49 坂長下屋敷遺跡	65 番原遺跡群	81 井手跨遺跡
2 久米第1遺跡	18 東宗像古墳群	34 宮前遺跡	50 坂長村上遺跡	66 須村遺跡	82 今津岸の上遺跡
3 米子城跡	19 日原古墳群	35 普段寺1・2号墳	51 坂中廢寺	67 真野ブナ遺跡	83 妻木晩田遺跡
4 長砂第1・2遺跡	20 奈喜良遺跡	36 浅井11号墳	52 大寺廢寺	68 藍野遺跡	84 晩田遺跡
5 長砂第3遺跡	21 福市遺跡	37 浅井土居敷遺跡	53 長者原古墳群	69 林ヶ原遺跡	85 向山古墳群
6 水道山古墳	22 青木遺跡	38 天王原遺跡	54 坂中第5遺跡	70 下山南遺跡	86 上淀廢寺跡
7 池ノ内遺跡	23 樋ノ口第4遺跡	39 金田瓦窯	55 岸本大成遺跡	71 長山馬籠遺跡	87 今在家下井ノ原遺跡
8 目久美遺跡	24 諏訪西山ノ後遺跡	40 両部太郎窯	56 岸本古墳群	72 石州府古墳群	88 坂長第7遺跡
9 陰田遺跡群	25 別所新田遺跡	41 荻名遺跡群	57 岸本遺跡	73 上福万遺跡	89 坂長第8遺跡
10 奥陰田遺跡群	26 三崎殿山古墳	42 田住松尾平遺跡	58 岸本要害跡	74 日下寺山遺跡	90 坂長下門前遺跡
11 新山遺跡群	27 天萬土居前遺跡	43 朝金古墳群	59 岸本下の原遺跡	75 日下古墳群	91 大殿狐谷遺跡
12 古市遺跡群	28 宮尾遺跡	44 朝金小チャ遺跡	60 久古第3遺跡	76 尾高浅山遺跡	長者原16号墳
13 吉谷遺跡群	29 諸木遺跡	45 越敷山遺跡群	61 貝田原遺跡	77 尾高城跡	長者原18号墳
14 橋本遺跡群	30 後塔山古墳	46 手間要害跡	62 口別所古墳群	78 尾高御建山遺跡	
15 福成石佛前遺跡	31 天万遺跡	47 荒神上遺跡	63 吉定1号墳	79 泉中峰・前田遺跡	
16 福成早里遺跡	32 宮前3号墳	48 長者屋敷遺跡	64 久古北田山遺跡	80 小波原畑遺跡	



第4図 周辺遺跡分布図



『和名類聚抄』によると律令制下において周辺地域は伯耆国会見郡にあたる。長者屋敷遺跡（48）と坂長下屋敷遺跡（49）では大型の掘立柱建物跡が確認され、会見郡衙の施設である可能性が高い。坂長村上遺跡（50）や坂長第7遺跡（88）からも円面硯や刻書土器など、官衙的な性質が強い遺物が出土した。なお、相見駅家も付近にあったと考えられる。北方の台地上では西山ノ後遺跡（24）で和同開珎と墨などを納めた胞衣壺が、樋ノ口遺跡（23）で石帯が出土している。

周辺地域には、律令制に関係する遺物を出土した遺跡が広く分布する。陰田遺跡群（9）では「館」「里長」などと記された墨書土器や木簡が、岸本大成遺跡（55）では転用硯と緑釉陶器が出土した。

古代山陰道は、大寺廃寺、坂中廃寺、長者屋敷遺跡を通過して、伯耆町岩屋谷から南部町天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諏訪から古市を抜ける北側のルートが想定されている。ただし、発掘調査による明確な確認には至っていない。

『延喜式』等によれば、古代にはこの地方から鉄が貢納されていたことが知られる。陰田遺跡群や新山遺跡群（11）などでは、製鉄・鍛冶関連の遺構と遺物が検出された。大殿狐谷遺跡の周辺でも、坂長村上遺跡や坂長第7遺跡では、多くの鉄滓や羽口などが出土している。

## 中世

平安時代には各地に荘園が発達し、遺跡周辺は八幡荘に含まれていたとされる。

大山寺の鉄製厨子には、承安元年（1171）の火災の翌年に伯耆の豪族紀成盛が大山権現御神体と厨子を奉納したことが記されている。伯耆町坂長には紀成盛が居宅を構えたという伝承が残る。

南北朝時代には大寺に安国寺が置かれた。要衝の地であり名和氏などの南朝勢力を抑える目的があったとされる。42坊を数える大寺院であったが、永禄8年（1566）に、杉原盛重に焼き討ちされた。

南北朝から戦国時代の動乱期には、山陰道沿いの要地を中心に、数多くの城砦が築かれた。小波城（80）、尾高城（77）、手間要害（46）は、文献にも登場する代表的な城跡である。このうち尾高城跡では、発掘調査により櫓跡や輸入陶磁器などが出土している。

## 近世

西伯耆は、吉川広家・中村一忠・加藤貞泰と領主交代を繰り返した末に、元和3年（1617）に、因幡・伯耆32万石を領する鳥取藩の一部として池田光政が領主になる。寛永9年（1632）国替えにより池田光仲が封入すると、周辺地域は藩の直轄領と寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の給所に属し、以後明治2年（1869）まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

坂長村は、明治11年（1878）に、坂中村と長者原村が合併して成立した村である。『伯耆志』の記載によれば、安政頃の坂中村は67戸280人で、長者原村はわずか2戸12人であった。

長者原台地では、石田村吉持家により佐野川用水の開削事業が実施された。事業は元和4年（1618）から数回の中断を経ながら約250年にわたり、文久元年（1861）にようやく完成を見た。これにより、荒蕪地であった長者原台地は水田・畑地となり、現在に至っている。

### 【参考文献】

地質調査所 1962『5万分の1地質図幅説明書 米子』（岡山一第18号）

山名巖 1964「山陰地方における第四紀末の諸問題」『鳥取県立科学博物館研究報告』

岸本町 1983『岸本町誌』

会見町 1996『会見町誌 続編』

米子市 2003『新修 米子市史』



## 第3章 大殿狐谷遺跡

### 第1節 遺跡の立地と層序

大殿狐谷遺跡は、長者原台地の南部、北側縁辺近くの平坦面に位置し、調査地の現地表での標高は57.2～58.5mを測る。周辺の地形は現況ではほぼ平坦であるが、これは昭和58年度に実施された圃場整備の結果である。旧地形では、遺跡の南東に台地上の舌状の張り出し部があり遺跡の東側を通過して緩やかに下っていく。北西からは深い谷が入り込んでいて、やや起伏に富んでいたと考えられる。遺跡中央の平坦な部分は、主に南から北方向に緩やかに下っていく。

遺跡の西には弥生時代～奈良時代の大塚墓ノ谷遺跡が隣接する。また、古墳時代後期の長者原古墳群の東半が遺跡に重複している。今回の調査地内にも、16号墳と18号墳の一部がかかっている。

昭和58年度には圃場整備に伴って、平成16年度には道路建設に先立って、岸本町教育委員会による発掘調査が実施されている。平成16年度の調査地は、今回の調査地の北側に隣接する。2度の調査を合わせて、長者原14～16号墳の周囲から、古墳時代前期から奈良時代にかけての竪穴住居跡7棟や掘立柱建物跡2棟などの遺構と、須恵器や土師器などが出土している。

調査地の調査前の状況は道路であった。この道路は、圃場整備時に、ローム層中まで掘削した土を練って造成した層の上に、バラスとアスファルトを敷いて造られていた。そのため、削平面以下はその後に攪乱を受けることがなく保存されていた。また、旧地形を高く削り残した側の縁に道路を通したため、隣接する町教育委員会の平成16年度調査地よりも、厚さにして約50cmの部分が掘削を免れていた。

調査地の基本的な層序は次のとおりである。

I層：バラス 厚さ約10cm

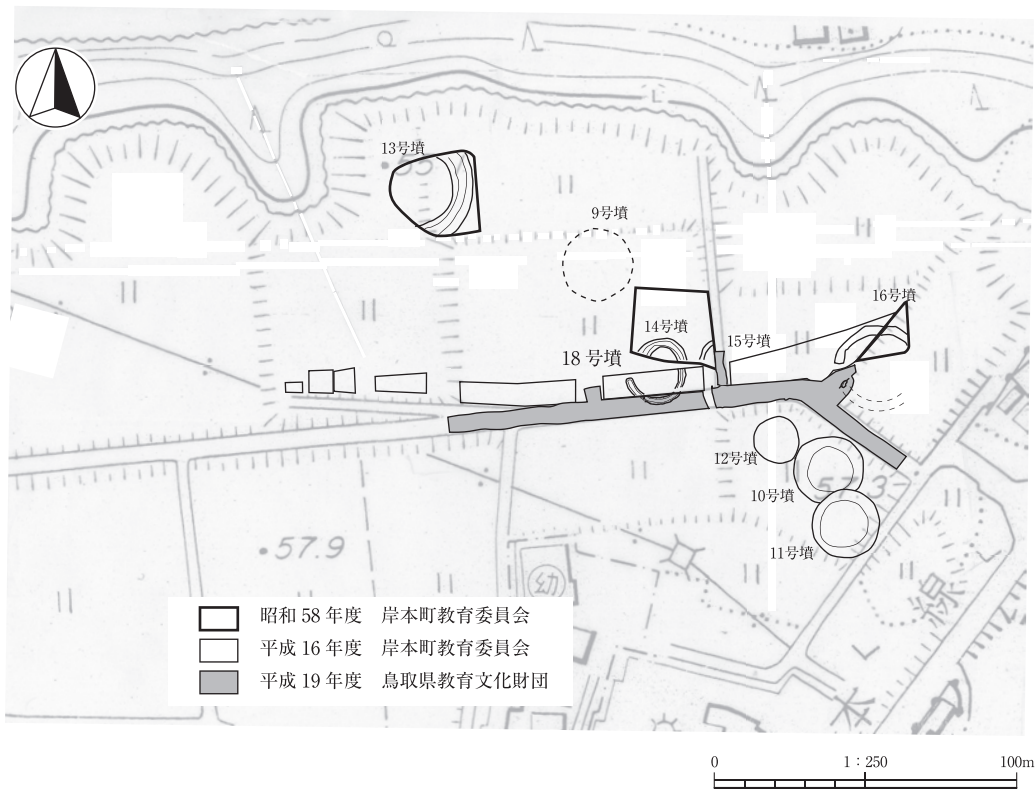
II層：造成土 厚さ約30～450cm

III層：橙色粘質土7.5YR6/6 ソフトローム層 厚さ15cm以上

調査地の本来の層序は、過去の削平と造成のため、ほとんど知ることができない。掘削は、ほとんどの場所でソフトローム層以下に及んでいて、漸移層以上はほぼ残されていなかった。1区と2区では、わずかに包含層が残る部分があったが、それによれば、漸移層の上には黒褐色土が堆積していたようである。

調査地の西端部分は、かつては深い谷地形だったため、造成土が厚く盛られていた。この部分のみ、造成土の下に黒褐色土が1層認められたが、遺構・遺物ともなかった。

造成土には多くの土器や埴輪などが含まれていた。中には長者原18号墳周溝の出土遺物と接合するものがあり、また、付近の他の遺構出土遺物と同様のものがほとんどであるので、造成土に含まれる遺物は、本来は調査地付近の包含層に属していたと考えられる。



第5図 過去の調査範囲

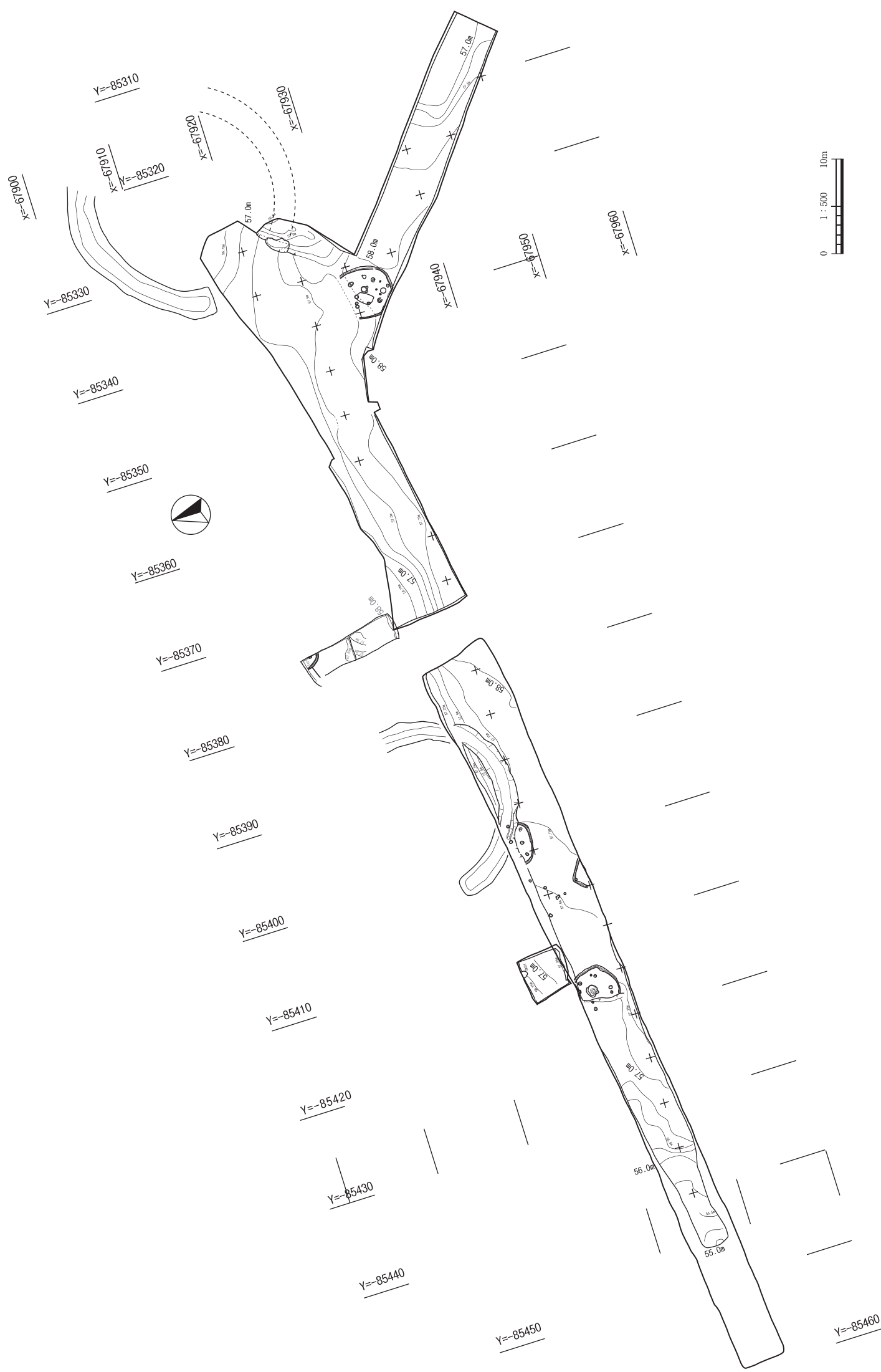
## 第2節 遺構と遺物

### 1. 概要

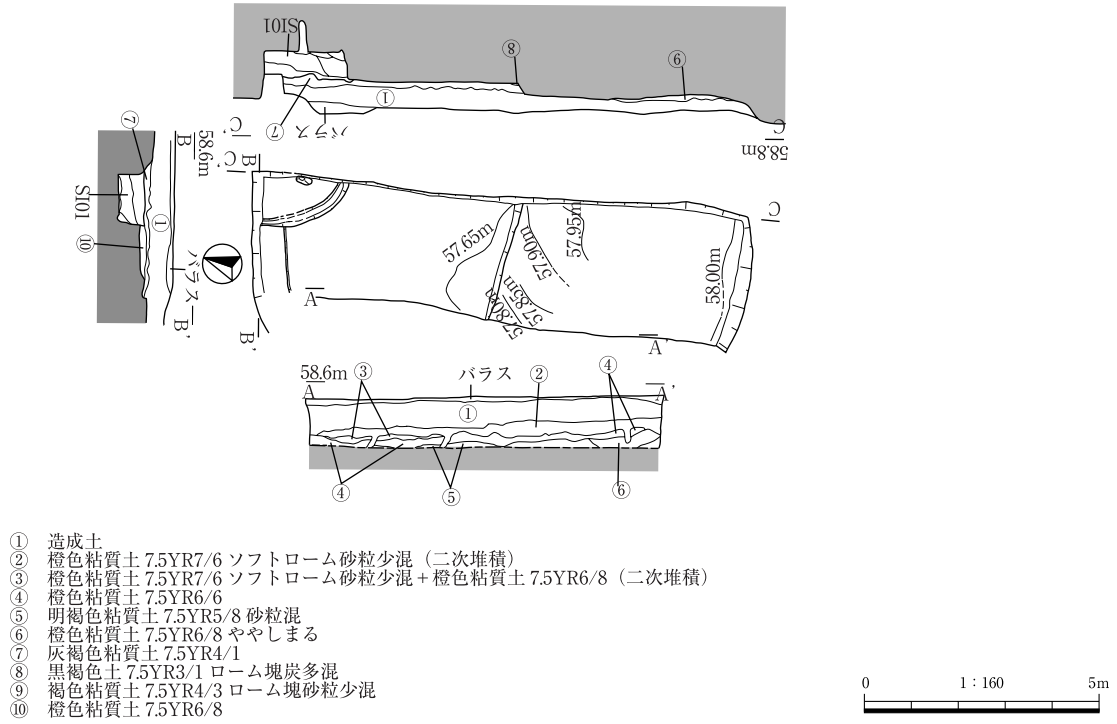
調査は第1章で述べたとおり、2期4区に分けて実施した。

遺構数は調査面積に比較して多く、1区から竪穴住居跡1棟、2区から土坑1基、3区から竪穴住居跡3棟と掘立柱建物跡1棟、4区から竪穴住居跡1棟を検出した。いずれも調査区にかかった一部か、削平後に残された部分かの調査となり、全体を調査できたものはなかった。主に弥生時代後期から古墳時代前期の遺構であり、長者原古墳群の築造に100年以上先立って集落が存在したことが分かった。過去の掘削の深度が深かったこともあり、溝やピットなどの他の遺構は全く認められなかった。

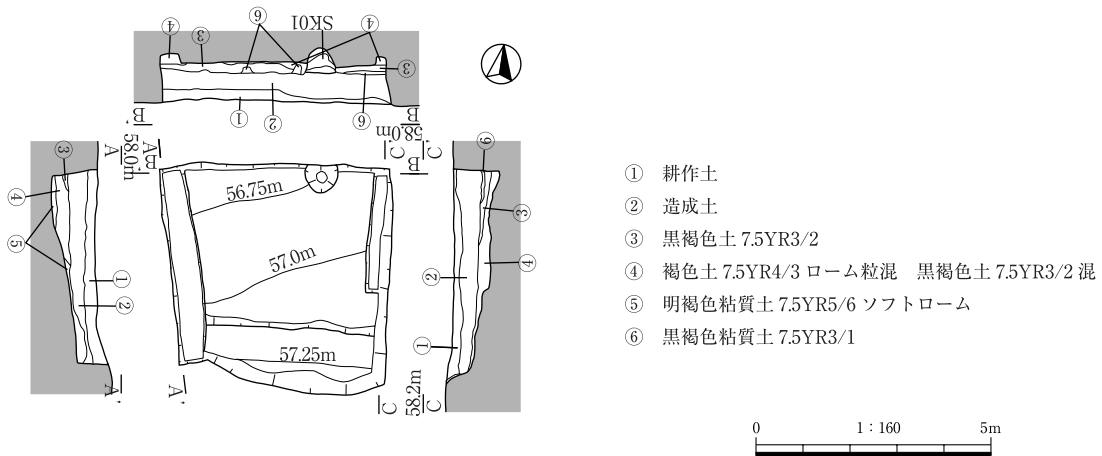
遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・土製品・石器・鉄器・鉄滓などが出土している。いずれの遺構も遺物の出土量は少なく、多くが細片である。遺物包含層がほとんど残っていなかったため、遺構外出土遺物は、造成土中のものが中心である。これらの中には本来長者原16・18号墳に属していたと考えられるものも多く含まれるが、両古墳の遺物と接合するもの以外は、大殿狐谷遺跡出土遺物として扱う。



第6図 遺構分布図

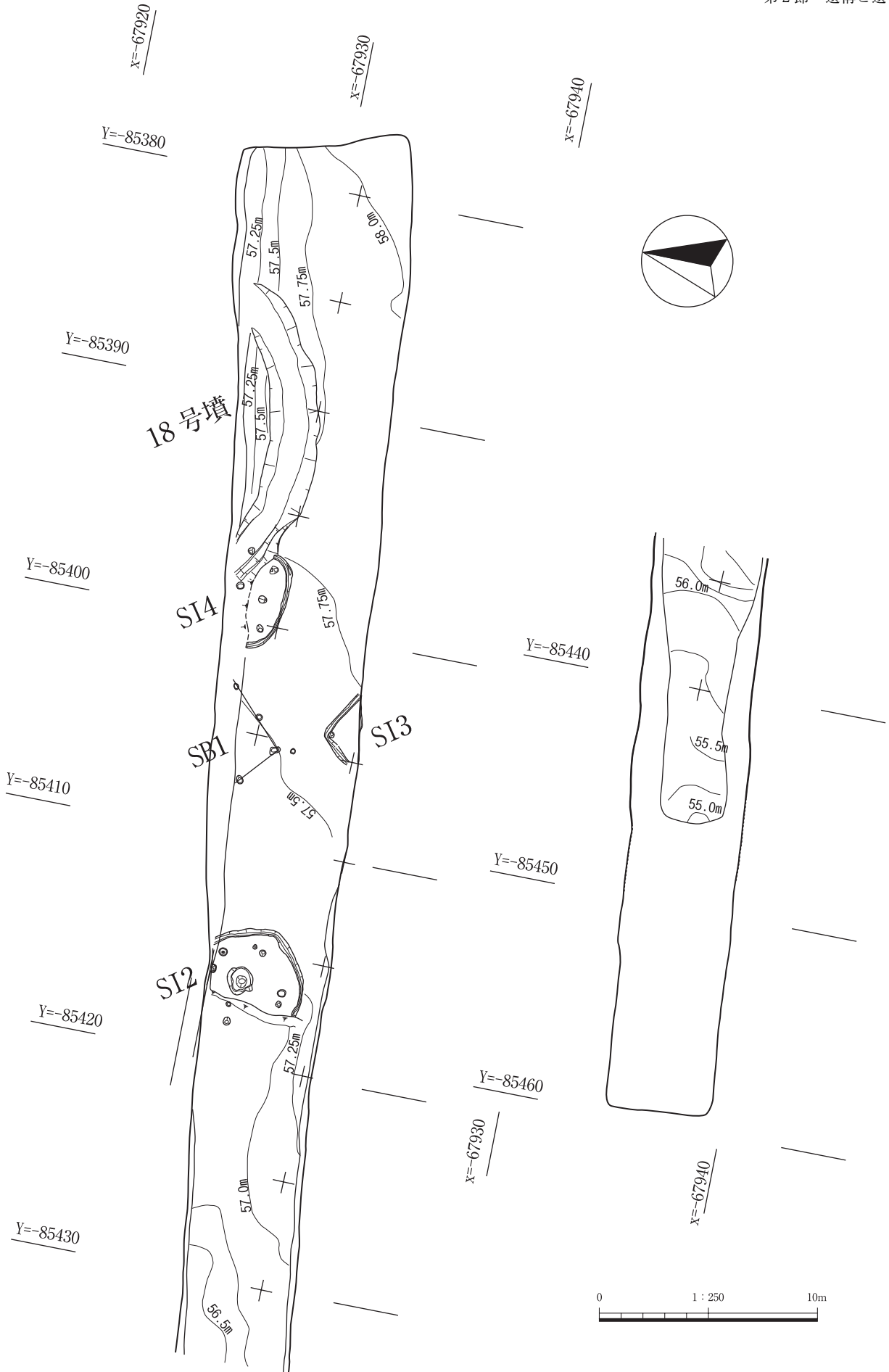


第7図 1区全体図

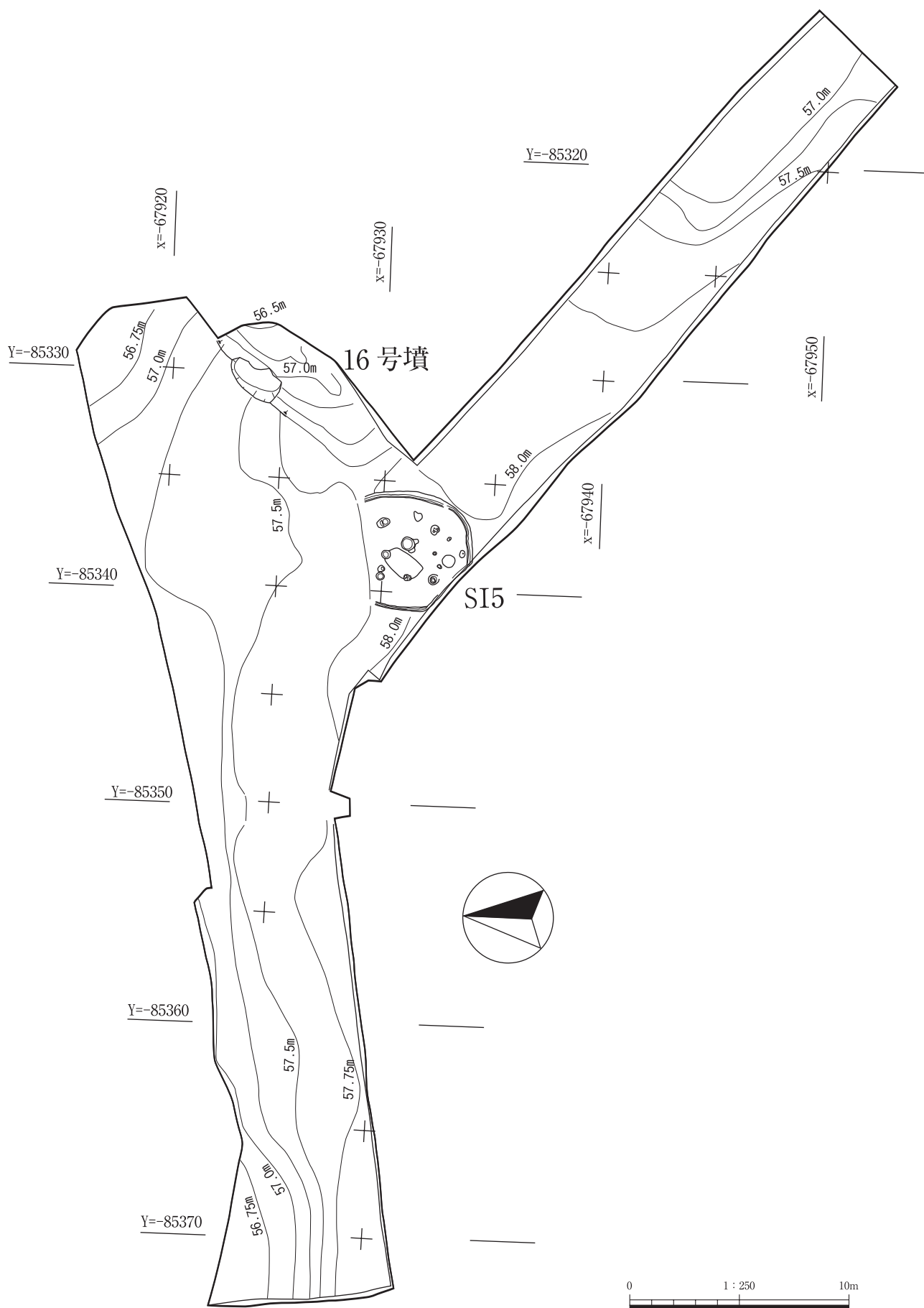


第8図 2区全体図





第9図 3区全体図



第10图 4区全体图

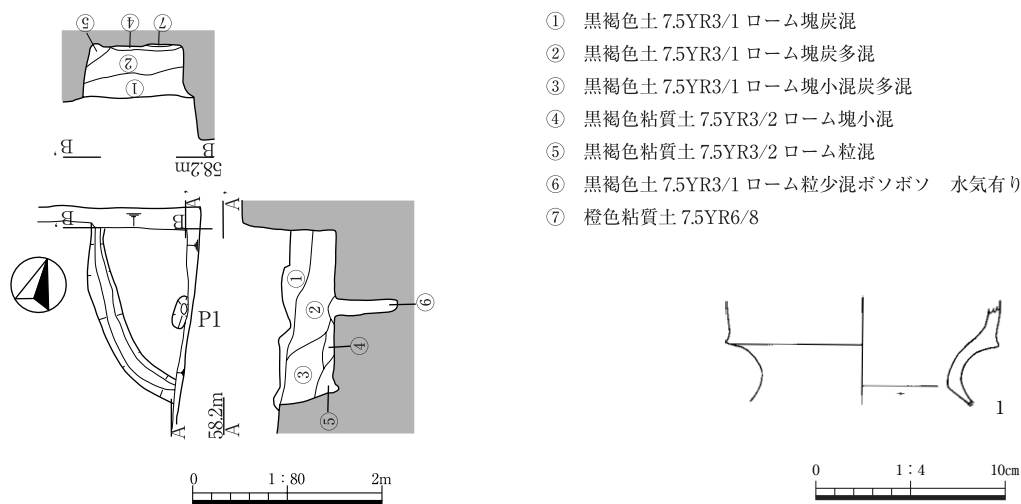
## 2. 竪穴住居跡

## S I 1 (第11図、図版2-2、2-3)

1区の北東端、標高57.6mの緩斜面上に位置する。調査区には全体の6分の1程しか含まれていないため、全形等は不明である。ローム層上面で検出し、壁高は58cmを測る。幅約15cm、深さ8cmの周壁溝が設けられている。支柱穴は1基が調査区内にかかっている、径35×16cm、深さ64cmと深い。配置から考えると4本柱であろうか。埋土は主に2層で、上層は黒褐色土主体、下層は黒褐色土にローム塊や炭が多く混ざっている。周堤の土が崩れて流れ混んだものと考えられる。位置的には長者原15号墳の墳丘下に埋没していたはずであるが、墳丘は削平されていて確認できなかった。また、古墳の築造に先立って住居跡を埋め立てたような状況も認められなかった。

遺物は埋土から土師器の小片が出土している。数は多くない。1は甕口縁部である。

古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。



- ① 黒褐色土 7.5YR3/1 ローム塊炭混
- ② 黒褐色土 7.5YR3/1 ローム塊炭多混
- ③ 黒褐色土 7.5YR3/1 ローム塊小混炭多混
- ④ 黒褐色粘質土 7.5YR3/2 ローム塊小混
- ⑤ 黒褐色粘質土 7.5YR3/2 ローム粒混
- ⑥ 黒褐色土 7.5YR3/1 ローム粒少混ボソボソ 水気有り
- ⑦ 橙色粘質土 7.5YR6/8

第11図 遺物観察表

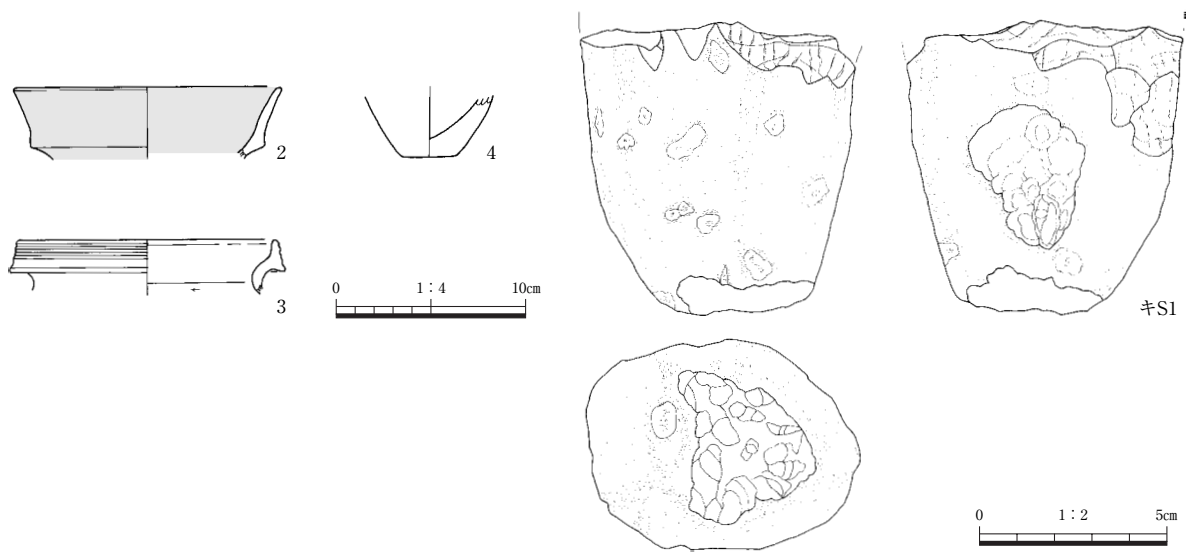
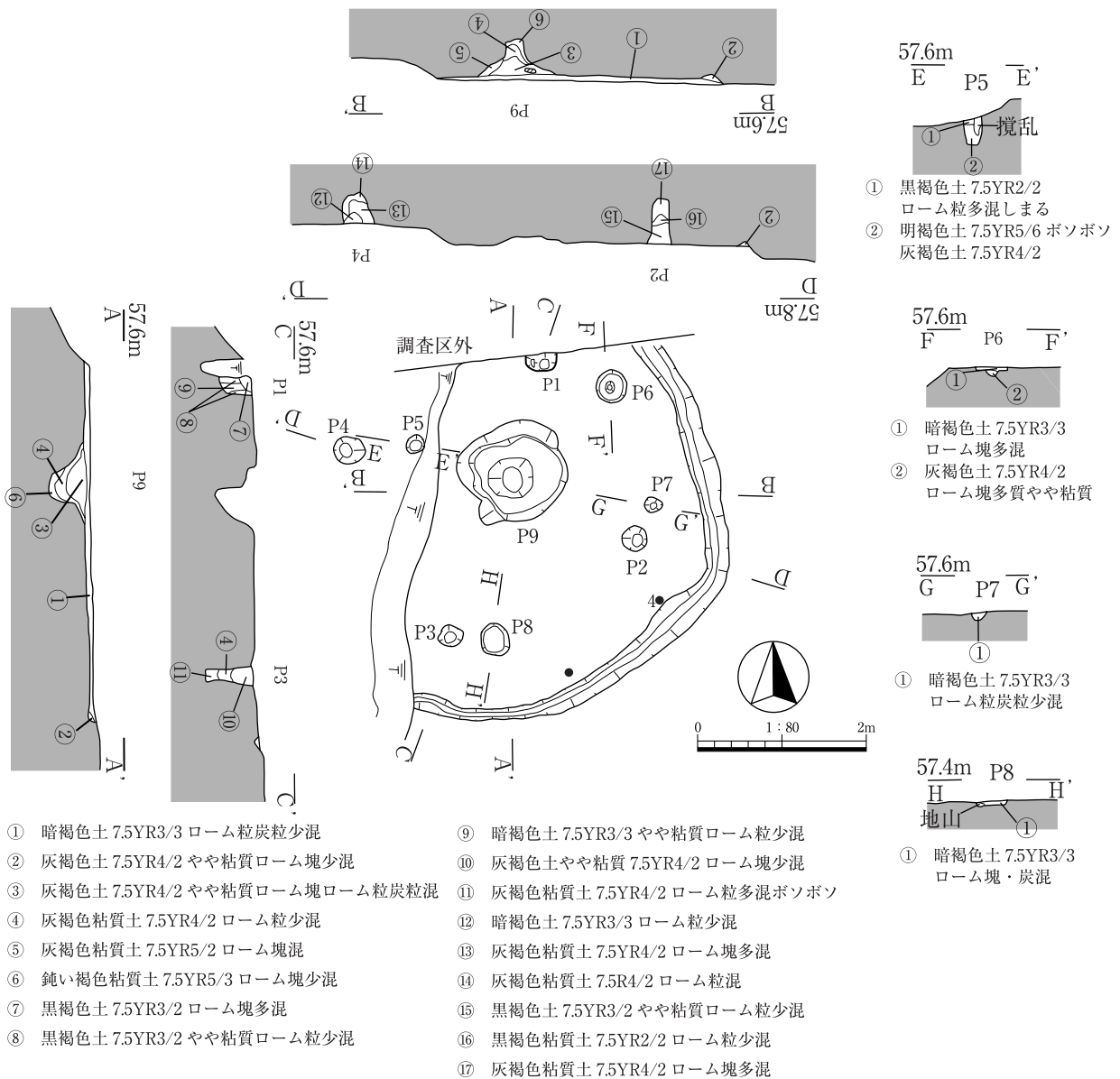
\*復元値 △現存値

遺物 番号	挿図 番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎 焼	土 成	色 調	備 考
1	11	S I 1 埋土	土師器 甕	— —	△5.3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 頸部以下ヘラケズリ	細かい砂粒を多く含む 良好	内面：淡橙色 外面：橙色		

第11図 S I 1 および出土遺物

## S I 2 (第12図、図版4-1、4-2)

3区の中ほど、標高57.2mの平坦面上に位置する。北側を道路建設で、西側を圃場整備で失っており、残っていたのは床面積の約5分の3である。西側は、床面は削られていたが、柱穴の下部が確認できた。全体に圃場整備時の削平が著しく、床面近くの10cmほどしか遺存していない。造成土を除去し、ローム層中で検出した。復元すると、直径約5.3mの円形の竪穴住居になる。南東側に角張りが認められるので、本来は多角形であったかもしれない。床面には幅14cm、深さ8cmの周壁溝が廻る。支柱穴はP1～P4の4基で、床面からの深さは、P1が39cm、P2が52cm、P3が56cmを測り、P4は約58cmに復元される。柱間寸法はそれぞれP1—P2間2.4m、P2—P3間2.5m、P3—P4間2.6m、P4—P1間2.6mと一定している。各支柱穴から50～80cm離れた位置にはそれぞれ1つずつのピットが設けられているが(P5～P8)、大きさや深さにばらつきがあるので、副え柱などの



第12図 S12 および出土遺物



## 第12図 遺物観察表

\*復元値 △現存値

遺物 番号	挿図 番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土 焼成	色調	備考
2	12	S I 2 P 9埋土1層	弥生土器 甕	*14.1 —	△3.7	内外面：風化のため不明	細かい砂粒を含む 良好	内外面：淡橙色	内外面とも赤色塗彩
3	12	S I 2 P 1埋土	弥生土器 甕	*13.6 —	△2.6	外面：ヨコナデ 口縁に3条の擬凹線 内面：ヨコナデ 頸部以下ヘラケズリ	1～2mmの砂粒を多く含む 良好	外面：暗褐色 内面：橙色	外面にスス付着
4	12	S I 2 床面	弥生土器 不明	— *3.0	△3.3	内外面：風化のため不明	1～2mmの砂粒を多く含む 良好	内外面：にぶい橙色	手捏土器
遺物 番号	挿図 番号	遺構 層位	型 式	長 (cm)	法 幅 (cm)	量 厚 (cm)	重量 (g)	石 材	備考
キ S 1	12	S I 2 P 1埋土	敲石	8.1	7.3	5.6	373.2	角閃石安山岩	

同一の機能を有していたかどうかは分からない。床面のほぼ中央には、中央ピット P 9 がある。2 段掘りの漏斗形を呈していて、上部は径1.2×1.0mの楕円形で深さ25cm、下部は径55cmの円形で深さ25cmを測る。縁部の西半には、周堤状の高まりが認められる。P 9 の埋土からは、礫が2つと、赤色塗彩を施した弥生土器の甕口縁部片2が出土した。

埋土の残りが悪かったこともあり、出土した遺物は少ない。3は埋土から出土した弥生土器の甕口縁部片で、擬凹線を施す。4は床面直上で出土した底部片である。器形は不明で、粗雑なつくりから手捏土器の可能性はある。キ S 1 は P 1 から出土した角閃石安山岩製敲石の破片である。先端部のほか表面にも使用による損耗が認められる。

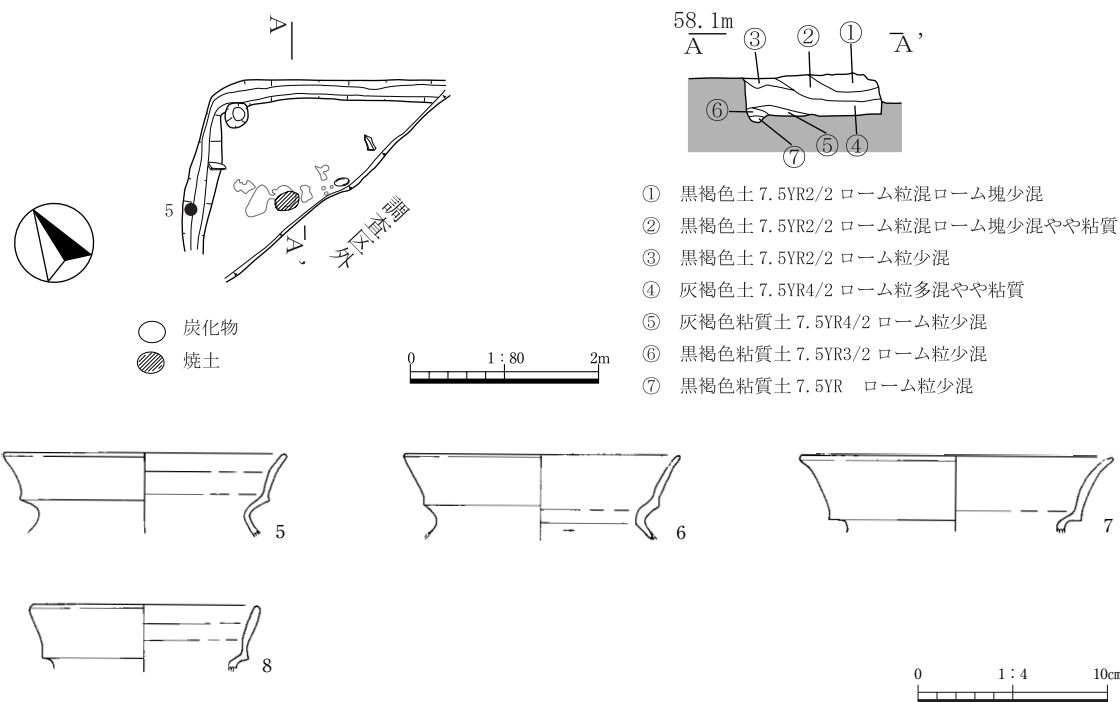
出土遺物から、弥生時代後期前葉の竪穴住居跡と考えられる。

## S I 3 (第13図、図版4—3)

3区中央東寄りの、標高57.6mの平坦面上に位置する。造成土を除去し、ローム層中で検出した。隅丸方形を呈する竪穴住居跡の、北西角部分6分の1程度が調査地内にかかっている、北辺は2.5m以上、西辺は1.8m以上を測る。壁高は残存部分で40cmを測り、幅20cm深さ8cmの周壁溝が床面を廻る。周壁溝は角部分でピット状の円形のふくらみを呈する。主柱穴もピットも調査地内には存在しない。4本柱であれば調査地内に主柱穴が1つかかると思われるので、2本柱または、壁立ちの住居であろう。周壁溝が比較的しっかりしていることや、各辺が直線的なことなどから、壁立ちの可能性がより高い。埋土は黒褐色土と灰褐色土の2層に大別でき、土器細片を多く含んでいる。床面には焼土と炭化物が薄くまばらに分布する。明瞭な炉跡等は認められない。

遺物は、埋土と床面から土師器が出土している。5～8は土師器甕の口縁部で、いずれも複合口縁で、良く似た形態を呈する。5は周壁溝内から、他は埋土中から出土した。

出土遺物から、古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。



- ① 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒混ローム塊少混
- ② 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒混ローム塊少混やや粘質
- ③ 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒少混
- ④ 灰褐色土 7.5YR4/2 ローム粒多混やや粘質
- ⑤ 灰褐色粘質土 7.5YR4/2 ローム粒少混
- ⑥ 黒褐色粘質土 7.5YR3/2 ローム粒少混
- ⑦ 黒褐色粘質土 7.5YR ローム粒少混

第13図 遺物観察表

\*復元値 △現存値

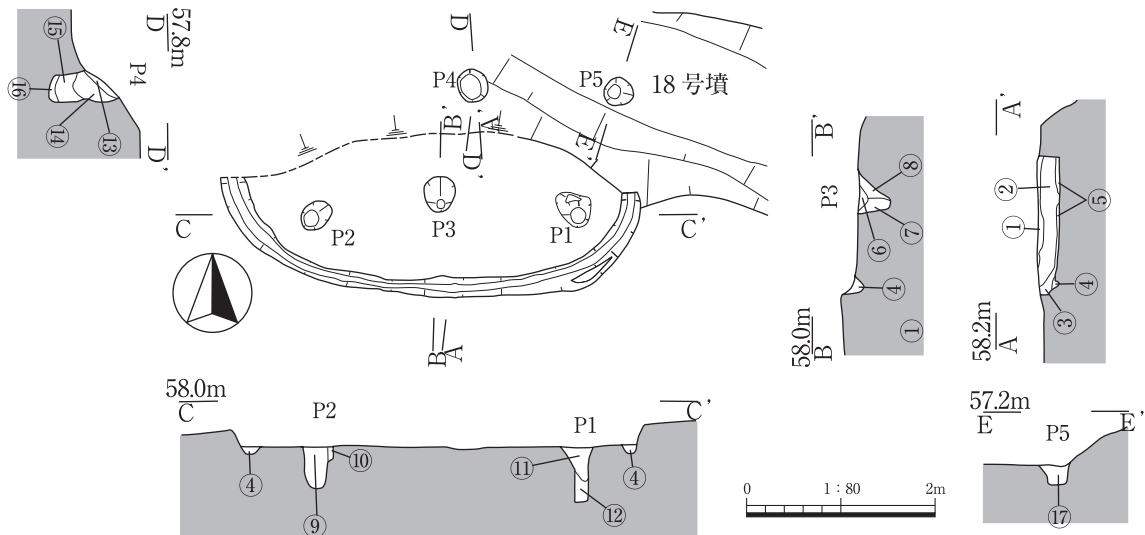
遺物 番号	押図 番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土 焼成	色調	備考
5	13	S I 3 床面	土師器 甕	*14.5 —	△4.3	外面：ヨコナデ 内面：風化のため不明	密 微砂粒を含む 良好	内外面とも橙色	
6	13	S I 3 2層	土師器 甕	*14.7 —	△4.5	外面：ヨコナデ 内面：ナデ 頸部以下ケズリ	密 微砂粒を含む 良好	外面：淡黄色 内面：橙色	
7	13	S I 3 ベルト2層	土師器 甕	*16.5 —	△4.0	内外面ともヨコナデ	密 微砂粒を多く含む 良好	内外面とも淡橙色	
8	13	S I 3 2層	土師器 甕	*11.7 —	△3.4	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 微砂粒を含む 良好	外面：茶褐色 内面：黒褐色	

第13図 S I 3 および出土遺物

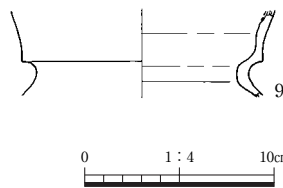
S I 4 (第14図、図版5)

3区中央東寄りの、標高57.7mの平坦面上に位置する。造成土を除去したローム層中で検出した。後世の、長者原18号墳の周溝の掘削と圃場整備によって大半を失っており、残っていたのは南側の3分の1程度である。1辺約4.4mの隅丸方形を呈し、幅10cm深さ5cmの周壁溝をもつ。壁高は残存高で20cmを測り、かなりの部分が削平されていて、埋土は最下層の1層しか残っていなかった。埋土からは少量の土師器片が出土している。

ピットは5基を検出した。このうちP4とP5は、18号墳周溝によって上部を削られており、下部のみが残っていた。互いに底面の高さが揃っていることと、S I 4の東西軸上に位置することから、この竪穴住居の柱穴に含めたが、他の柱穴よりも約50cm深いので、掘立柱建物などの別の遺構のものである可能性がある。確実に主柱穴と判断できるのはP1とP2で、床面からの深さはそれぞれ58cmと42cm、柱間距離は2.8mを測る。P3は床面からの深さが浅く、形も整わないが、竪穴住居の南北軸とP1—P2のラインにほぼ揃うので、柱穴であるかもしれない。



- ① 黒褐色土 7.5YR3/2 ボソボソ
- ② 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒少混ローム塊少混
- ③ 黒褐色土 7.5YR3/1 ローム粒少混
- ④ 黒褐色粘質土 7.5YR3/2 ローム粒やや粘質
- ⑤ ソフトローム橙色粘質土 7.5YR6/6
- ⑥ 黒褐色土 7.5YR2/7 ローム塊少混
- ⑦ 黒褐色粘質土 7.5YR2/7 やや粘質ローム塊混
- ⑧ 黒褐色粘質土 7.5YR2/7 やや粘質ローム粒少混
- ⑨ 黒褐色粘質土 7.5YR2/2 ローム塊混
- ⑩ 黒褐色粘質土 7.5YR2/2 やや粘質ローム塊多混
- ⑪ 黒褐色粘質土 7.5YR2/2 ローム塊炭混
- ⑫ 黒褐色粘質土 7.5YR3/2 ローム粒少混
- ⑬ 黒褐色粘質土 7.5YR3/2 ローム粒多混しまる
- ⑭ 黒褐色粘質土 7.5YR3/2 ローム粒少混やや粘質
- ⑮ 明褐色粘質土 7.5YR5/6 黒褐色土混
- ⑯ 灰褐色粘質土 7.5YR4/2 ローム塊混
- ⑰ 暗褐色土 7.5YR3/2 ローム粒混



第14図 遺物観察表

\*復元値 △現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土 焼成	色調	備考
9	14	S I 4 2層	土師器 甕	— —	△4.4	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 砂粒を多く含む 良好	内外面とも橙色	

第14図 S I 4 および出土遺物

遺物は土師器が出土している。9は甕の口縁部である。なお、18号墳周溝から出土した土師器3・4も、本来この竪穴住居の遺物であったものが、18号墳の築造時に混入した可能性がある。

古墳時代前期の竪穴住居跡である。

S I 5 (第15、16図、図版6、7)

4区中ほど、標高58.0mの緩斜面に位置する。北東方向に緩やかに下っていく尾根状の小さな高まりの先端にあたる。圃場整備による削平や攪乱が著しく、埋土は、住居中央部ではほとんど失われていて、最大でも約30cmしか残っていなかった。北側4分の1は削平され、南西側は調査区外にある。長径7.6m短径6.9mの短楕円形で、幅15cm深さ5cmの周壁溝が廻る。

柱穴は7基を検出した。このうちのP1～P3には、ほぼ同じ位置での柱の立て替えが観察される。P3では深い柱根を抜き取った後に、P2ではさらに石を入れて、半分ほどの深さで柱を入れ直しているのがよく分かる。柱穴および柱根の深さと通りをもとにすると、以下のような2時期の組み合わせになると思われる。

1期：P1～P5。P4以外が主柱穴で、床面からの深さはP2が65cm、P3が55cmを測り、P1は25cm、P5は35cmに復元できる。柱間寸法は、P1—P2が2.4m、P2—P3が2.4m、P3—P5が2.4m、P5—P1が2.5mで、ほぼ正方形に配置されている。P5には、柱を立てた後で柱穴にロームを多く含んだ土を詰めて固定している様子がよく残っており、柱の直径が15cm前後であることも分かる。P4は、P3とP5のちょうど中間にあり、床面からの深さは25cmと浅いので、梁を支える補助的な柱と考えられる。

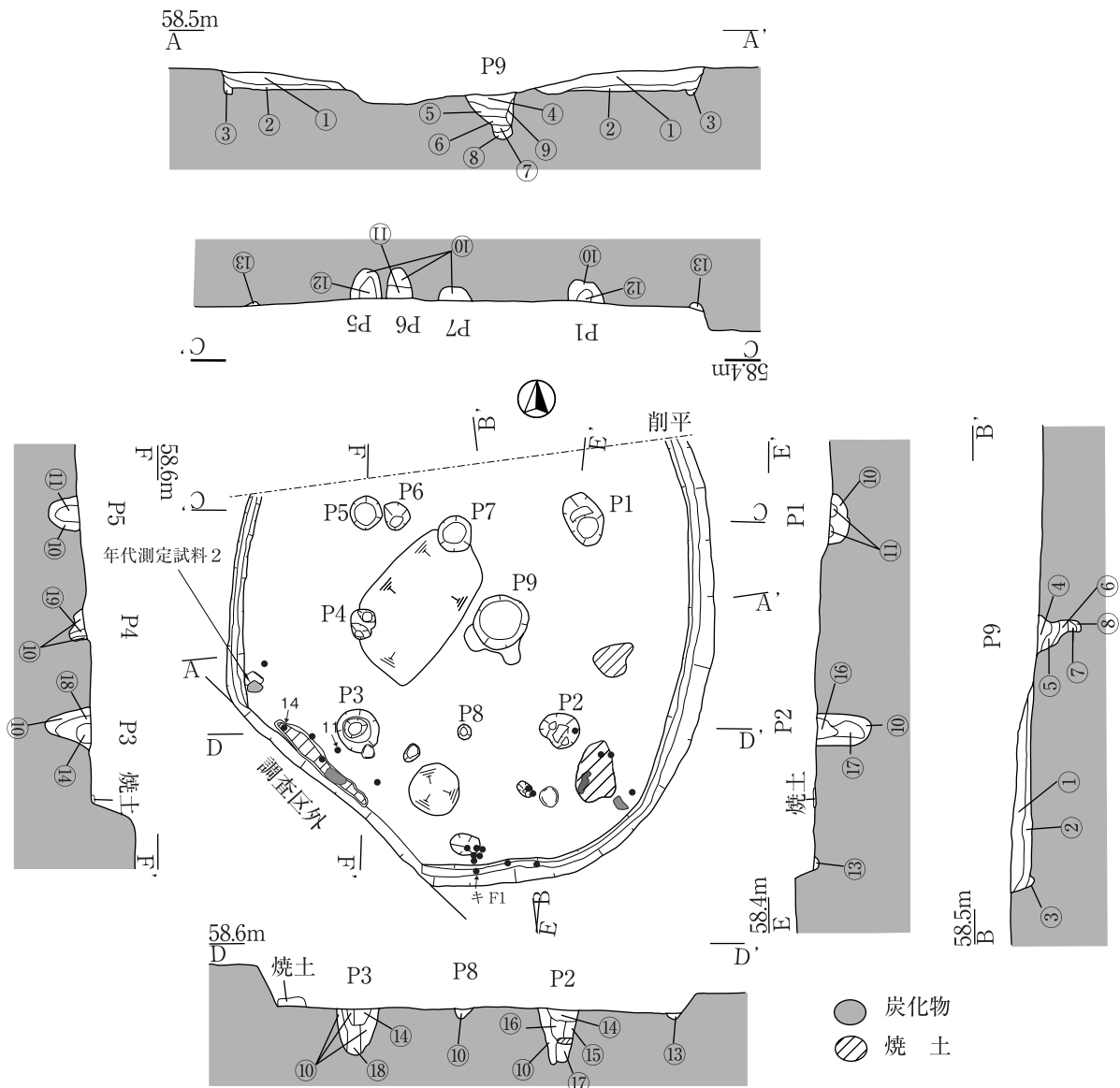
2期：P1～P3、P6～P8。主柱穴はP1～P3とP6である。床面から柱根の底までの深さは、P2が32cm、P3が20cmを測り、P1は20cm、P6は25cmに復元される。柱間寸法は、P1—P2が2.4m、P2—P3は1期と同じで2.4m、P3—P6が2.5m、P6—P1が2.1mを測る。P6が柱穴1つ分東に、P1が柱穴半分ほど南東に移動したため、配置は菱形になるが、柱間寸法は1期とほとんど変わらない。P8はP2とP3のほぼ中間に位置し、床面からの深さは12cmを測る。梁を支える補助的な柱で、1期のものの可能性もある。P7はP6から70cmの位置にあり、柱の通りからはやや内側にずれる。床面からの深さは25cmに復元される。位置的には疑問が残るが、ロームを主体とした良く締まった土で固められているので柱穴と考えられる。P8と同様の性格をもつものであろうか。

柱穴の配置がほとんど変わっておらず、したがって柱間寸法もほぼ同じことや、床面や周壁溝などには手が加えられていないことから、1期から2期への建て替えは、もとの材を用い、柱の立て直しを中心としたものと考えられる。柱根が浅くなっているのは、土中であって痛んだ部分を除去したためと推定される。

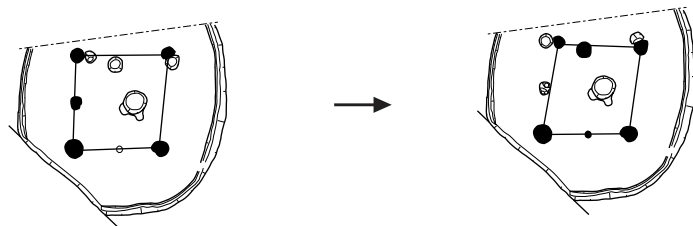
床面のほぼ中央に、中央ピットP9が設けられている。直径60cmの円形で、床面からの深さは最も深いところで60cmに復元される。断面形は偏りがあるため整わない。ピットの埋土には炭が多く含まれているが、焼土などは認められない。

床面と、床面から少し浮いた状態で、焼土や炭化物が検出されている。住居の南側に主に分布するが、これはこの部分の埋土の残りが良かったためで、本来は床面全体に及んでいたと思われる。炭化物はイネ科植物と思われるものが中心で、梁や垂木のような炭化材と呼べるものは皆無であった。埋土から出土した礫にも被熱したものがあつたので、住居が火を受けていることは明らかであるが、廃絶時かその少し後のことと考えられる。

遺物は埋土と床面から、土師器および鉄器と石器が出土している。10と11は甕の口縁部で、11は床面からの出土である。12は鼓形器台の口縁部、13は低脚杯の脚部。14は床面から出土した大型の土器の破片で、山陰型甕形土器の広端の口縁部と思われる。いずれも弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてのものであろう。キF1は周壁溝内から出土した鉄製品で、板状鉄斧の破片と考えられ、鑄造品の可能性がある。キS2は小型の黒曜石製石核で、折れた剥片の打面部を素材に、数枚の小さな剥片を取ったもの。弥生時代以前のもので、埋土上層からの出土なので、流れ込んだものであろう。

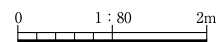


- |                              |                              |
|------------------------------|------------------------------|
| ① 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム塊混炭混      | ⑪ 灰褐色粘質土 7.5YR4/2 ローム塊多混黒色土混 |
| ② 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム塊炭混やや粘質   | ⑫ 黒褐色土 7.5YR4/2 ローム塊混しまる     |
| ③ 灰褐色土 7.5YR4/2 ローム粒混        | ⑬ 灰褐色土 7.5YR4/2 やや粘質炭ローム粒混   |
| ④ 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム塊・炭混やや粘質  | ⑭ 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒混炭混      |
| ⑤ 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒・炭混やや粘質  | ⑮ 明褐色粘質土 7.5YR5/6 灰褐色土混      |
| ⑥ 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム塊・炭多混やや粘質 | ⑯ 暗褐色土 7.5YR3/3 ローム塊・炭混      |
| ⑦ 黒褐色粘質土 7.5YR3/2 ローム塊・炭混    | ⑰ 暗褐色土 7.5YR3/2 ローム塊・炭混やや粘質  |
| ⑧ 灰褐色粘質土ローム塊混・炭多混            | ⑱ 黒褐色土 7.5YR3/2 やや粘質ローム塊多混   |
| ⑨ 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒少混やや粘質   | ⑲ 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム塊混やや粘質    |
| ⑩ 明褐色粘質土 7.5YR5/6 黒色土しまる     |                              |



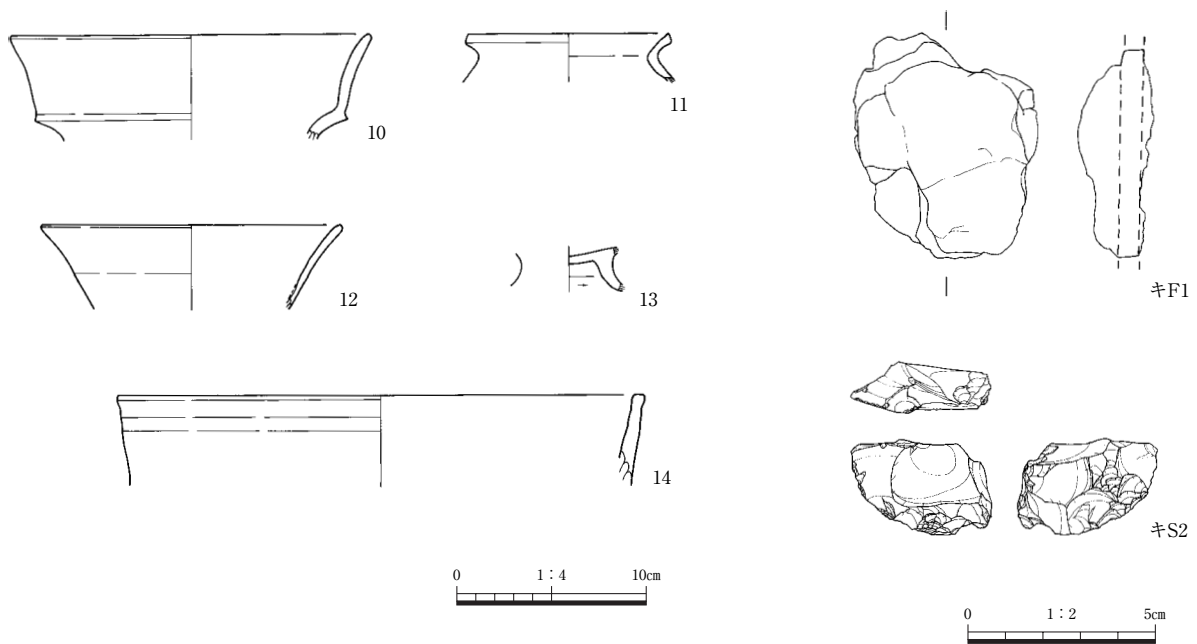
1期

2期



第15図 S15





第16図 遺物観察表

\*復元値 △現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土 焼成	色調	備考
10	16	S I 5 1層	土師器 甕	*18.9 —	△5.5	内外面ともヨコナデ	密 3.5mm以下の砂礫を多く含む 良好	内外面：にぶい黄橙色	
11	16	S I 5 床面	土師器 壺	*10.6 —	△2.5	内外面ともヨコナデ	密 2.5mm以下の砂礫を多く含む 良好	内外面：にぶい黄橙色	
12	16	S I 5 2層	土師器 器台	*15.9 —	△4.5	外面：ヨコナデ 内面：風化のため不明	密 1mm以下の砂粒を多く含む 良好	内外面：浅黄橙色	
13	16	S I 5 1層	土師器 低脚杯	— —	△2.3	外面：ヨコナデ 内面：ナデ 脚部以下ケズリ	密 3mm以下の砂礫を多く含む 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい黄橙色	
14	16	S I 5 床面	土師器 甕形土器?	*29.8 —	△4.8	内外面ともヨコナデ	密 1mm以下の砂粒を多く含む 良好	外面：濃い灰色 内面：にぶい黄橙色	
遺物番号	挿図番号	遺構層位	型式	長(cm)	法幅(cm)	量厚(cm)	重量(g)	石材	備考
キS2	16	S I 5 1層	石核	2.5	3.5	1.4	11.1	黒曜石	

第16図 S I 5 出土遺物

床面から出土した炭化物の放射性炭素年代を測定したところ、1580BP±30という値が得られた(第6章参照)。暦年較正年代では2世紀末を中心とした値となり、1度の建て替えを経ていることを考えると、妥当な年代と思われる。

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡である。

### 3. 掘立柱建物跡

#### S B 1 (第17図、図版7-4)

3区中ほどの東寄り、標高57.5mの平坦面に位置する。造成土除去後のローム層中で検出した。圃場整備により、北側は既に失われ、残された柱穴も最下部以外は削平されてしまっている。主柱穴は4基残っていて、建物の規模は2間以上×1間以上となる。2間の方向を仮に長軸とすれば、北東方向に44度振れている。柱穴はそれぞれ直径30cm前後で、検出面からの深さも12~20cmでほぼ揃う。柱間距離は、東辺のP1—P2が1.8m、P2—P3が1.7m、南辺のP3—P4が2.2mで、辺ごとにばらつきがあるようである。P2とP4は柱の通りが外側にずれている。柱穴の小ささと並びの粗雑

さからみると、小規模で簡易な建物であったと考えられる。角に位置するP3は不整形で、柱は抜き取られているようだ。P3から対角線方向と反対側0.8mの位置に、径25cm深さ25cmのピットP5がある。軒を支えるためのものであろうか。

遺物が出土していないため、時期は不明である。東側にはS I 4が隣接または切り合って存在し、南側にはS I 3が1.8mの間隔を置いて位置する。特にS I 3は、軸の方向がほぼ一致し、辺も揃うので、同時存在した可能性がある。

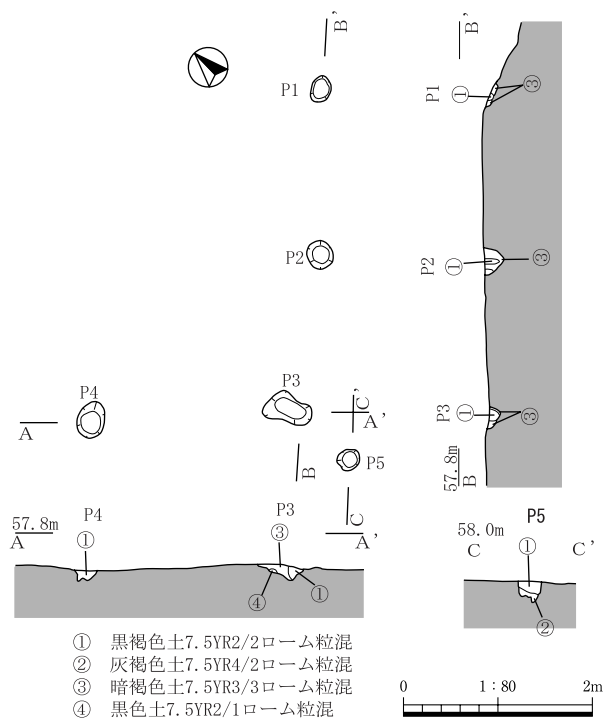
古墳時代前期のもの可能性が高い掘立柱建物跡である。

#### 4. 土坑

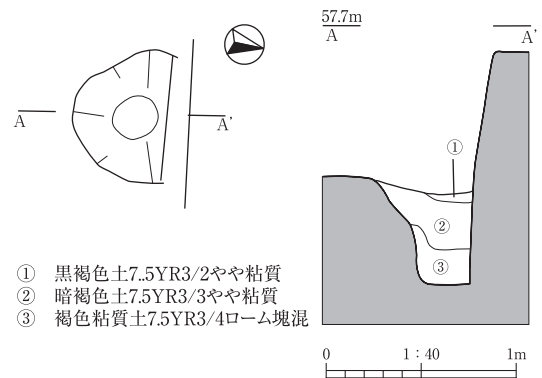
##### SK 1 (第18図、図版2-5)

2区北端の標高57.0mの緩斜面上に位置する。一部が調査区外にかかっている。造成土を除去した黒褐色土中で検出した。平面形は直径70cmの円形で、断面形はU字形を呈し、明瞭な底面をもたない。検出面からの深さは55cmを測る。埋土の状況から、自然に埋没したものであると考えられる。

遺物は出土していない。時期・性格とも不明の土坑である。



第17図 SB 1



第18図 SK 1

## 5. 遺構外出土遺物（第19、20図、図版8—2、10、19—2、21）

遺構外からは、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・土製品・鉄滓・砥石などが出土している。多くは造成土中からの出土で、本来属していた層位や遺構を推定できない。しかし、造成土から出土した遺物と長者原18号墳の遺物が接合した例があることや、付近の遺構の出土遺物と年代が矛盾しないことから、もともとは、この遺跡に属していたものと考えられる。

### 須恵器

15は杯蓋、16と17は杯身、18は壺の口縁部で、すべて6世紀前半のものである。いずれも長者原16号墳を壊して取り付けられた農地進入路から出土したので、本来16号墳に属していた可能性が高い。

### 土師器

19は1区の木根穴から出土した小型の甕の口縁部で、古墳時代後期のもの。20は低脚杯の脚部で4区造成土出土。21は甕口縁部で8～9世紀のもの、22は杯で12世紀頃のもの。それぞれ3区の旧耕作土と造成土から出土した。

### 円筒埴輪

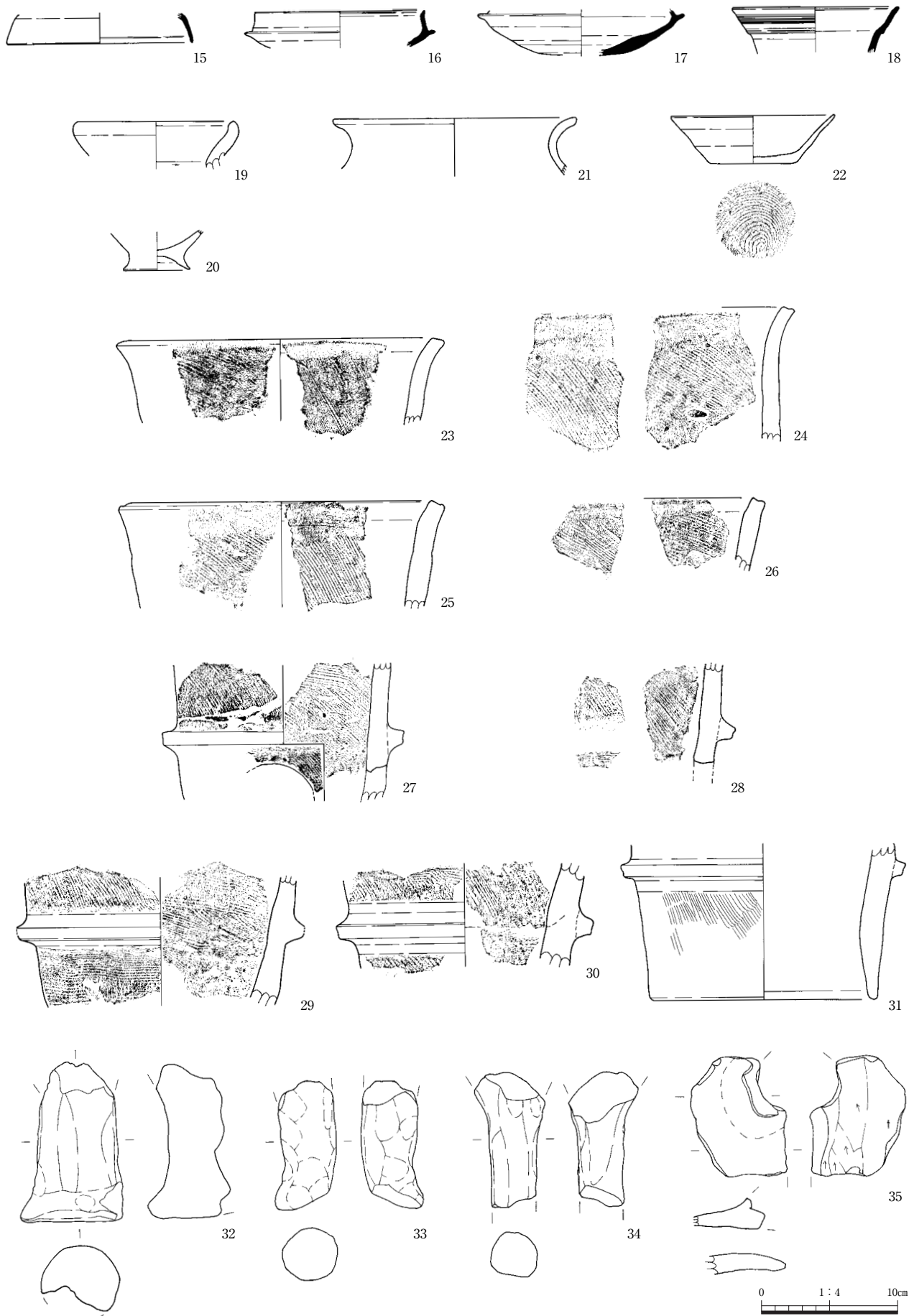
23から31は円筒埴輪の破片で、いずれも須恵質である。口縁部（23～26）は、口縁内面に稜を形成するほどの強いヨコナデにより外反させる。外面には1次調整のナナメハケを施し、中段には突帯貼り付け後にB種と見られるヨコハケを施す例が多い（28～30）。内面は器体上半のみに1次のナナメハケを施す。基底部の再調整は倒立させてナデを加えるのみである（31）。以上の技術的・形態的特徴は、以前および今回の調査で長者原16号墳から出土した埴輪と共通するので、これらの埴輪は、本来は16号墳のものであったと思われる。23と24は須恵器が出土したのと同じ農地進入路から、他は4区の造成土中から出土した。

### 土製品

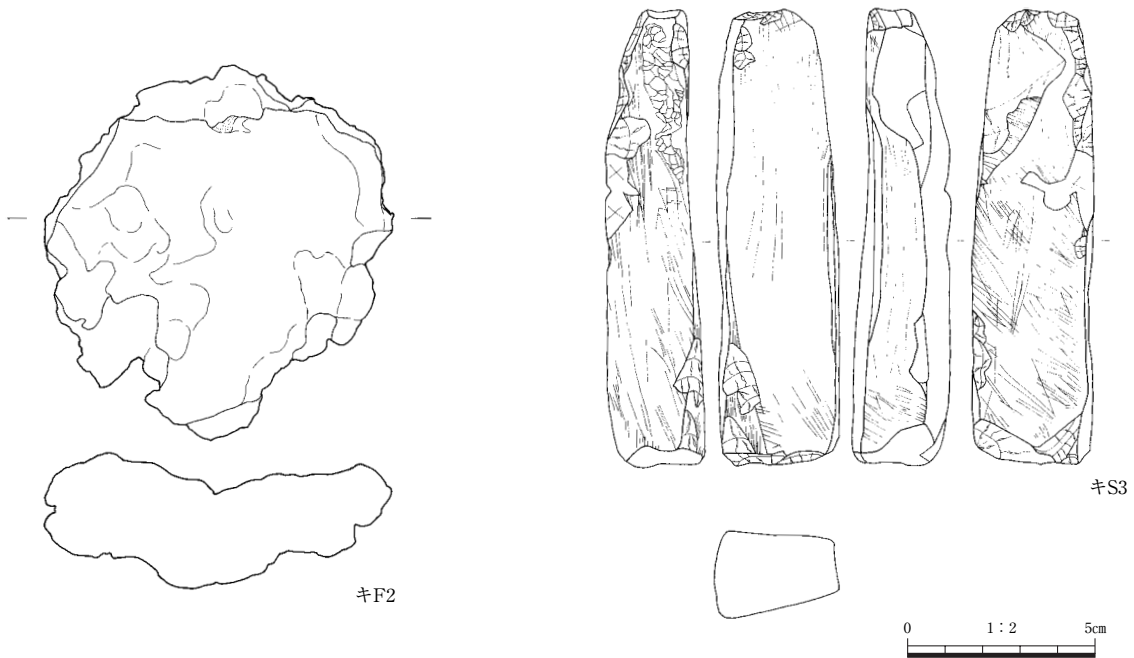
32は土製支脚の脚部破片。2区造成土からの出土で、底部は中実で平坦である。33は1区の造成土から出土したもので、手捏ねにより粗雑に成形する。土馬の脚であろうか。34は3区造成土出土の不明土製品の破片。T字状を呈し、棒状部はやや湾曲する。粗いケズリで仕上げる。35は3区造成土出土の不明土製品。内面はケズリで仕上げるが外面は風化のためよく分からない。端部の一部を半円に抉り、把手か脚のようなものを取り付けていたようである。竈に似るが、通常の竈としては薄すぎるので、ミニチュアかもしれない。

### 鉄関連遺物

キF2は椀形鍛冶滓、キS3は砥石で、ともに3区造成土からの出土。詳細は48ページの鉄関連遺物観察表に記載する。長者原18号墳とは少し離れた場所での出土であり、18号墳周溝の上層に廃棄された古代の鉄関連遺物とは関係がないかもしれない。



第19図 遺構外出土遺物(1)



第20図 遺構外出土遺物（2）

第19図 遺物観察表

\*復元値 △現存値

遺物 番号	押図 番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土 焼成	色調	備考
15	19	C26 造成土	須恵器 杯蓋	*13.7 —	△2.2	内外面とも回転ナデ	密 良好	内外面：灰色	
16	19	C26 造成土	須恵器 杯身	*12.5 —	△2.7	内外面とも回転ナデ	密 良好	内外面：灰	
17	19	C26 造成土	須恵器 杯身	— —	△3.4	内外面とも回転ナデ 底部外面：回転ケズリ	密 1mm以下の砂粒を含む 良好	内外面：灰色	
18	19	C26 造成土	須恵器 壺	*12.3 —	△3.3	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ後6条の沈線	密 良好	外面：濃灰色 内面：灰色	
19	19	1区 根攪乱	土師器 甕	*11.7 —	△3.4	外面：風化のため不明 内面：ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 2mm以下の砂粒を含む 良好	外面：にぶい橙色 内面：灰黄褐色	
20	19	C25 造成土	土師器 低脚杯	— *5.0	△2.8	内外面ともナデ	密 細かい砂粒含む 良好	外面：にぶい橙色~黒褐色 内面：橙色	
21	19	D8 旧耕作土	土師器 甕	*18.0 —	△3.6	内外面ともナデ	密 砂粒をわずかに含む 良好	内外面：淡黄色	
22	19	D13 造成土	土師器 杯	*12.0 *6.8	△3.5	内外面ともナデ 底部：回転糸切り	密 細かい砂粒含む 良好	内外面：淡褐色	
23	19	C26 進入路	円筒埴輪	*22.4 —	△6.0	内外面ともナナメハケ 口縁部：ヨコナデ	密 細かい砂粒多く含む 良好	外面：橙色 内面：オリーブ褐色	須恵質
24	19	C26 黒色土	円筒埴輪	— —	△10.0	内外面ともナナメハケ 口縁部：ヨコナデ	密 1~2mmの砂粒を含む 良好	内外面：黄褐色	須恵質
25	19	C25 造成土	円筒埴輪	*24.0 —	△7.8	内外面ともナナメハケ 口縁部：ヨコナデ	密 良好	外面：橙色 内面：灰黄褐色	須恵質
26	19	D25 造成土	円筒埴輪	— —	△5.3	内外面ともナナメハケ 口縁部：ヨコナデ	密 良好	内外面：灰黄褐色	須恵質
27	19	B26 造成土	円筒埴輪	— —	△10.1	内外面ともナナメハケ 突帯貼り付け後ヨコナデ	密 1~2mmの砂粒を含む 良好	外面：橙色 内面：灰黒色	須恵質
28	19	D26 造成土	円筒埴輪	— —	△7.3	内外面ともナナメハケ 中段外面：B種ヨコハケ	密 良好	内外面：灰黄褐色	須恵質
29	19	C24 造成土	円筒埴輪	— —	△9.4	内外面ともナナメハケ 中段外面：B種ヨコハケ	密 良好	内外面：灰黄褐色	須恵質
30	19	C22 造成土	円筒埴輪	— —	△7.5	内外面ともナナメハケ 突帯貼り付け後ヨコナデ	密 3mm以下の砂礫を含む 良好	内外面：灰黄褐色	須恵質
31	19	C25 造成土	円筒埴輪	— *16.2	△11.5	内外面ともナナメハケ 基底部：指おさえ	密 細かい砂粒を多く含む 良好	内外面：橙色	須恵質
32	19	2区 造成土	土製支脚	— 7.7	△11.7	手捏ね	密 1mm以下の砂粒を含む 良好	明黄褐色	
33	19	1区 造成土	不明土製品	— —	△9.5	手捏ね	密 細かい砂粒を含む 良好	橙色	土馬の脚か
34	19	D12 造成土	不明土製品	— —	△9.9	ケズリ	密 1mm以下の砂粒を含む 良好	橙色	
35	19	D9 造成土	不明土製品	— —	△8.8	外面：風化のため不明 内面：ケズリ	密 細かい砂粒を含む 良好	内外面：浅黄褐色	竈か



## 第4章 長者原16号墳

### 第1節 遺跡の立地と層序

長者原16号墳は、長者原台地の外縁近く、標高55mから58mの緩斜面上に位置する円墳で、大殿狐谷遺跡の一部に重複する。台地上の舌状の張り出しが南西から北東に向かって緩やかに下っていく箇所にあたる。圃場整備前の旧地形では、16号墳から北約10m東約20mで、小さな崖になっていたようなので、16号墳は舌状部の先端に位置することになる。16号墳から北東に約50m進むと、台地の縁に達し、比高差約25mの崖になる。現在までのところ、この間に古墳は見つかっていないので、16号墳は18基からなる長者原古墳群最東端の古墳になる。16号墳の南西約30mには10～12号墳の一群が、西約30mには15号墳がそれぞれ位置している。調査前の状況は水田の畦で、法面に周溝断面が露出しており、墳丘は全く認められなかった。

昭和58年度に岸本町教育委員会が圃場整備に先立って古墳の北東約4分の1を、平成16年度には同町教育委員会が道路建設に先立って隣接する北西約4分の1をそれぞれ調査している。今回の調査地は、古墳の西南西側約8分の1に当たる部分で、平成16年度町教育委員会調査地に隣接している。

町教育委員会による2度の調査時点では、墳丘は既に削平されていて、周溝のみが遺存していた。周溝は、圃場整備前の調査では幅4.9m深さ1.9mを測り、比較的大規模であったようだ。周溝の状況から、直径約24mの円墳と考えられている。周溝は西南西方向に途切れて土橋になっていて、周溝内からは大量の円筒埴輪と須恵器が出土している。礫も出土しているが、葺石と考えるほどの分量ではないようだ。

今回の調査は水田の畦にわずかに削り残されていた周溝を調査したもののため、周溝埋土以外の部分の本来の層序については不明である。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1. 概要

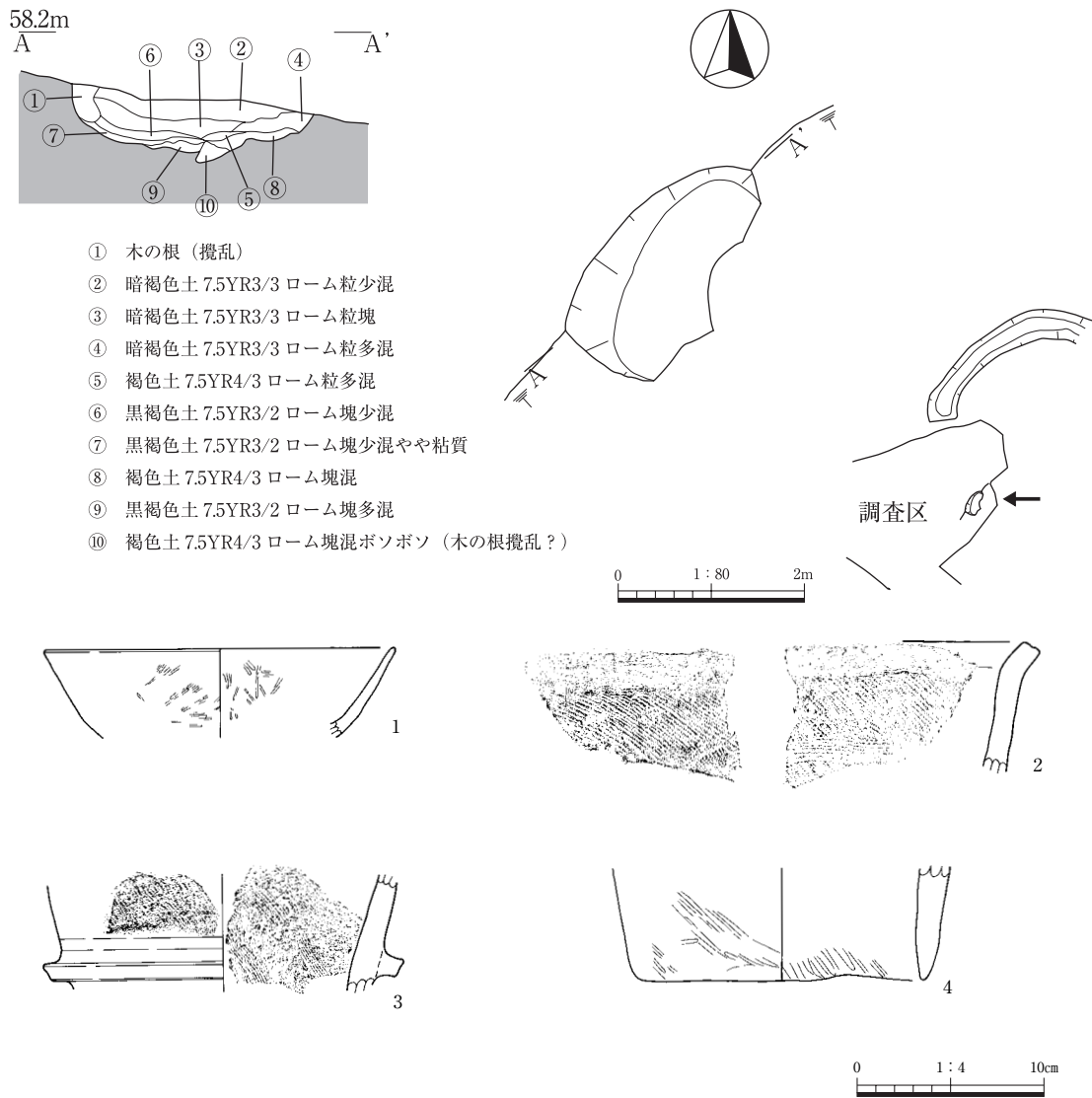
長者原16号墳周溝の、長さ1.6m分を調査した。調査地は周溝が途切れて土橋となる部分であるが、削平が著しく、土橋は上部が既に失われていて、周溝も下部55cm程度しか残っていなかった。

遺物は調査面積が小さいこともあって少ない。円筒埴輪と土師器の細片が出土している。円筒埴輪は6世紀前半から中頃のものと考えられる。

#### 2. 周溝（第21図、図版9）

4区の東端、標高57.7mから57.3mの、緩斜面上に位置している。調査区内には、古墳の入口部分の土橋とその南側の周溝がかかっていることが予想されたが、土橋は圃場整備等によって既に失われていた。周溝も、農地進入路の掘削によってほとんど破壊されていて、進入路の法面に周溝の断面が露出していた。実際に調査できたのは、周溝の1.6m分だけで、法面にかからず平面的に残っていたのはわずか0.5m分であった。表土を除去し、ローム層中で検出した。

周溝は、底面幅2.2mを測る。検出面での幅は現存値で2.6mで、実際はもう少し大きいはずである。検出面からの深さは55cmで、埋土の堆積状況から見て、かなりの削平を受けていると考えられ



第21図 遺物観察表

\*復元値 △現存値

遺物番号	押図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土 焼成	色調	備考
1	21	周溝3層	土師器高杯	18.7 —	△4.7	内外面ともミガキ	密 2.5mm以下の砂粒を含む 良好	内外面：明赤褐色	
2	21	周溝1層	円筒埴輪	— —	△6.7	内面：ナナメハケ後ヨコハケ 外面：ナナメハケ 口縁部：ヨコナデ	密 1mm以下の砂粒を含む 良好	内外面：灰黄褐色	須恵質
3	21	周溝1層	円筒埴輪	— —	△5.6	内外面ともナナメハケ 突帯貼り付け後ヨコナデ	密 1mm以下の砂粒を含む 良好	内外面：灰黄褐色	須恵質
4	21	周溝断面	円筒埴輪	*15.1 —	△6.0	内外面ともナナメハケ 底部外面：倒立ナデ	密 砂粒を含む 良好	内外面：灰黄褐色	須恵質

第21図 周溝および出土遺物

る。底面はほぼ平坦で、壁面はカーブしてからほぼ垂直に立ち上がるので、断面形は幅の広いU字形を呈する。周溝の端部は、土橋部分に向かって緩やかな弧を描いて張り出している。岸本町の平成16年度調査結果と合わせると、土橋の幅は約5mになる。

周溝の底面近くには黒褐色土が、それより上部には暗褐色土が主に堆積している。底面および墳丘側にはローム塊やローム粒を多く含む土層が薄く認められる。このことは、墳丘の崩壊が緩やかで、長期間にわたり周溝が原形を保っていたことを示していると考えられる。

遺構の残りが悪かったこともあり、遺物は土師器と円筒埴輪の破片が少量出土したのみである。周

溝底から出土した遺物はなく、破片になってから転落して、埋土に包含されたものばかりである。

出土した遺物から、6世紀前半、おそらく第2四半期頃の古墳と考えられ、後述する長者原18号墳よりも後で築造されたものである。

### 3. 出土遺物（第21図、図版10—1）

1は土師器の口縁部破片で、高杯の杯部と思われる。内外面ともに丁寧なミガキが施されている。2～4は円筒埴輪の破片である。いずれも須恵質で、内面は灰褐色、外面は橙色に焼かれている。2は口縁部の破片で、内外面に1次のナナメハケを施した後、強いヨコナデで口縁を外反させて仕上げる。口縁端部は平坦面を呈する。3は上突帯付近の破片である。外面は1次のナナメハケの後、突出の強い突帯を貼り付け、強いヨコナデを加える。突帯は断面四辺形で上辺がやや高く、中央が少しくぼむ。内面には1次のナナメハケが施されるが、間隔が広く、特に下部では散漫である。口縁から覗き込んでよく見える範囲にしか施されていないので、もはや装飾的な意味合いしかないと考えられる。4は基底部の破片で、底径は15.1cmに復元される。外面には1次のナナメハケがわずかに見られるが、内面にはハケメは観察されない。外面は斜め方向に強いナデが、内面は端部から1.5cmの範囲に指頭圧痕が縞状に連続している。これは内面に親指を当て、残りの指の何本かで外面を強くなで上げることを細かく繰り返して基底部の倒立再調整を行った結果と考えられる。基端部はなで上げたままでカットなどを加えないため、V字状を呈する。

今回の調査で出土した埴輪は少量で細片ばかりであり、全形を知りうる資料はない。以前に岸本町教育委員会の調査で出土した資料によれば、長者原16号墳の円筒埴輪は須恵質または半須恵質で、3段で2条の突帯と2つの円形透かしをもち、口径20～27cm、底径13～14cm、器高30cmを測る、小型で規格的なものである。過去の調査で出土した埴輪と今回のものとは、細部の大きさと技術的な特徴がよく一致するので、全体の大きさや形態についても同様である可能性が高いと考えられる。

## 第5章 長者原18号墳

### 第1節 遺跡の立地と層序

長者原18号墳は、長者原台地の平坦面上に位置する円墳で、現地表面での標高は57～58mを測り、大殿狐谷遺跡の一部に重複して存在する。圃場整備前の旧地形では、18号墳の南方50mに尾根状の高まりがあり、18号墳の東側を通過して北東方向に下っていた。また、西方約30mからは、狐谷の名をもつ深い谷が始まっていた。つまり、18号墳は台地縁辺のテラス状の面に造られている。18号墳の北西約25mには9号墳が、北西約80mには13号墳がそれぞれ位置し、この3つの古墳は狐谷に臨んで配置されている。北東には2m離れて15号墳が隣接し、東方47mには今回調査した16号墳が所在する。東南30mには10～12号墳の一群が連なっている。以上から、18号墳は、平面的には9基からなる長者原古墳群東支群の中央に位置することになるが、微地形上では、尾根筋から外れた谷の奥にあたり、むしろやや悪い場所に築かれている。調査前の状況は道路で、北側の法面には周溝断面が露出していた。墳丘は全く認められなかった。

平成16年度には、岸本町教育委員会が道路建設に先立って北側の隣接地を調査した。墳丘は既に削平されており、周溝下部60cmが残っていた。調査されたのは、周溝の東南側と西南側の計30%にあたる部分で、曲率から直径約20mの円墳と考えられている。周溝は、幅2.5～3.0m、深さ40～60cmを測り、西側で途切れて土橋となり、古墳の入口部分を形成する。周溝内からは大量の円筒埴輪と須恵器が出土した。特に入口部分の周溝底から出土した2点の須恵器無蓋高杯は、陶邑編年のMT15型式に属し、本古墳の年代を6世紀初頭と考える根拠となる。

さらに北側の隣接地を、圃場整備に伴って岸本町教育委員会が昭和58年度に調査している。この調査では、長者原14号墳の周溝の北側部分が検出された。直径約14mの円墳と推定され、周溝は幅1.4m深さ80cmを測り、円筒埴輪・朝顔形埴輪・須恵器などが大量に出土した。過去の調査記録を参照すると、14号墳の周溝は、東側では平成16年度調査地の18号墳周溝に接続する位置にある。また、出土遺物は今回の18号墳の調査分と非常に良く似ている。つまり、14号墳と18号墳は同一の古墳である可能性があるのである。しかしながら、古墳の直径や周溝の幅に差があることと、後に隣接地を調査した岸本町教育委員会が別の古墳と判断していることを踏まえ、隣接する別の古墳として扱うこととする。

今回の調査地は、周溝の南部分で、平成16年度に岸本町が調査した周溝の南東部分と南西部分に接続する。周溝全体の約24%、14m分を調査した。

周溝は比較的残りがよかったものの、圃場整備による削平がソフトローム層中にまで達しているため、ソフトローム層より上の、もともとの層序は不明である。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1. 概要

長者原18号墳は直径約20mの円墳で、墳丘は過去の造成等で削平されて既になく、周溝だけが遺されていた。

舗装道路の下にあったため、調査地内での周溝の保存状態は良く、埋土から大量の円筒埴輪と朝顔

形埴輪が出土した。埴輪は樹立された状態ではなかったが、多くは墳裾から周溝に転落したものと考えられ、樹立時の様子のある程度留めていた。円筒埴輪が少なくとも20個体、朝顔形埴輪が2個体あり、2個を1対として立てられていたと推測される。出土した埴輪はほとんどが土師質で、胎土や焼成などから主に2グループに分けられる。古墳の年代は、過去に出土した須恵器から6世紀初頭と考えられ、埴輪の年代もこれと矛盾しない。葺石はないと考えられる。

周溝埋土の上半からは、主に8世紀代の土器と、製錬滓を中心とする鉄関連遺物が多く出土している。周溝が半分ほど埋まりかけたところに、付近で行った製鉄の廃棄物を投棄したものと考えられる。出土した土器から古代会見郡衙などに関係する可能性があり、この地域での製鉄の歴史と展開を考えるうえで興味深い。

## 2. 周溝（第22、23図、図版11～14）

3区東端近くに位置し、検出面での標高は57.8mを測る。調査地の北側の周溝は、道路建設により、発掘調査した上で既に失われていた。古墳時代前期の竪穴住居跡S I 4と切り合っており、土層断面の観察から、S I 4を壊して掘られていることが明らかである。また、周溝埋土からは古墳時代前期の土器が少量出土していて、S I 4を破壊した際に混入したものと考えられる。

周溝の幅は検出面で1.8～2.3m、底面で0.9～1.2mで、検出面からの深さは0.9mを測る。断面形は逆台形を呈する。平成16年度に町教育委員会によって検出された周溝南東部および南西部と齟齬なく接続する。したがって、古墳の直径もこれまでの調査結果と同じく、周溝の外径で約20mに復元できる。

### 埋土

埋土は大きく分けて3種類で構成される。

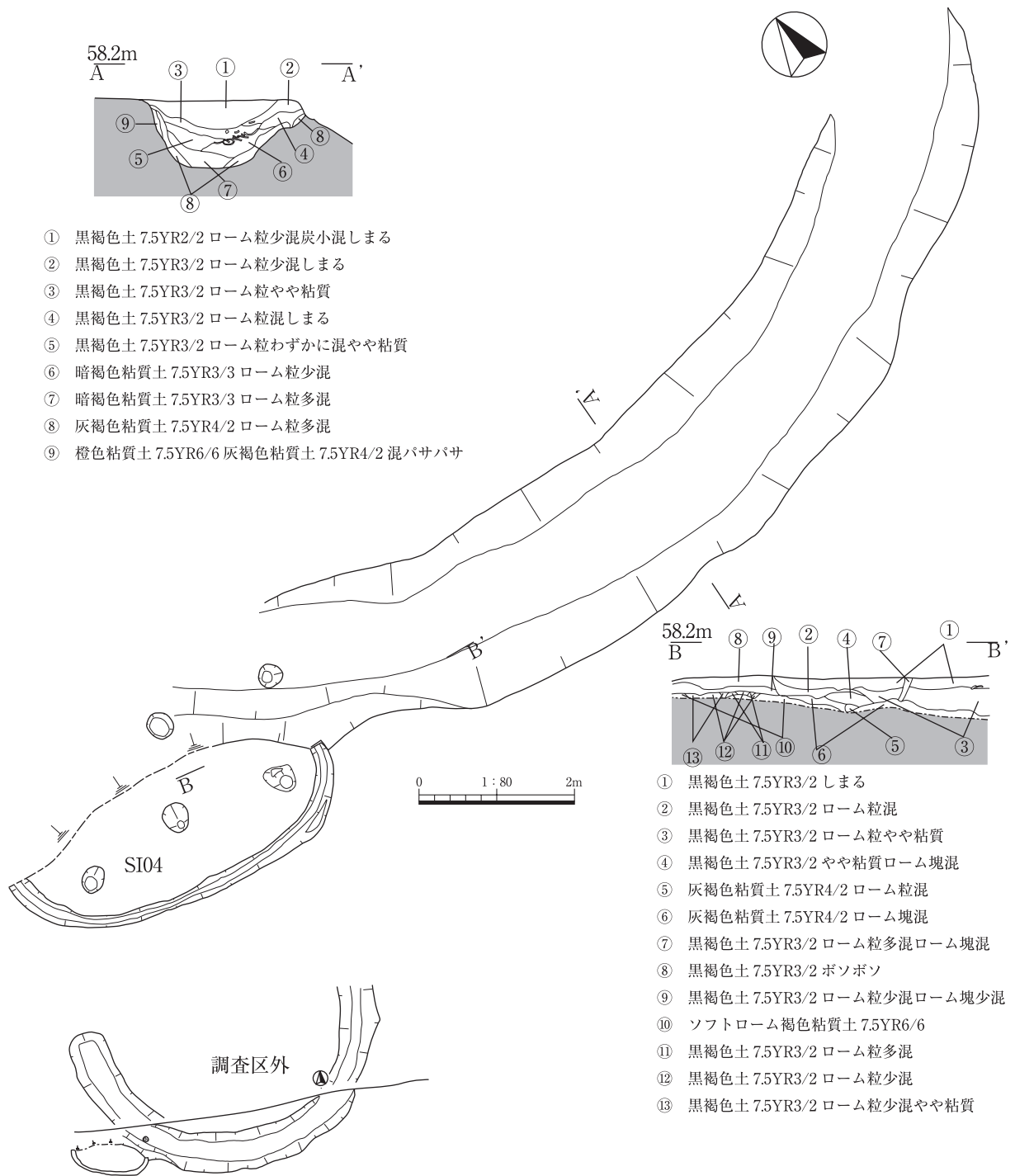
下層（埋土7～9層）には、灰褐色や暗褐色の粘質土でローム粒を多く含み遺物をほとんど含まない土が堆積している。層厚は5～20cm。古墳の築造後あまり時間を置かず、周溝の壁面などが崩落して堆積したものであろう。埋土8層上面からは、炭化木材が出土した。長さ115cm幅28cmを測る板状の木材で、加工痕は認められない。放射性炭素年代を測定したところ（第6章参照）、 $1640 \pm 30$ BP、暦年較正では5世紀初頭を中心とした値が出ている。S I 4の年代に近いので、S I 4の木材が周溝掘削時に混入したと解釈するのが妥当かもしれない。

中層（埋土3～6層）は、暗褐色または黒褐色の粘りを帯びた土で、ローム粒をあまり含まない。層厚は最も厚い周溝中央部で計約40cmを測る。埴輪を中心とする遺物を多く包含しており、特に埋土3層と6層の境目に顕著である。中層埋土は主に墳丘側に偏って存在し、埴輪も墳丘側が高く周溝側が低く傾斜して堆積しているので、墳丘が崩落して周溝を埋めたものが中心であると考えられる。黒色土が主体でローム粒の割合が少ないことから考えると、崩落は封土の深くにまでは達せず、墳丘表面に形成された腐植土などの浅い部分に止まっていたであろう。出土した埴輪に基底部分を欠くものが多く、基底部分のみの個体が少ないことは、これを裏付けていよう。中層の形成時期は、古墳の築造後一定期間を経て腐植土ができてから、上層が堆積する8世紀頃までの間のことと推定される。

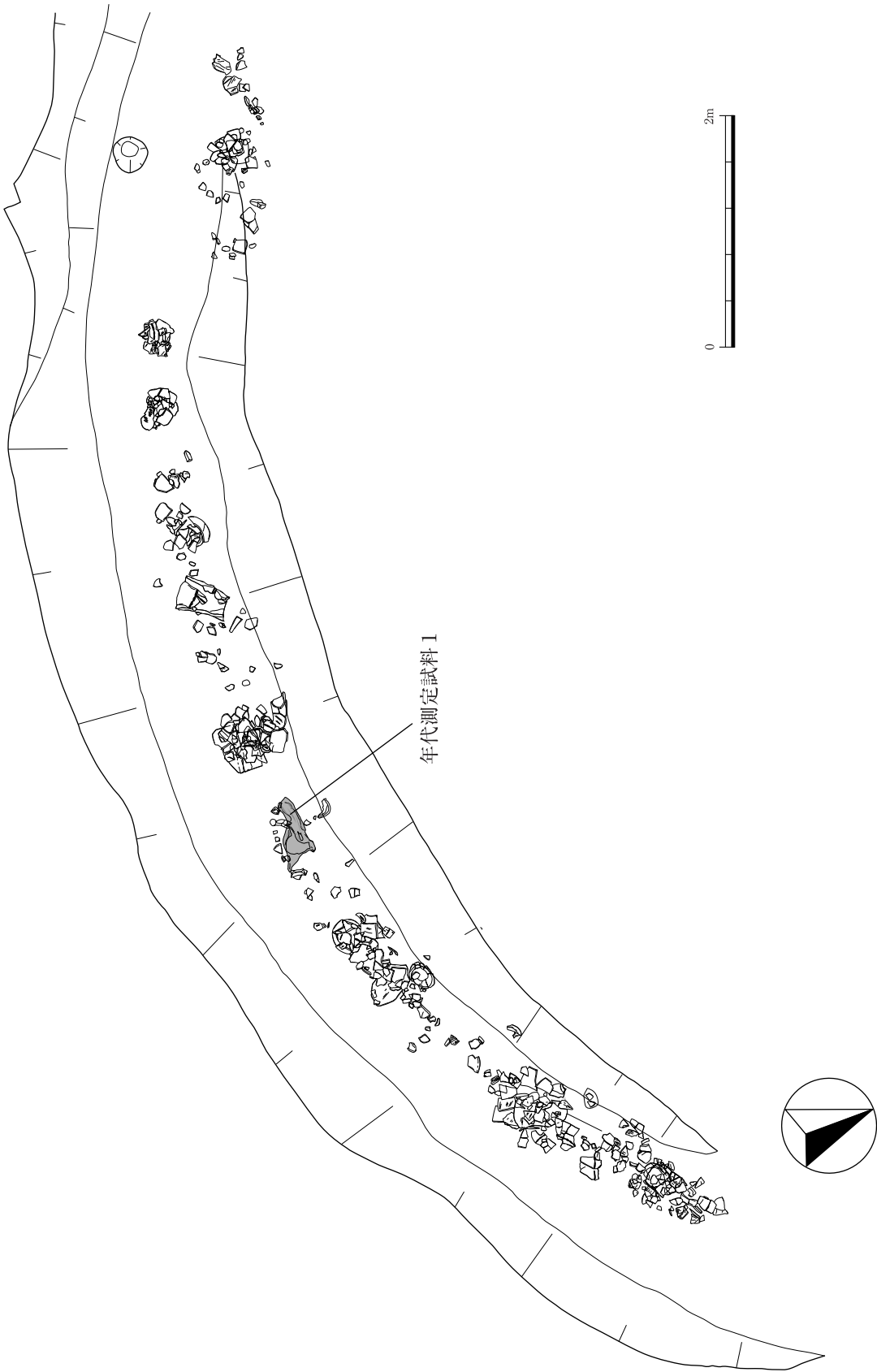
なお、礫はごく小さなものを中心に9点出土したのみなので、葺石はなかったと考えられる。

上層（埋土1～2層）は、黒褐色土で締まりがよく、炭を含んでいる。層厚は最も厚いところで40cm以上と推定される。埴輪の破片の他に、古代の土器や、流動滓を中心とした製錬系の鉄関連遺物を





第22図 周溝



第23図 周溝内遺物出土状況

多く含んでいて、土器の年代から、8世紀以降に堆積したと考えられる。半ば埋まりかけた古墳の周溝に、付近で操業した製鉄炉の廃棄物などを捨てたものであろう。土器の出土量は多くはないが、朱塗りの土師器杯など、官衙との関連をうかがわせる遺物が含まれているので、南西約450mに存在したと推定される会見郡衙や坂中廃寺に関連した工房からのものかもしれない。

#### 埴輪の出土状況と配列の復元（第23、24図）

出土した埴輪は基底部を欠くものや、横倒しのものばかりのため、樹立された状態とはみなされない。しかし、個々のまとまりはよく保たれているので、さほど長い距離を動いてはいないであろう。

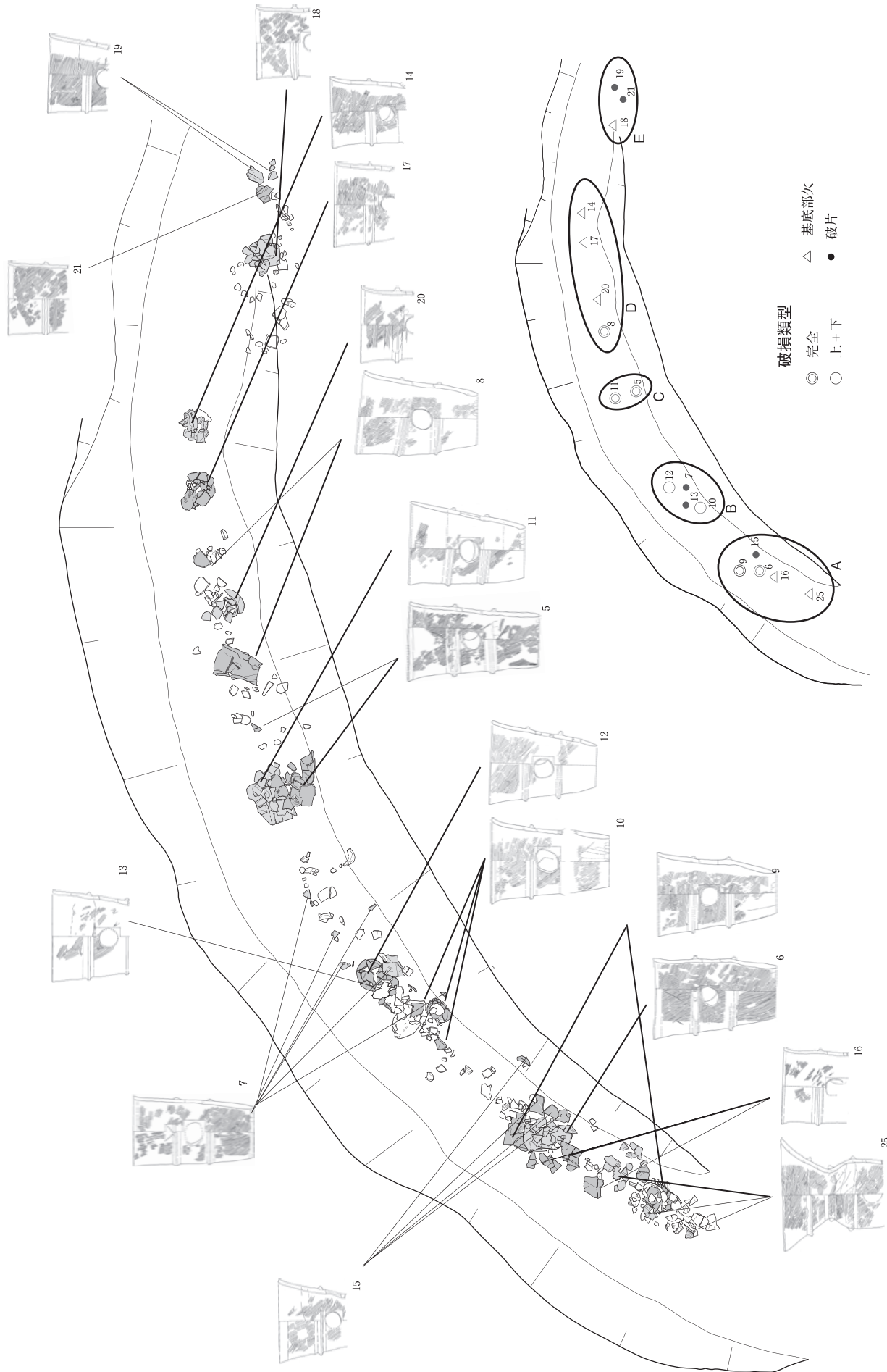
平面的には、周溝内の墳丘側に沿って、ある程度のまとまりをもって分布する。視覚的に東からA～Eの5群に分かれるが、D群はさらに2つに分けられるかもしれない。各群の間隔は3.5～5.0mで、平均は4.3mである。埴輪間の距離はD群から読み取ることができ、約1.5mになる。

完全に復元できた埴輪は5個体あり、全て南東か東を向いて横倒しになっている。比較的規模の大きな墳丘の崩壊におそらく同時に巻き込まれて転落したものであろう。基底部を欠くものは6個体あって、口縁部はほぼ完全に残って下側を向いている例が多い。墳丘上に露出していた部分が、透かし穴や粘土紐接合部などの弱い箇所破断して転落したと考えられる。B群には、中段の一部を欠き上下に別れるものが2個体ある。5点の完全な埴輪に挟まれた位置にあるので、上部が破断して転落した後で、基底部が大規模な墳丘の崩壊に巻き込まれたものと考えられる。埴輪群の下面は、ほぼ一面で揃っている。多くの埴輪は、あまり時間差をおくことなく転落したと考えられる。

個体7の残存状態は特殊である。3分の1に縦割りした盾形の破片で、透かし穴が中央に位置する。樹立したものが破損した割れ方ではない。岸本町教育委員会の調査でも、18号墳入口内から同様の破片が2点重なって出土している。おそらく主体部以外の埋葬施設に使われていたものであろう。個体13も同様の性格をもっていた可能性がある。

出土状況と破損類型を考え合わせると、埴輪の配列がある程度復元できる。出土した22個体のうち、埋土上層から出土したものと、細片を除いた18個体の出土状況を第24図に示す。各個体を構成する破片が最も多く出土した位置を仮の樹立位置とすると、全ての埴輪が等間隔に分布するのではなく、各群内に2個から5個ずつがまとまっている。ところで、破損類型を考慮すると、類似したものが2個ずつまとまっている場合が多いことに気付く。個体5と11、6と9はそれぞれ完全に近いものが横倒しで重なり合っている。10と12は上下に分かれて出土したものが、25と16、17と14は基底部を欠くものがそれぞれ隣り合っている。これは、近くにあったものが同じ状況で転落したことを反映しているのであろう。また、口縁部の半周に満たない破片は5個体あるが、これらをより遠く、おそらく墳丘の上部から転落したものと考えて除外すると、2個1単位の組み合わせは、さらに明瞭になる。以上から、埴輪2個を約1.5m間隔で1対とし、約4mずつ距離を置いて並べるのが、長者原18号墳の埴輪における埴輪の配列状況だったと推定される。なお、後述する類型や、大きさや形態が共通する埴輪が1対になっている訳ではなく、むしろ異なるもの同士の組み合わせが普通であるので、特に似たものを集めるといった配慮はなされていないと考えられる。

配列が分かる朝顔形埴輪は1点で、円筒埴輪を12個以上挟んで、円筒埴輪と一緒に並べていることになる。



第24図 埴輪の配列状況の復元

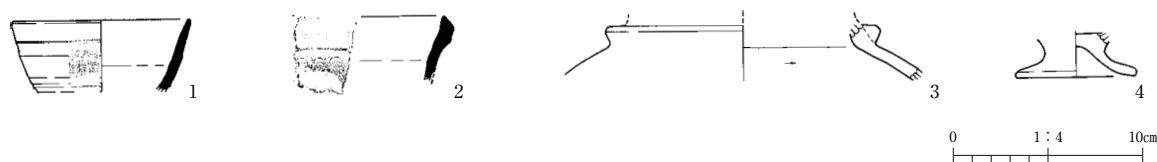
3. 古墳時代の遺物（第25図、図版19—1）

須恵器

1は口縁部の破片で、削り出し突帯と5～6条の波状紋で飾る。無蓋高杯の破片であろうか。平成16年度岸本町教育委員会調査地からも同一個体の破片が出土している。2は壺の口縁部の破片で波状紋が施されている。ともに埋土上層からの出土である。細片のため、この2点から年代を推定することは難しいが、岸本町調査地からは陶邑編年のMT15型式にあたる無蓋高杯等が出土しており、ほぼ同時期のものと考えられる。

土師器

3は埋土下層から出土した、おそらく大型の壺か甕の肩部の破片で、断面三角形の突帯が貼り付けられている。4は低脚杯の脚部破片で、埋土中層から埴輪に混じって出土した。ともに古墳時代前期頃のもので、竪穴住居跡S I 4を壊して18号墳周溝を掘削した際に混入した可能性がある。



第25図 遺物観察表

\*復元値 △現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土	焼成	色調	備考
1	25	周溝中層	須恵器高杯?	*9.3 —	△3.7	外面：回転ナデ後6条の波状紋 内面：回転ナデ	密	砂粒を含む 良好	外面：灰色 内面：オリーブ色	
2	25	周溝中層	須恵器壺	— —	△3.2	外面：回転ナデ後波状紋 内面：回転ナデ	密	砂粒をわずかに含む 良好	外面：灰色 内面：灰褐色	
3	25	周溝下層	土師器壺?	— —	△2.9	外面：ナデ 内面：ナデ 頸部以下ケズリ	密	1mm以下の砂粒を含む 良好	内外面：灰黄褐色	
4	25	周溝中層	土師器低脚杯	— —	△2.3	内外面ともナデ	密	1mm以下の砂粒を含む 良好	内外面：明黄褐色	

第25図 古墳時代の土器

円筒埴輪（第26～29図、図版15～18）

円筒埴輪は少なくとも20個体を数える。完形に復元できるものは7個体、中段までまたは上半のみで基底部を欠くものが6個体、残りの7個体は部分的な破片で、うち基底部のみのものは2点しかない。19点が土師質で、1点のみが半須恵質である。焼成は概ね良好で、黒斑をもつものが7点含まれている。黒斑は、多くはごく狭い範囲に限られ、外面あるいは突帯に縦方向の線を描く。

全形が分かるものは全てが3段で、2条の突帯をもち、中段のほぼ対向する位置に一對の円形透かしを穿っている。部分的な個体でもこの特徴から外れるものはないので、全てが3段2条突帯の同一形態であると考えられる。

円筒埴輪は3類に分類できる。第3類は小片1点のみなので、18号墳の円筒埴輪は、主に2種類で構成されていることになる。

1類(5、6、7、23)：比較的大型で、高さは41cm以上、底径は約18cmを測る。口径だけは23～27cmで、他に比較して特に大きいわけではなく、したがって細身で筒状である。断面を観察すると、灰褐色の断面内部を、赤みの強い橙色の内外表面が挟んでおり、色調は不均質である。黒斑をもつものはない。いずれも透かし穴ほぼ直上の上段にごく細いヘラ記号を刻む。ヘラ記号はV字またはX字



で、5は両面の対向する位置に2つ、6は片面に間隔をあけて2つを刻む。7は片面のみしか残っていないためよく分からないが、少なくとも1つを刻む。1次調整は内外面ともナナメハケが基本である。6は上突帯貼り付け後に中段にB種ヨコハケを施し、さらにナナメハケを加える。基底部の倒立再調整は非常に入念で、タタキで整形した後に、内外面とも倒立ハケメを施した上で、カットあるいはヨコナデにより端面を形成する。

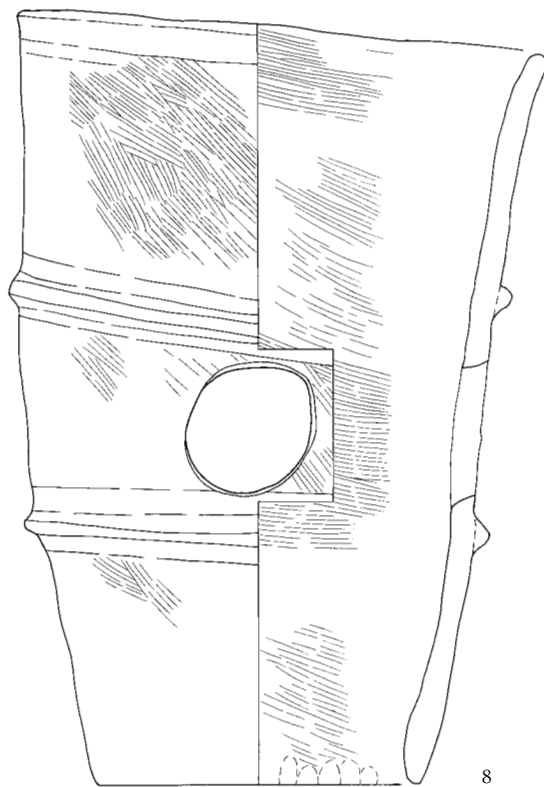
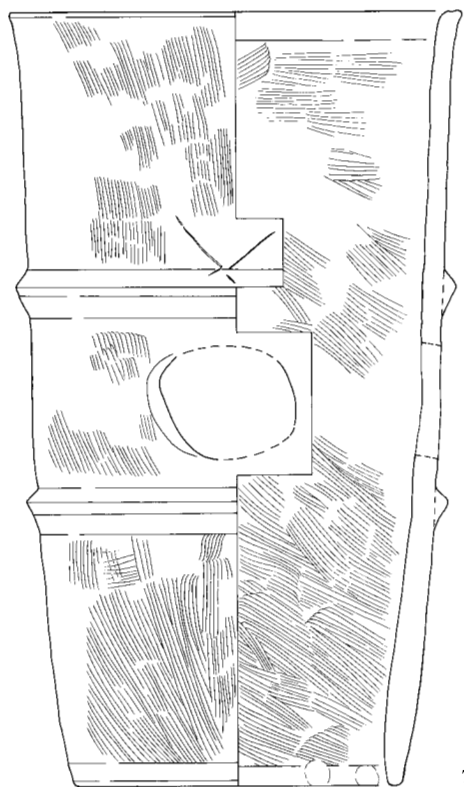
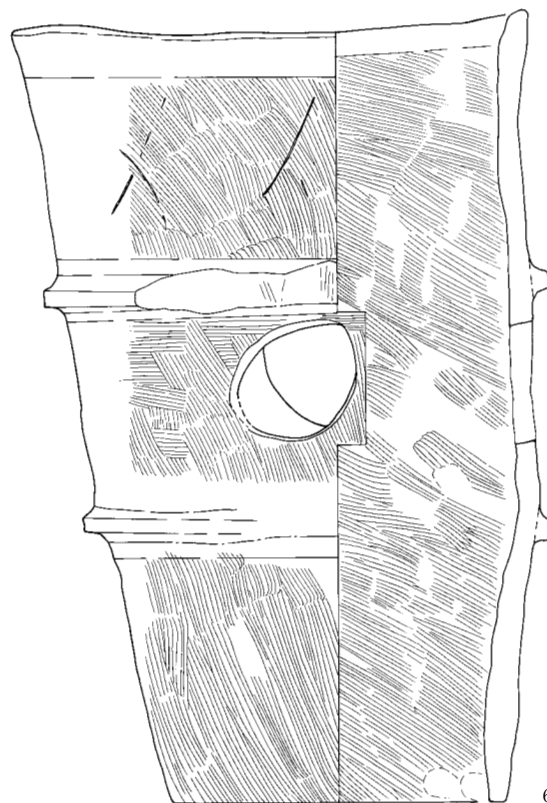
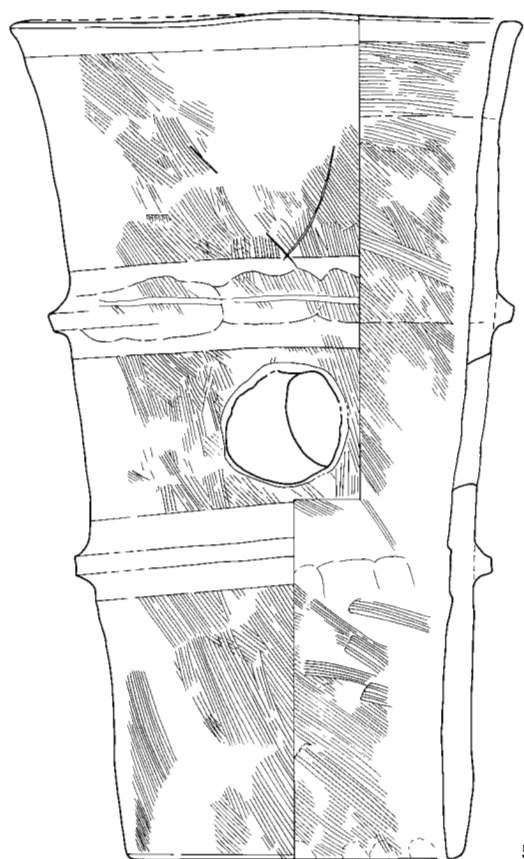
2類(8~22)：比較的小型で、高さは40cm以下、底径は13~17cmを測る。口径は23~30cmと変異の幅が大きい。24cmと28cm前後にピークがあり、高さや底径に比較して大きい。したがって全体形は口縁に向かって逆ハの字に開くものが多い。1類と異なり、焼成は断面内部まで均質で、色調は橙色で、黄色みが強いものが目立つ。多くは胎土に白色粘土が練りこまれている。黒斑をもつ7点は全て2類に含まれる。ヘラ記号を刻むものはない。1次調整は内外面ともナナメハケを基本とし、突帯貼り付け後にB種ヨコハケを施すものが一定量含まれている。ヨコハケの加え方は、残りが悪いものが多いため正確にはわからないが、中段には必ず施し、さらに上段の下3分の2(9)、上段下部(12)、上段に2条(20)、と、一定していないようである。個体21は中段上部または1条以上と部分的である。基底部の倒立再調整は、1類に比べて簡略である。多くはタタキを加えるのみで、倒立ハケメは施さない。カットを行わないので、端部は基本的に平坦にはならない。形態的・技術的には、1類よりも後出する要素を多く含んでいると考えられる。

3類(24)：1点だけの出土で、基底部の小片のため全体形はよく分からないが、底径や基底部高からすると、2類よりもさらに小さいものであろう。半須恵質で、外面は橙色、内面は灰褐色に焼き上げる。基底部の倒立再調整は、押圧(?)で整形した後で、外面にナナメハケを施す。端部はカットせず、端部内面に細かなハケメを加える。この個体のみ、すべてのハケメが右上方向になっており、左利きの製作者によって作られていると考えられる。周溝埋土上層からの出土で、他とは異質な点が多く、また小片であるので、本来は18号墳以外に立てられていたものが破片となって流入した可能性が高い。

1類と2類は製作者および製作地が異なっていると考えられる。両者の比率は約1対4で、圧倒的に2類の比率が高い。古墳が築造された時点での、1類と2類の生産地の規模や生産量の違いを反映している可能性がある。

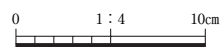
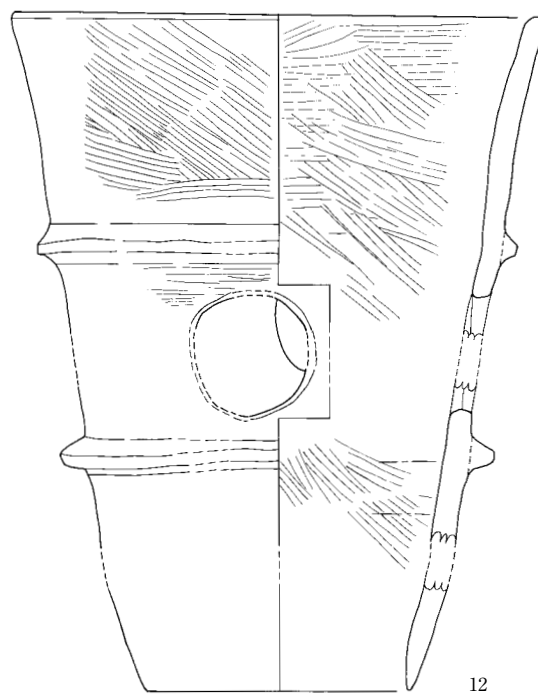
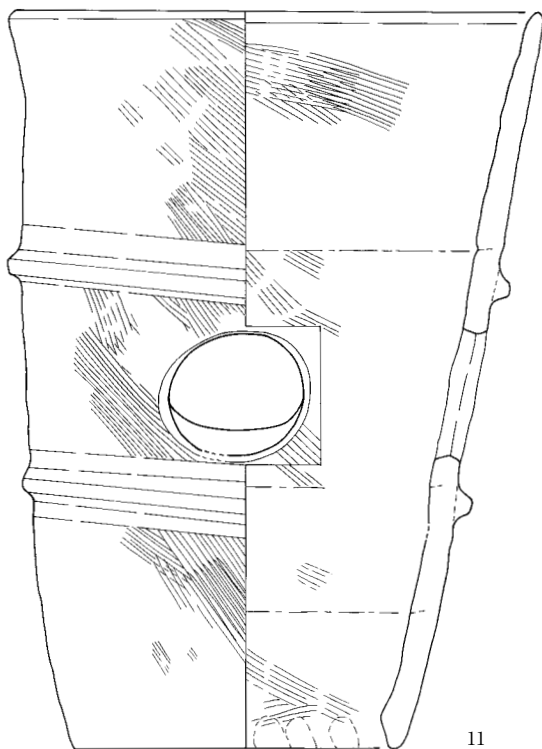
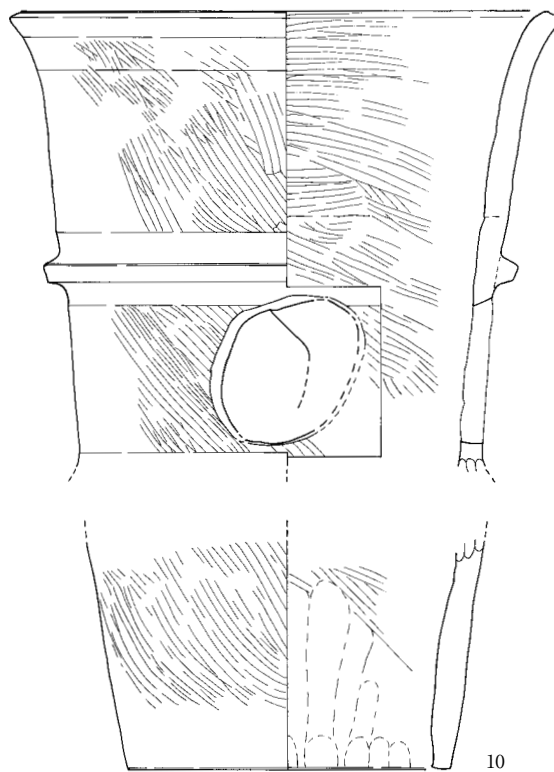
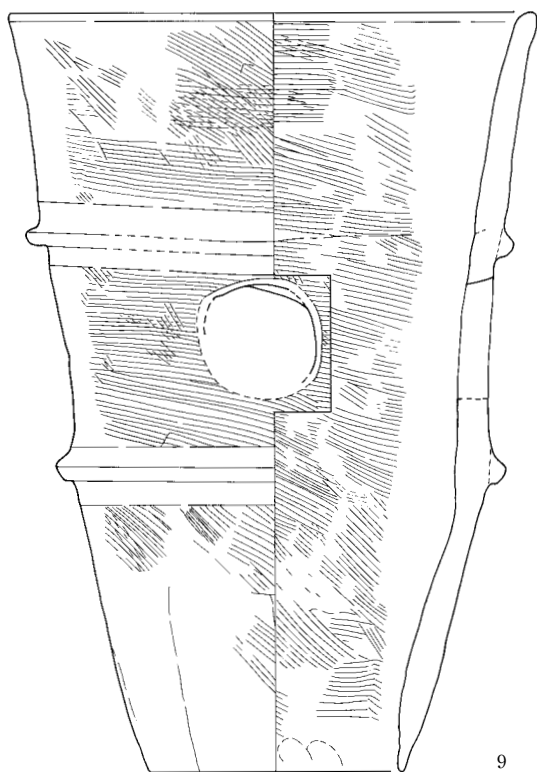
### 朝顔形埴輪(第29図、図版16、18)

2個体が出土している。25は、基底部を欠損するものの全形を知ることができる資料である。口径は37.0cmを測り、口縁部はラッパ状に大きく開く。底径は不明ながら、中央径は23.0cmで他の円筒埴輪とほぼ同じ大きさである。透かしは残っていなかったが、欠落箇所から推定すると、体部中段に、対向する位置より少しずれて、比較的小さなものがあけられていたようである。突帯は、体部に2条、口縁部中ほどと頸部に1条ずつの、計4条で、ほとんど剥落していたが断面台形の突出度の強いものである。1次調整はナナメハケを基本とする。外面は、体部上段のみは突帯貼り付け後にB種ヨコハケを施す。内面は体部上段から頸部にかけてナナメハケ後にケズリを加える。また、口縁部のナナメハケは、上半部でほぼ横方向になる。内面の調整は、ちょうど外面の突帯の位置を境に切り替わっている。これは、突帯の箇所までが1つの作業単位で、1段ずつある程度の時間を置きながら小工程を繰り返して作られていることを示しているであろう。円筒埴輪の調整が段ごとに切り替わることはなく、一気に作られていると考えられることとは対照的である。断面の色調が円筒埴輪1類と

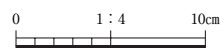
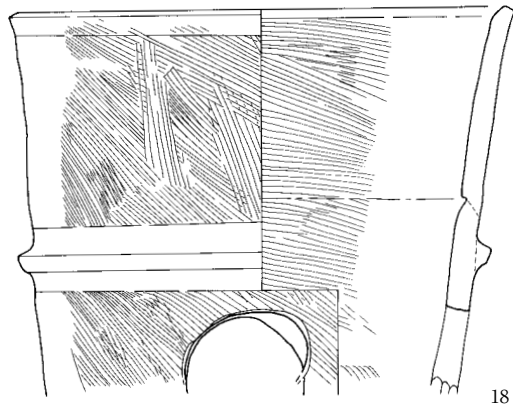
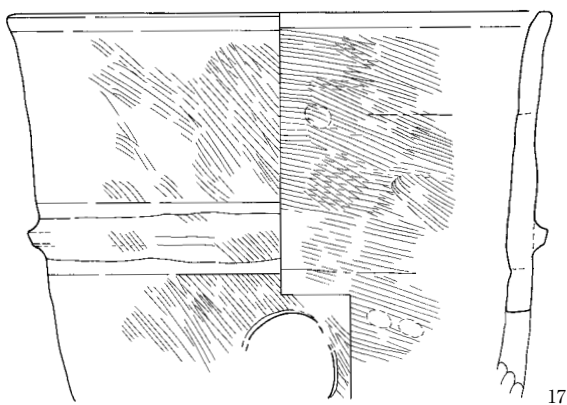
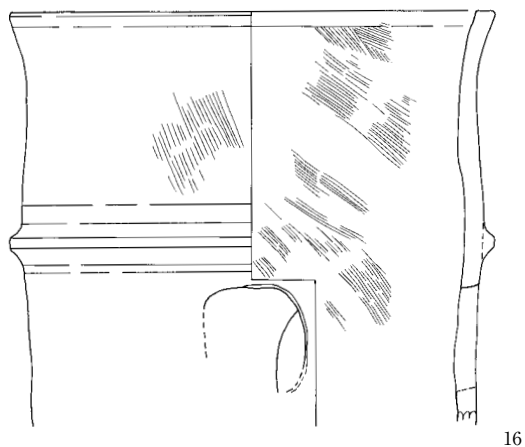
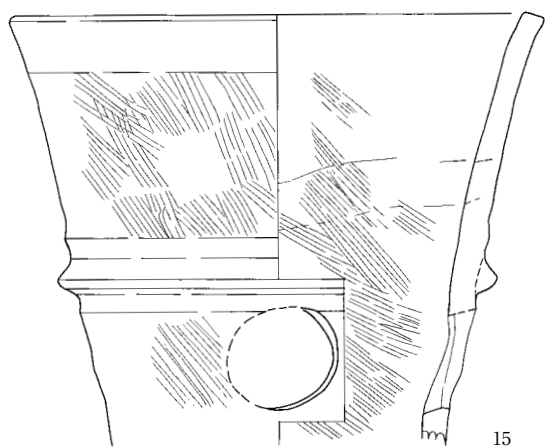
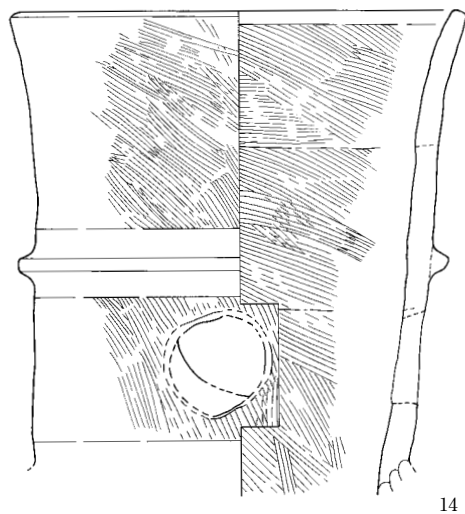
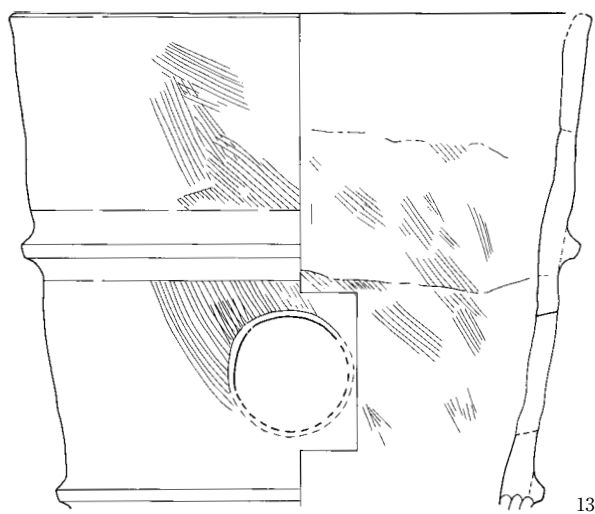


0 1:4 10cm

第26図 埴輪(1)

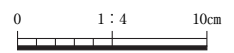
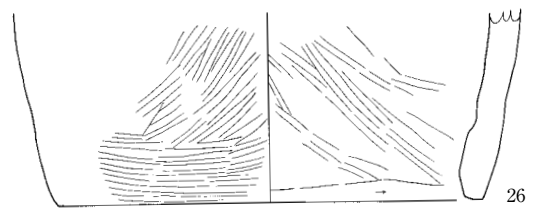
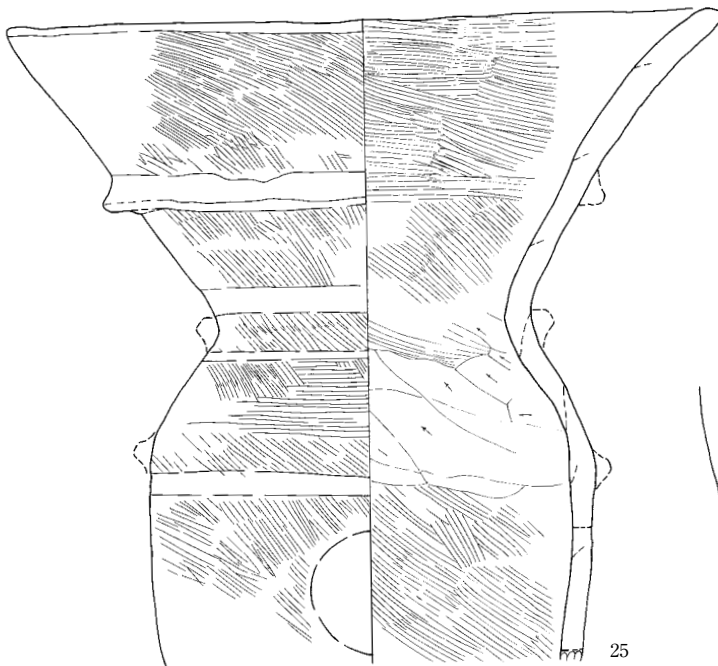
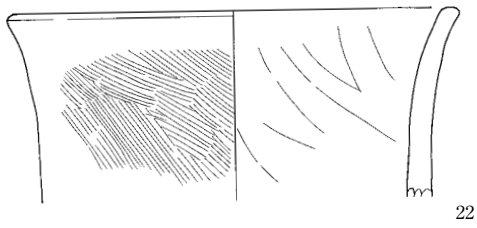
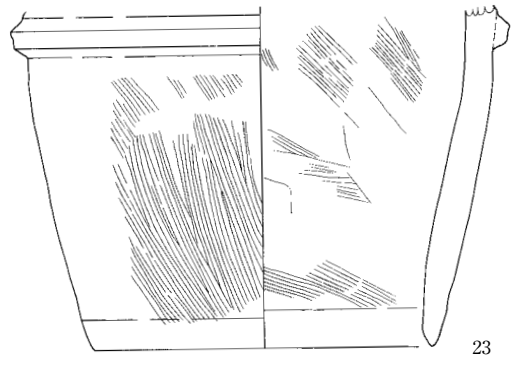
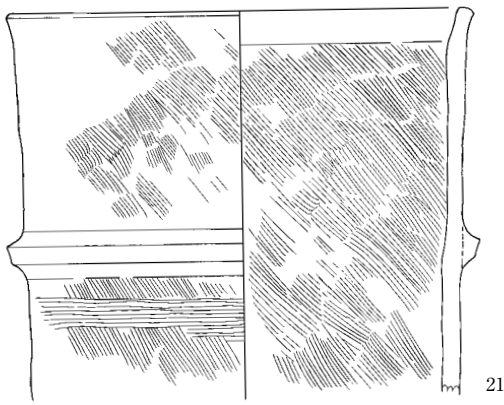
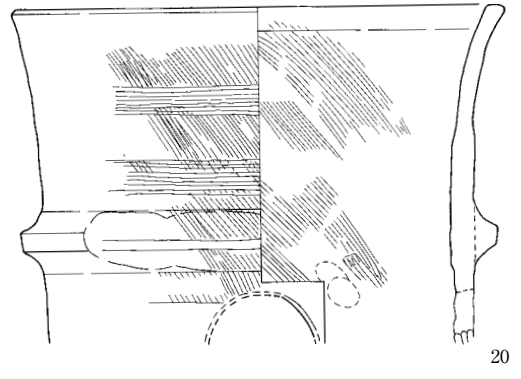
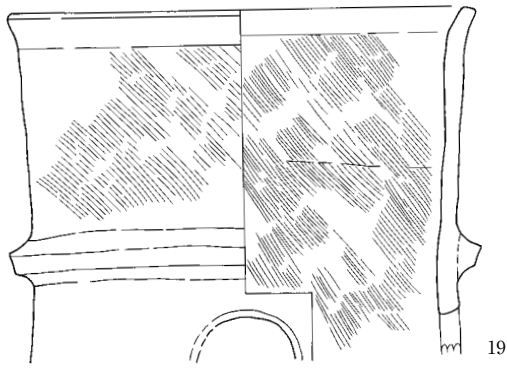


第27図 埴輪 (2)



第28図 埴輪 (3)





第29図 埴輪 (4)

第26～29図 遺物観察表

\*復元値 △現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土	色調	備考
5	26	周溝C群 上、中層	円筒埴輪	27.1 17.7	44.6	1次：ナナメハケ 基底部倒立再調整：タタキ後、基底部内外面にナナメハケ、端部カット	密 良好	内外面：橙色	V字ヘラ記号2
6	26	周溝A群 中層	円筒埴輪	27.3 17.8	41.8	1次：ナナメハケ 外面中段B種ヨコハケ 基底部倒立再調整：タタキ後、基底部内外面にナナメハケ、端部カット	密 砂粒を多く含む 良好	内外面：橙色	X字ヘラ記号2
7	26	周溝B群 中層	円筒埴輪	*23.8 *17.7	41.0	1次：ナナメハケ 基底部倒立再調整：タタキ後、内外面にナナメハケ、端部と端部外面ヨコナデ	密 細かい砂粒を含む 良好	内外面：橙色	V字ヘラ記号1 埋葬施設に使用か
8	26	周溝D群 中層	円筒埴輪	28.0 17.1	40.2	1次：ナナメハケ 基底部倒立再調整：風化のため不明	密 細かい砂粒を多く含む やや軟	内外面：橙色	
9	27	周溝A群 中層	円筒埴輪	27.8 13.4	40.0	1次：ナナメハケ 外面上・中段B種ヨコハケ 基底部倒立再調整：タタキ	密 良好	内外面：橙色	
10	27	周溝B群 中層	円筒埴輪	29.0 17.1	△36.6	1次：ナナメハケ 基底部倒立再調整：タタキ後端部外面ナデ 端部に板押し付け	密 良好	内外面：橙色	
11	27	周溝C群 中層	円筒埴輪	27.6 17.2	39.0	1次：ナナメハケ 基底部倒立再調整：タタキ	密 良好	内外面：明赤褐色	
12	27	周溝B群 上、中層	円筒埴輪	27.4 14.0	△33.0	1次：ナナメハケ 外面上段下・中段上にB種ヨコハケ 基底部倒立再調整：風化のため不明	密 砂礫を多く含む やや軟	内外面：橙色	
13	28	周溝B群 中層	円筒埴輪	*30.0 —	△25.8	1次：ナナメハケ 突帯貼り付け後ヨコナデ	密 良好	内外面：橙色	埋葬施設に使用か
14	28	周溝D群 中層	円筒埴輪	20.4 —	△25.6	1次：ナナメハケ 突帯貼り付け後ヨコナデ 口縁部ヨコナデ	密 良好	内外面：橙色	
15	28	周溝A群 中層	円筒埴輪	*27.0 —	△22.8	1次：ナナメハケ 突帯貼り付け後ヨコナデ 口縁部外面ヨコナデ	密 細かい砂粒を含む 良好	内外面：橙色	
16	28	周溝A群 中層	円筒埴輪	24.5 —	△22.0	1次：ナナメハケ 突帯貼り付け後ヨコナデ 口縁部内面ヨコナデ	密 細かい砂粒を多く含む 良好	内外面：明橙色	
17	28	周溝D群 中層	円筒埴輪	28.8 —	△20.5	1次：ナナメハケ 突帯貼り付け後ヨコナデ 口縁部ヨコナデ	密 良好	内外面：明赤褐色	
18	28	周溝E群 中層	円筒埴輪	26.5 —	△20.5	1次：ナナメハケ 基底部倒立再調整：内面に板状当て具痕 口縁部ヨコナデ	密 良好	内外面：橙色	
19	28	周溝E群 中層	円筒埴輪	*23.6 —	△18.4	1次：ナナメハケ 突帯貼り付け後ヨコナデ 口縁部ヨコナデ	密 細かい砂粒を多く含む 良好	内外面：橙色	
20	29	周溝D群 中層	円筒埴輪	26.2 —	△17.8	1次：ナナメハケ 外面上段に2条、および中段にB種ヨコハケ 口縁部ヨコナデ	密 良好	内外面：橙色	
21	29	周溝E群 中層	円筒埴輪	*23.8 —	△20.5	1次：ナナメハケ 中段上部にB種ヨコハケ 突帯貼り付け後ヨコナデ 口縁部ヨコナデ	密 細かな砂粒を含む 良好	内外面：橙色	
22	29	周溝 中層	円筒埴輪	*22.7 —	△10.0	1次：ナナメハケ 口縁部：ヨコナデ	密 細かい砂粒を多く含む 良好	内外面：橙色	
23	29	周溝 上、中層	円筒埴輪	— *17.8	△17.8	1次：ナナメハケ 基底部倒立再調整：タタキ後ナナメハケ、 端部内外面ヨコナデ	密 細かい砂粒を多く含む 良好	内外面：橙色	
24	29	周溝 上層	円筒埴輪	— *19.0	△15.0	1次：ナナメハケ 基底部倒立再調整：押圧後、外面と内面端部にナナメハケ	密 良好	外面：橙色 内面：にぶい黄褐色	半須恵質 製作者は左利き
25	29	周溝A群 中層	朝顔形埴輪	37.0 —	△34.0	1次：ナナメハケ 外面体部上段にB種ヨコハケ 内面頸部ケズリ	密 細かい砂粒を含む 良好	内外面：橙色	
26	29	周溝 中層上	朝顔形埴輪	— *22.3	△10.0	1次：ナナメハケ 基底部正立再調整：外面にB種ヨコハケ 内面にケズリ	密 細かい砂粒を多く含む 良好	内外面：橙色	



同様なので、製作地などの関係があると思われる。調査区内の周溝の東端、18号墳入口からは反時計回りに約130度の位置で出土した。

26は基底部の小片である。底径は22.3cmに復元でき、円筒埴輪より明らかに大きい。1次調整は内外面ともナナメハケである。基底部の再調整として、端部内面には横方向のケズリを、端部外面にはB種ヨコハケを、それぞれ倒立させずに加えている。朝顔形埴輪の場合、大きく開く口縁部を積み上げた後で倒立させると口縁部を損なうことになるので、基底部の再調整は正立した状態で加える必要があるだろう。以上から、基底部のみの破片であるが朝顔形埴輪であると思われる。周溝埋土中層上部からの出土で、小片であり、原位置を大きく動いていると考えられる。埴裾ではなく、より高い位置に樹立されていたものかもしれない。

#### 4. 古代の遺物（第30～32図、図版19～22）

古代の遺物は、ほとんどが埋土上層からの出土で、埋土中層上部から出土したものが少数ある。

##### 須恵器

27は杯身で、底部はヘラケズリ後不整方向のナデを加えて仕上げる。やや雑な作りで類例が乏しいが、糸切りを用いていないので9世紀までは下らないと思われる。28は長頸瓶の底部である。造成土と18号墳周溝出土遺物が接合した例である。黒色物質が付着しているが、破面にも観察されるので埋没後のものかもしれない。

##### 土師器

29と30は杯の小片で、周溝埋土中層上部からの出土。ともに赤色顔料を塗布し、29には体部外面に「サ」字状の細い線刻がある。31はおそらく高台付杯の底部破片で、高台は外向きに開く。32～35は甕の口縁部で、口縁は屈曲して鐔状を呈する。調整は、外面は頸部以下にハケメを施し、内面は口縁部にハケメを、頸部以下にヘラケズリを加えるのが基本である。8～9世紀頃のものと思われる。36は器形不明の口縁部片で、端部は外側に玉縁状に張り出す。埋土中層上部からの出土で、古代のものではない可能性がある。37と38は竈で、37は焚口の側縁から上部にかけての、38は焚口底部の破片で、いずれも鐔を欠失する。ともに内面はヘラケズリし、37は外面にハケメを、38はナデを加える。39は把手の部分の破片で、手捏ねで仕上げる。甌であろうか。

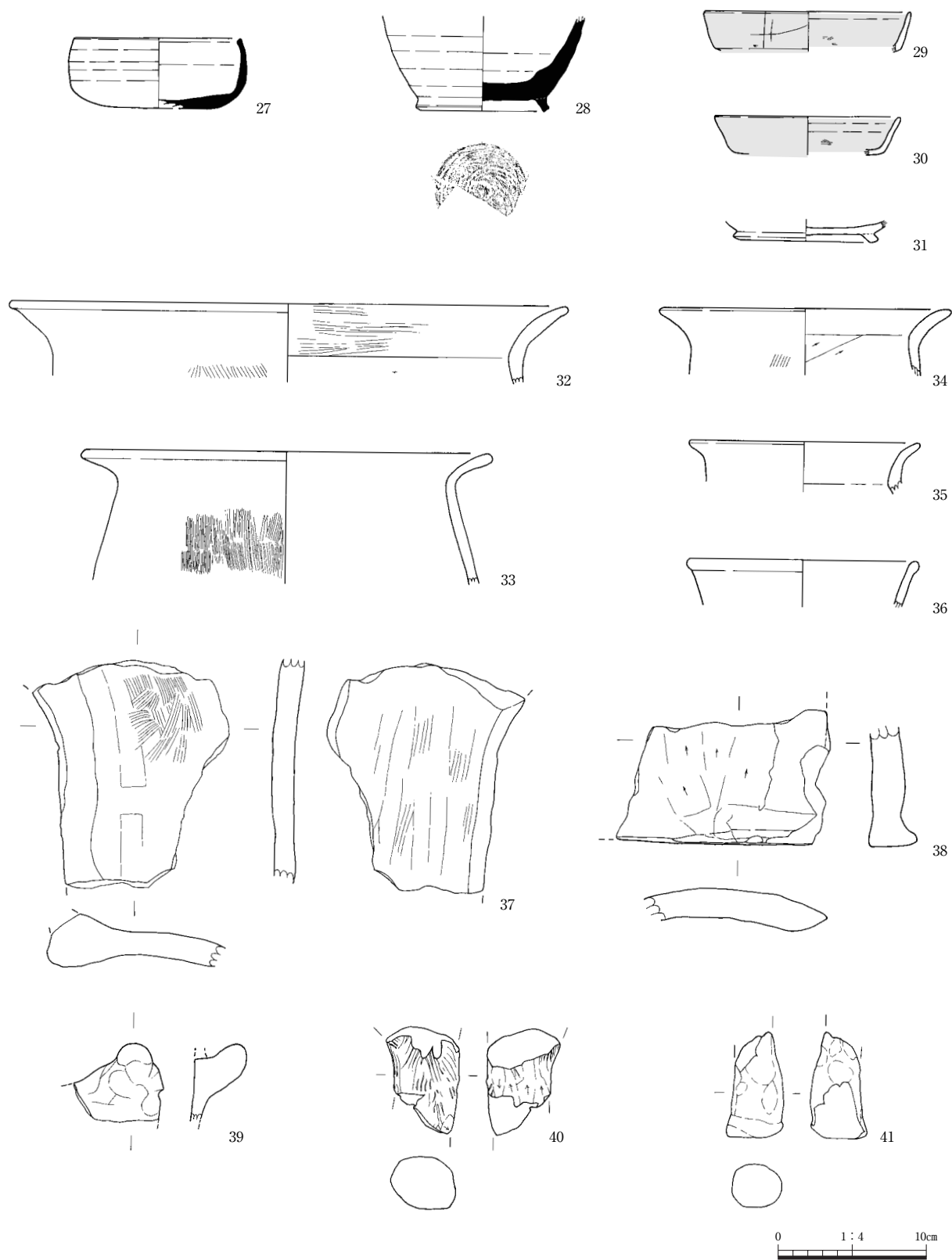
##### 土製品

40は不明土製品。中実で、動物の足の付け根の部分に似ている。断面は楕円形で、内股にあたる側がやや平らである。平らな側はヘラケズリで仕上げ、丸みの強い側は10条程度の櫛状工具で主に長軸方向に短い沈線を施す。41も不明土製品。中実で、手捏ねで成形している。底面は平らで、象の足に似ている。40と41はともに土馬の脚部の破片の可能性はある。

##### 鉄関連遺物

周溝埋土上層から、製錬系を主体に鍛冶関連の遺物を含んだ、各種の鉄関連遺物が出土している。日野川あるいは日野川旧流路の砂鉄を素材に、18号墳の付近で製鉄を行ない、廃棄物を埋まりかけた周溝に投棄したものと考えられる。

ところで、鉄関連遺物は、岸本町教育委員会による隣接地の調査では全く出土していない。造成土中には流動滓が全く含まれていないことや、圃場整備前に行われた調査でも出土していないことを考慮すると、町教育委員会調査地の周溝上部がより削平されているからというよりは、鉄関連遺物の分



第30図 古代の土器および土製品

## 第30図 遺物観察表

\*復元値 △現存値

遺物 番号	挿回 番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎 土 成	色 調	備 考
27	30	周溝 上・中層	須恵器 杯身	11.2 6.8	4.8	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	密 良好	内外面：灰色	
28	30	D14・周溝 造成土・上層	須恵器 長頸壺	— *9.0	△6.25	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り後高台貼り付け	密 良好	内外面：灰色	
29	30	周溝 上層	土師器 杯	*13.8 —	△2.7	内外面：ナデ後ミガキ	密 1mm以下の砂粒を含む 良好	内外面：にぶい黄褐色	赤色塗彩 体部外面に「サ」字状の線刻
30	30	周溝 中層上	土師器 杯	*12.5 —	△2.6	内外面：ナデ後ミガキ	密 1mm以下の砂粒を含む 良好	内外面：にぶい黄褐色	赤色塗彩
31	30	周溝 上層	土師器 高台付杯	— *9.9	△1.5	内外面：ナデ	密 3.5mm以下の砂礫を含む 良好	内外面：明黄褐色	
32	30	周溝 上層	土師器 甕	*37.4 —	△5.2	外面：口縁部ナデ 頸部以下ハケメ 内面：口縁部ハケメ 頸部以下ケズリ	密 細かい砂粒を多く含む 良好	内外面：橙色	
33	30	周溝 中層上	土師器 甕	*27.2 —	△8.7	外面：口縁部ナデ 頸部以下ハケメ 内面：ケズリ後ナデ	密 大・小の砂粒を多く含む 良好	内外面：暗褐色	
34	30	周溝 上・中層	土師器 甕	*19.8 —	△4.5	外面：口縁部ナデ 頸部以下ハケメ 内面：口縁部ハケメ 頸部以下ケズリ	密 2mm以下の砂粒を含む 良好	内外面：橙色	
35	30	周溝 上層	土師器 甕	*15.4 —	△2.7	内外面：ナデ	密 細かい砂粒を多く含む 良好	内外面：橙色	
36	30	周溝 中層上	土師器 不明	*15.4 —	△3.1	内外面とも横ナデ	密 1mm以下の砂粒を含む 良好	内外面：灰黄褐色	
37	30	周溝 上層	土師器 甕	— —	△15.3	外面：ハケメ 内面：ケズリ後ナデ	密 砂粒を多く含む 良好	内外面：橙色	
38	30	周溝 上層	土師器 甕	— —	△9.2	外面：ケズリ後ナデ 内面：ケズリ	密 3mm以下の砂礫を多く含む 良好	内外面：橙色	
39	30	周溝 上層	土師器 甕?	— —	△5.2	外面：手捏ね 内面：ケズリ	密 2mm大の砂粒を多く含む 良好	内外面：黄褐色	把手の部分
40	30	周溝 上層	不明土製品	— —	△7.1	外側：樹状工具による平行沈線 内側：ケズリ	密 細かい砂粒を含む 良好	暗褐色	土馬の脚部か
41	30	周溝 上層	不明土製品	— —	△7.0	手捏ね	密 細かい砂粒を含む 良好	明黄褐色	土馬の脚部か

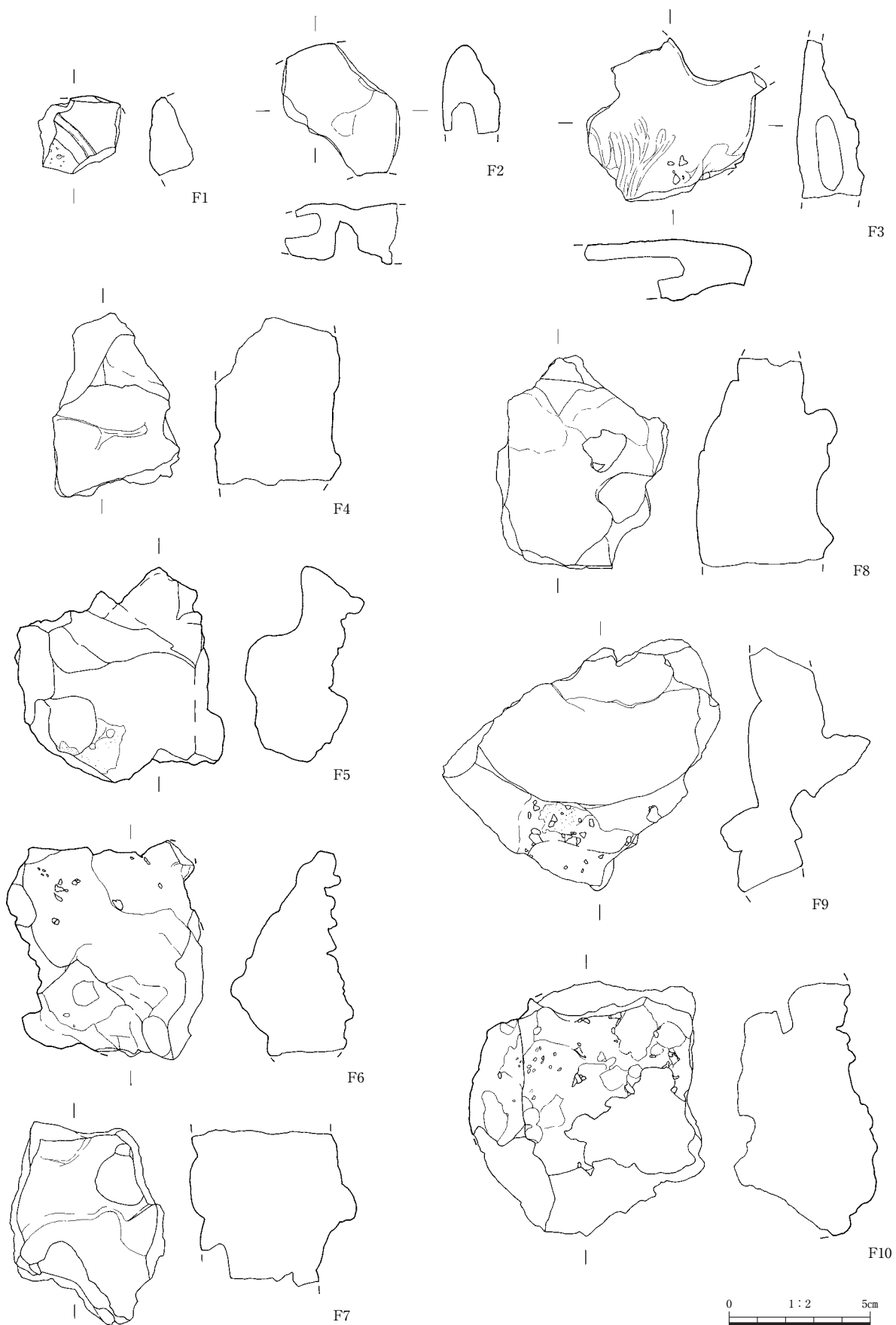
布が18号墳周溝南側のごく一部に限られていたと考えるほうが妥当であろう。製鉄が行われたのは周溝の南側平坦地で、比較的近い場所であったと考えられる。

鉄滓：総重量7.4kgが出土し、2点を除くほとんどが製錬系の流動滓である。大半は埋土上層から出土した。F1～F12は流動滓の代表例である。気孔や流れ皺が顕著で、厚みがある。また、炉壁粉や土砂が付着するものが多く含まれている。F11は炉外流出滓と考えられる。接合するものがあり、特徴がよく似ているので、1回の操業で出たものかもしれない。

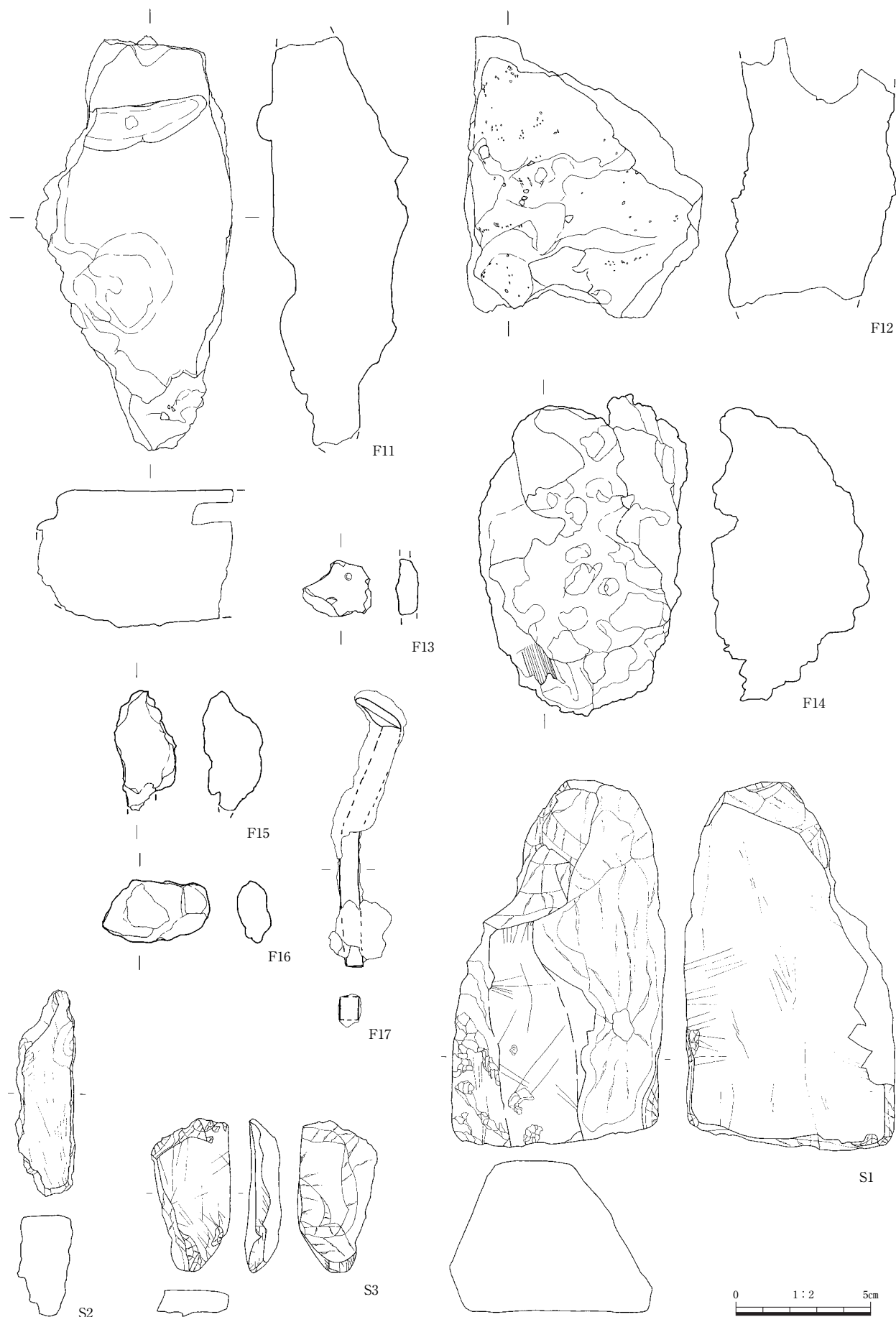
F13は鍛冶炉の炉壁と考えられるガラス質の溶解物で、F14とF15は椀形鍛冶滓である。製錬が主体であるが、鍛冶も行われていたことが分かる。

鉄器：2点が出土している。F16は埋土中層上部出土の不明鉄製品。薄板状の鍛造品で、刀子か紡錘車の破片と思われる。F17は埋土上層出土の釘状鉄製品。鍛造品で、体部は方形で頭部が折れ曲がる。懸金具の可能性はある。

砥石：S1～S3の3点が出土した。S1は花崗岩製で、大きな石塊の剥離面のうち2面を砥面に利用したものである。S2は砂岩製で、破片のため全形は不明だが厚いであろう。S3は粘板岩製で小さくて平たく、整っている。石材・大きさ・形態が三者三様なのは、別々の作業工程に対応しているからかもしれない。



第31図 鉄関連遺物 (1)


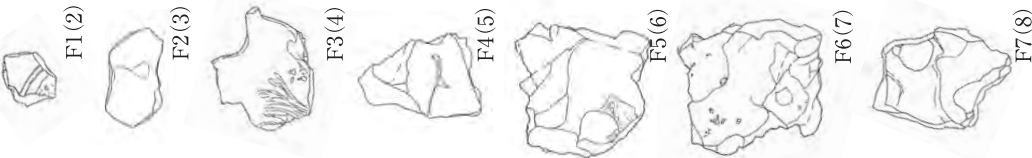
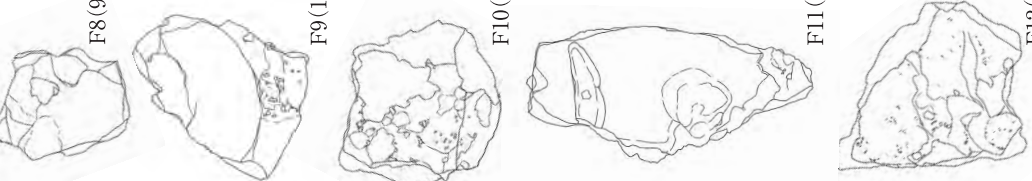






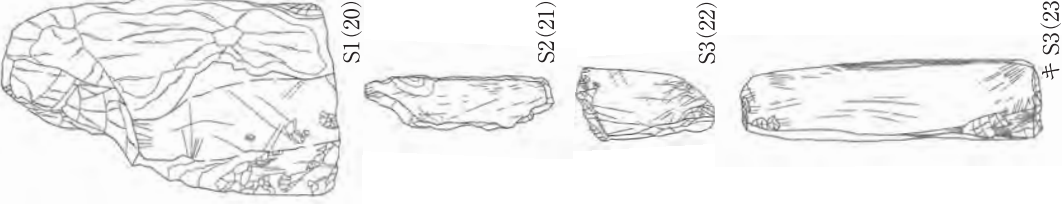


第32図 鉄関連遺物 (2)

大殿狐谷遺跡・長者原18号墳 鉄関連遺物観察表

遺物番号	構成番号	挿回番号	遺物名	出土遺構層位	計測値 (cm)			重量 (g)	磁化度	メタル度	備考
					長さ	幅	厚さ				
キF1	1	16	鉄製品(鋳造品?) 鉄斧?	狐谷S15 床直	5.6	4.8	2.2	46	5	錆化(△)	表面が厚い酸化土砂に覆われた薄板状の鉄製品破片。厚みは2mm前後で、ごくわずかに反っているように見える。透過X線画像では錆化が激しく進んでおり、鋳造品か鍛造品かの区別はつきにくい。一部が直線状になっている部分もあり、鉄斧の破片ではないかと推定しておく。
F1	2	31	流動滓(製錬系)	C14 18号墳 1層	2.9	2.7	1.5	18	2	なし	表面にわずかに流れ皺をもつ製錬系の流動滓小破片。上下面が生きており、側5面が破面となる。上手側に向かい徐々に薄くなっており、下面には地山の土砂の痕跡を残す。滓は緻密で気孔はまばら。
F2	3	31	流動滓(製錬系)	C14 18号墳	3.7	4.0	2.1	45	2	なし	前者とやや似た流動滓の端部破片。上下面が生きており、側面4面が破面となる。滓表面は平滑で、下面には地山土砂の痕跡を残す。左下手側の破面には横方向に肥大した気孔が伸びている。
F3	4	31	流動滓(製錬系)	C15 18号墳 1層	5.6	5.8	2.2	70	3	なし	上面に流れ皺を強く残している流動滓端部破片。上下面とも右端部が生きており、残る側面3面が破面となる。前者と同様、中間層の気孔が肥大して横方向に伸びている。下面右側には炉壁粉が貼り付く。
F4	5	31	流動滓(製錬系)	C15 18号墳 1層	6.1	4.5	4.4	188	2	なし	側面全面がシャープな破面に囲まれた、厚さ4.3cm程の流動滓破片。破面数は8面を数える。上面は流動単位を示す筋と流れ皺が混在する。滓質は緻密で破面の一部には肥大した気孔が残る。
F5	6	31	流動滓(製錬系)	C15 18号墳 1層	6.9	6.9	3.2	263	3	なし	上面の8割方が別単位の流動滓の剥離痕となっている流動滓破片。側面は基本的に破面で、破面数は6面以上を数える。上面上手側の肩部には、箱形炉の可能性の高い炉壁土が貼り付いている。下面は不規則な凹凸が連続する自然面で、石英質の砂粒が固着する。
F6	7	31	流動滓(製錬系)	C15 18号墳 1層	7.7	6.5	4.0	298	4	なし	前者とやや似た表面をもつ流動滓破片。上下面が生きており、側面には小破面が連続する。上面の8割方は別単位の流動滓の剥離痕で、平滑さが失われている。側面の破面はシャープで、流動単位の隙間が筋状になる。下面も小さな流動単位が重層しており、石英質の石粒が貼り付いている。
F7	8	31	流動滓(製錬系)	C15 18号墳 1層	6.9	5.4	5.7	333	3	なし	構成No5や9と似た、厚さ4.8cm前後のしっかりした流動滓破片。上下面は平滑で、それぞれの流動単位を示す重層が露出する。幅2.5cm程で比較的ゆったりと流動する。下面の流動気孔は、別単位の滓を上下逆に巻き込んでいるためである。滓質は緻密で、上面表皮寄りには気孔が発達する。
F8	9	31	流動滓(製錬系)	C15 18号墳 1層	7.3	5.8	4.8	351	3	なし	前者と似た厚板状の流動滓破片。側面は全面破面で、破面数は6面を数える。上面は平滑で、破面は石英質の石粒が点々と貼り付く自然面。上面表皮寄りには気孔が横方向に肥大する。
F9	10	31	流動滓(製錬系)	C15 18号墳 1層	8.4	8.7	4.2	361	2	なし	側面から下面が破面となった流動滓表皮破片。上面は右方向に流動する4単位の流動滓が重層しており、流れ皺や石英質の石粒の固着部も残る。側面の破面には滓の重層が横方向の筋状に確認され、下面は大きく発達した気孔の天井部となる。
F10	11	31	流動滓(製錬系)	C14 18号墳 1層	8.9	8.0	4.9	557	2	なし	側面がシャープな破面に囲まれた厚板状の流動滓破片。破面数は5面を数える。上面は気孔の下面にあたる結晶の肥大した面で、気孔は4単位以上に分かれている。右側部下半から下面には炉壁粉や石英質の石粒の固着した自然面となる。上手側側面の破面は横方向に気孔が肥大して中空部となる。
F11	12	32	流動滓(製錬系)	18号墳 サブトレ	15.2	7.2	5.1	755	4	なし	本遺跡の流動滓を代表する最大破片である。上面は平滑な流動状で、上手側には右方向に重層する流動単位が残されている。下手側の端部は半流動状の古い段階の滓部が引きつれたように確認され、表面には炉壁粉の圧痕が残されている。側面はシャープな破面に囲まれており、結晶が肥大して上下方向に伸びている。また、水平方向に発達した気孔や流動単位の隙間が確認される。下面は自然面と大きく発達した気孔の天井部の混在状態となり、石英質の石粒が点々と残されている。炉外流出滓の可能性が高い。
F12	13	32	流動滓(製錬系)	C14 18号墳 1層	10.1	8.7	5.9	770	1	なし	構成No11とやや似た厚板状の流動滓破片。側面は全面破面で破面数は6面を数える。上面は平滑な自然面と水平方向に発達した気孔の下面となっており、一部に炉壁粉が散っている。下面は不規則な血状で全面に炉壁粉や石英質の石粒が固着する。滓質は緻密で右側には大型の気孔が発達する。
F13	14	32	炉壁(鍛冶炉)	C13 18号墳 2層	2.0	2.5	0.8	3	1	なし	内面が溶化した薄皮状の炉壁表面破片。側面から下面は破面となっている。内面の右半分は黒色ガラス化して垂れ下り、左側はやや錆色となる。ガラス化しているのは表面の1.5cm程度と薄く、被熱状態は弱い。胎土は混和物を含まないやざっくりとしたもの。
F14	15	32	椀形鍛冶滓 (大、含鉄)	C14 18号墳 2層	11.8	7.5	5.8	525	5	錆化(△)	左右の側面が破面となった大型の椀形鍛冶滓、中核部破片。破面数は3を数える。下面上手側に別単位の小ぶりの椀形鍛冶滓が重層している可能性をもっている。上面は木炭痕に覆われた平坦面となっており、外周部分が一部、筋状に段をなす。木炭痕は1cm前後が目立つ。短軸側の側面から下面は粉炭痕に覆われた楕円状または椀形となる。下手側の側面はやや荒れてギザギザした木炭痕が露出する。滓質は芯部が緻密で、外周部は木炭痕が目立つ。上下面がわずかに磁着する。
キF2	16	20	椀形鍛冶滓 (中、含鉄)	狐谷D12 造成土	9.3	9.7	2.9	308	4	錆化(△)	左側の肩部に小破面を残す、完形に近い中型の椀形鍛冶滓。上面は緩やかな波状で、左側端部に羽口の頸部が接していたためか、粘土質の溶解物がわずかに残されている。肩部はやや出入りがあり、右側の端部は工具により突き崩されている。側面から下面は浅い椀形で、1.5cm以下の木炭痕が密に並んでいる。滓質は内部にも木炭痕や気孔が多く、やや比重が低目となる。
F15	17	32	椀形鍛冶滓 (小、含鉄)	C14 褐色土	4.4	2.2	2.2	21	4	錆化(△)	最大厚さ2mm程の椀形鍛冶滓の肩部小破片。右方向に向かって薄くなっており、上下面と右側の側面が生きている。破面は左側部のみ。小型または中型の椀形鍛冶滓の肩部破片ではないかと厚み傾向から判断される。比較的、上下面が平滑となっているのが特色で、前者とは別個体である。
F16	18	32	鉄製品(鍛造品) 薄板状(不明)	C13 18号墳 2層	4.0	2.3	10.0	11	4	錆化(△)	表面が酸化土砂に覆われた薄板状の鉄製品破片。平面形は不整形円形で、左側部は破面の可能性が高い。鉄製品としては3mm前後の厚みか。刀子あるいは紡錘車の円盤部の破片の可能性あり。
F17	19	32	鉄製品(鍛造品) 頭折釘状	C14 18号墳 1層	10.2	0.8	0.8	46	6	L(●)	頭部が左側に大きく広がった頭折釘状の破片。体部の途中で足部側が欠落している。体部の横断面形状は方形で、頭部に向かってより長方形ぎみとなっている。頭部は2cm前後の大きさで、厚みは3mm程か。全体が「くの字状」に折れ曲がっており、部分的に瘤状の土砂が張り付いている。一見、小ぶりの釘状で懸金具の可能性も有り。
S1	20	32	砥石(花崗岩)	C13 18号墳 サブトレ	13.3	7.7	5.8	727	なし	なし	側面2面に砥面が確認される砥石破片。下手側が大きく欠落しており、左側面上手側も破面となっている。現状の横断面形状は三角形に近い台形で、砥面が上下面に形成されている。砥面の方向は長軸方向に向く。石質はきめの細かい花崗岩か。
S2	21	32	砥石(砂岩)	C14 18号墳 2層	7.5	2.5	3.7	67	なし	なし	上面に砥面を残す砥石破片。砥面以外は全面が破面となっている。右側部は砥石本来の表面であった可能性もある。砥痕は長軸方向のみ。
S3	22	32	砥石	C15 18号墳 1層	5.5	2.9	1.1	20	なし	なし	薄板状の4面に砥面を残す砥石表面破片。石質は粘板岩または砂岩と推定される。左側部から上手側部に加えて、下面の9割方が破面となっている。砥面は上面と右側部が平坦ぎみで、下手側側面は小さな多面体状となる。砥痕は長軸方向。
キS3	23	20	砥石	狐谷D9 造成土	12.0	3.2	2.4	134	なし	なし	側面4面が砥面となった細身の砥石。長軸の両端部は自然面で、砥痕は残されていない。石質は緻密な凝灰岩系または砂岩か。砥痕は長軸方向で使い込まれている。下手側の端部が破面の可能性をもつが、現状では不明となる。砥痕は長軸方向主体で、下面には斜め方向の擦り傷が目立つ。



①鉄製品 (鑄造品?)	②流動滓 (製鍊系)		炉壁 (鍛冶炉)	椭圆形鍛冶滓(大、含鉄)	④鉄製品 (鍛造品)	砥石
錆化 (△)  卍 F1(1)	 F1(2) F2(3) F3(4) F4(5) F5(6) F6(7) F7(8)	 F8(9) F9(10) F10(11) F11(12) F12(13)	 F13(14)	錆化 (△)  F14(15) 椭圆形鍛冶滓(中、含鉄) 錆化 (△)  卍 F2(16) 椭圆形鍛冶滓(小、含鉄) 錆化 (△)  F15(17)	錆化 (△)  F16(18) 鉄製品 (鍛造品) L (●)  F17(19)	 S1(20) S2(21) S3(22) 卍 S3(23)
分析						

第33図 鉄関連遺物構成図

## 第6章 大殿狐谷遺跡等の放射性炭素年代

株式会社 加速器分析研究所

### (1) 遺跡の位置

大殿狐谷遺跡・長者原18号墳は、鳥取県西伯郡伯耆町大殿字南狐谷2553(北緯35°23′02″、東経133°23′36″)に位置する。

### (2) 測定の意義

長者原18号墳と大殿狐谷遺跡竪穴住居S I 5の築造年代を推定する。

### (3) 測定対象試料

長者原18号墳の周溝の埋土下層(6層)から出土した木炭(1:IAAA-71100)、大殿狐谷遺跡の竪穴住居S I 5の床面直上から出土した木炭(2:IAAA-71101)、合計2点である。

### (4) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを製作する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

### (5) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)

を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も同時に行う。

## （6） 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る $^{14}\text{C}$ 年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 $\chi^2$ 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

- 4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_s - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_s - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_s$ ：試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_s$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_s$

$^{14}\text{A}_R$ ：標準現代炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_R$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_R$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度（ $^{13}\text{A}_s = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0(\text{‰})$ であるとしたときの $^{14}\text{C}$ 濃度（ $^{14}\text{A}_N$ ）に換算した上で計算した値である。（1）式の $^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_N = ^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_s \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad (^{14}\text{A}_s \text{として} ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_N - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

$^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）

がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000(\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100(\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrB) が次のように計算される。

$$\begin{aligned} T &= -8033 \times \ln[(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1] \\ &= -8033 \times \ln(\text{pMC}/100) \end{aligned}$$

5)  $^{14}\text{C}$ 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv3.10較正プログラム (Bronk Ramsey1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使用した。

#### (7) 測定結果

長者原18号墳の周溝の埋土6層から出土した木炭(1 : IAAA-71100)の $^{14}\text{C}$ 年代が $1640 \pm 30\text{yrBP}$ 、竪穴住居S I 5の床面直上から出土した木炭(2 : IAAA-71101)の $^{14}\text{C}$ 年代が $1790 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1 $\sigma$  = 68.2%)は、1が $340 \sim 440\text{AD}$  (61.7%)・ $490 \sim 510\text{AD}$  (5.2%)・ $520 \sim 530\text{AD}$  (1.3%)、2が $130 \sim 260\text{AD}$  (52.0%)・ $280 \sim 330\text{AD}$  (16.2%)である。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

#### 参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

第1表 放射性炭素年代測定結果

IAA

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-71100  # 1907-1	試料採取場所：鳥取県西伯郡伯耆町大殿字南 狐谷2553 長者原18号墳 試料形態：木炭 試料名（番号）：1	Libby Age (yrBP) : 1,640±30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -25.22±0.73 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -184.8±3.4 pMC(%) = 81.52±0.34
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -185.2±3.2 pMC(%) = 81.48±0.32 Age(yrBP) : 1,650±30
IAAA-71101  # 1907-2	試料採取場所：鳥取県西伯郡伯耆町大殿字南 狐谷2553 大殿狐谷遺跡 試料形態：木炭 試料名（番号）：2	Libby Age (yrBP) : 1,790±30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -12.29±0.62 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -199.5±3.3 pMC(%) = 80.05±0.33
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -178.5±3.2 pMC(%) = 82.15±0.32 Age(yrBP) : 1,580±30

## 第7章 考察 長者原18号墳の円筒埴輪について

### はじめに

長者原18号墳の周溝から出土した埴輪は一括性が高く、鳥取県西部における基準資料の一つとなる。また、これまでの山陰地方における埴輪研究は、製作技術についての定性的な分析を中心としたものが多いが、本古墳出土の埴輪は、ある程度は定量的な分析が可能である。そこで、本論では、主に形態的な属性と製作技術について検討を加え、本古墳の円筒埴輪の特徴を明らかにしたい。

### 第1節 山陰地方における円筒埴輪研究の現状

山陰地方の古墳時代後期の円筒埴輪については、川西宏幸氏による全国的な円筒埴輪の基礎研究（川西1978）の中で触れられて以来、特に鳥取県においてはまとまった資料が少なかったこともあり、これまで大きな進展をみていなかった。県内の埴輪を概観したものとしては、寺西健一氏による研究（寺西1985）など、数えるほどしかない。

しかし、島根県においては、最近、山内英樹と大谷晃二の両氏によって、製作実験を踏まえて、主に基底部の再調整技術に関する詳細な研究が発表されている（山内2003、大谷2003）。両氏の研究から本論と関係する部分をまとめると、以下の点をあげることができる。

- ・後期の円筒埴輪は、粘土紐を一気に巻き上げて作るため、自重により基部が潰れて粘土がはみ出す。そこで、最終段階において、埴輪を倒立させて基底部を整形する必要がある。この基底部倒立再調整は、大きくタタキ技法と押圧技法に分けられる。タタキ技法は、（1）内部に角柱状または円柱状の当て具をあてて外部を板状あるいは円柱状の工具で叩き締めるタタキ、（2）内外面のタタキによる工具痕をナデにより消す倒立ナデ調整、（3）工具痕をハケで消す倒立ハケメ調整、（4）基底部端にはみ出した粘土をヘラ状の工具で切り取り端部を揃えるカット、の順に各工程を経る。タタキ以外の工程は一部またはすべてが省略されることがある。一方、押圧技法は、内面に指を当て外面を板状工具で小刻みに押さえるもので、倒立ナデや倒立ハケメやカットを伴う例は確認されていない。
- ・基底部倒立再調整は須恵器編年の出雲1期新段階（TK23～47併行期）に出現し、出雲3期（TK43併行期）まで継続する。カットを伴うタタキ技法と押圧技法とで構成される1段階、タタキ技法からカットが省略される2段階、押圧技法が消滅し、内外面とも円柱状工具を用い倒立ハケメを省略したタタキ技法が一般的になる3段階に編年できる。地域的には、カットが出雲地方東部のみにみられる技術で、溝状の角柱状当て具痕は安来平野に、筋状の角柱状当て具痕は島根半島中央部と松江市南部にそれぞれ分布する。

### 第2節 長者原18号墳の円筒埴輪

対象とする資料は、18号墳出土の円筒埴輪のうち土師質の19点である。全体について属性を記録することができるものが8点、上段を中心としたものが10点、基底部が1点である。

第5章で述べたとおり、18号墳の円筒埴輪は、主に胎土や焼成に関係する特徴をもとに、大きく2類に分けられる。



**1類：**焼成は不均質。断面内部は灰褐色、内外表面は赤みの強い橙色を呈する。黒斑をもつものはない。ヘラ記号を刻む。基底部に倒立ハケメをもつ。

**2類：**焼成は断面内部まで均質。色調は橙色で、黄色みが強いものもある。黒斑をもつものが多い。

多くは胎土に白色粘土が練りこまれる。ヘラ記号を刻むものはない。倒立ハケメは加えない。

本来なら、さまざまな属性を検討したうえで有意な組み合わせをもとに分類し、分析を行うべきところではあるが、紙幅の都合もあり、また、上述の特徴だけからも明確に2分類できるので、以下の分析は主にこの2類を対比させる形で、製作の手順をたどりながら進めたい。対象資料数が多くないので、数値の偏りによる影響は避けられないが、おおよその特徴を抽出することはできたと思われる。

**1. 属性と用語**

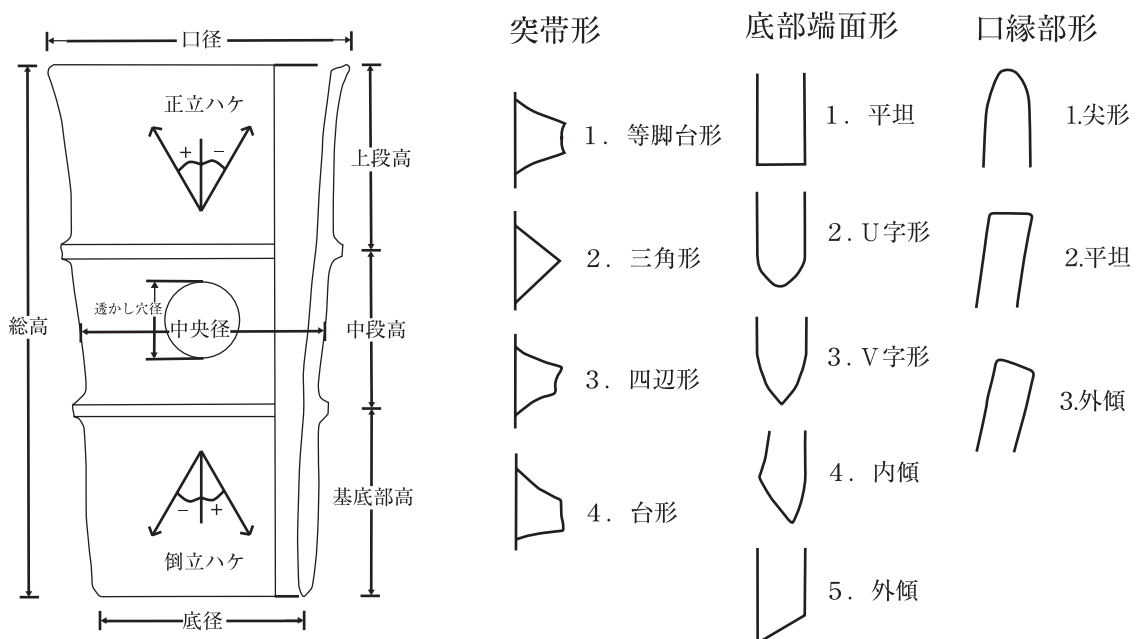
計測位置および、突帯形・底部端面形・口縁部形の分類基準は第34図に示すとおりである。そのうち、上段高・中段高・基底部高は、いずれも突帯中央までの値を計測したものである。また、ハケ角度は、器軸に対するハケメの傾きを器軸からの開きで計測したもので、左上に向かって施されたものは正、右上のものは負の値になる。負の値を示すのは製作者が左利きの場合で、半須恵質の1点（個体24）しかなく、分析対象資料からは外れる。倒立ハケメは倒立した状態で計測し、やはり左上方向が正である。ハケ単位は、ハケメを構成する条線間の平均値である。

基底部の再調整に関する用語と同定は、上記の山内・大谷氏のものを参考としている。

**2. 形態**

表2に、径および高さの平均値と比率を示す。

径に関しては、1類に比較して2類の方が、底径に対して口径が大きな、口縁部が開いた形態のものが多く読み取れる。しかしながら、口径と中央径の比率には、類型間でほとんど違いがない。したがって両者の差は、主に中央径と底径の比率に関係しているとみなされ、2類の方が、中段から基底部に向かって閉じる傾向が顕著であることになる。その理由は、樹立した際に土中に隠れてしまう部分に対する手抜きとも取れるが、おそらくは基底部内面における倒立再調整の入念さに関係



第34図 計測位置と分類基準

するであろう。なぜなら、1類の場合は内面にも倒立ハケメを加えているので、基底部がより広がることになるからである。興味深いのは、2類に属する個体10で、倒立ハケメこそ加えないものの基底部内外面に入念なナデを施しており、2類のうちで唯一、1類とほぼ同じ中底比を示す。

高さに関しては、1類の方が2類よりも高い。最大の個体5と最小の個体11の間には、総高で5.6cmもの差がある。しかし、中段の高さを見ると、1類も2類も大きな違いはなく12cm前後で揃っている。各段の総高に対する比率を見ても、基底部や上段はまちまちで、上段が高いものも基底部が高いものもあるが、中段の比率だけは全体の30%にほぼ統一されている。これは、中段が2本の突帯で区切られるからで、樹立した時に突帯の位置が揃うことに慎重な配慮が払われていると考えられる。個体5、17、20などは、剥落した突帯の下に浅い沈線が観察できるが、突帯を接合するための刻みとしては明らかに弱いので、突帯を貼り付ける位置を計測した目印と思われる。後述するように、上下の突帯が同時に付けられたと考えられる例があるので、その計測は、突帯間の距離を測るものであつたであろう。さらに、透かし穴は中段にあけられること、ヨコハケをもつものは中段には例外なく施していることから考えると、中段こそは円筒埴輪の中で特別な意味を与えられた部分であつたために、中段の高さを揃えることが追求されていると理解することができよう。

### 3. 1次調整

粘土紐の接合や器体の整形を目的とする1次調整は、ナナメハケを基本とする。

個体9には、1次のナナメハケに切られるB種ヨコハケが、基底部内面端に認められる。最下段だけは別作りであつたことを示すもので、これは底径を決めておくためであつたであろう。

外面のハケ角度は、類型内でも個体内でも比較的一定している。1類では平均25度前後、2類では40度前後で、1類の方がよりタテハケに近い。内面のハケ角度は、両者とも平均55度前後で変わらないので、1類では外面をタテハケに近づける意識がより強く働いていて、2類は1次調整においてもやや手抜きが見られることになろう。1、2類とも、口縁部内面でナナメハケを90度に近い角度にするものが半数ずつ含まれる。

ハケ単位は、1類が平均2.0mmの細かなものでまとまるのに対し、2類は平均2.9mmであるが、2.0~5.4mmとばらつきが大きく、ほとんどが2.5mm以上である。ハケの細かさという点においても、2類はより雑であるといえよう。

### 4. 突帯

突帯は、全ての個体で例外なく、1次調整後に強いナデによって貼り付けられている。個体5や6では、上下の突帯に切られる長いハケメがあるので、突帯は上下とも同時に付けられているだろう。

突帯の断面形は、四角形を基本とし、上辺がやや突出した四辺形のものが多い。上下の突帯が同じ形のもものが6点、異なるものが2点あるが、三角形と四角形の組み合わせはない。突帯の断面形から2類を細分することはできない。全体的な傾向として、1類の突帯は上辺と下辺の差が小さく四角形に近いのに対し、2類の突帯は上辺の突出が強く三角形に近い印象を受けるものが多い。2類にのみ三角形が含まれることを考えると、四角形から三角形へという変化が想定できそうである。

### 5. 2次調整

突帯貼り付け後に埴輪を正立させたまま行われる2次調整は、B種ヨコハケが基本である。

B種ヨコハケは、欠損や風化で不明なものを除くと、15点中5点に施される。1類では中段に限られ、2類のうち3点では中段だけでなく上段にもみられる。ただ、上段の全体に施すものはなく、上

第2表 長者原18号埴輪属性表

類型	個			径			高さ			口縁	突帯形	1次調整 (ハケ角度)			2次調整		ハケ	基底部倒立再調整			黒斑												
	口徑	中央徑	底徑	口/底	口/中	中/底	總高	基底	中段			上段	高上/高	上	下	基底		中段	上段	内面		口内	中段	上段	単位	内ハケ	外面	外ハケ	基部内面	外部外面	端面	端面形	
1	5	27.1	21.3	17.7	1.53	1.27	1.20	44.6	15.5	13.0	16.1	0.35	0.29	0.36	2	3	1	40	25	35	45	90	2.2	円柱	50	タタキ	30	指頭	なし	カット	5		
1	6	27.3	23.9	17.8	1.53	1.14	1.34	40.8	14.6	12.6	13.6	0.36	0.31	0.33	2	4	4	35	25	35	65	全	2.1	消去	60	タタキ	25	指頭	なし	カット	1		
1	7	23.8	20.6	17.7	1.34	1.16	1.16	41.0	14.9	11.4	14.5	0.36	0.29	0.35	2	1	1	10	15	15	60	2.0	消去	55	タタキ	20	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	1		
1	23			17.8				16.0							3	3	3	35			50	1.7	溝状	70	タタキ	20	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	3		
平均		26.1	21.9	17.8	1.47	1.19	1.23	42.1	15.3	12.3	14.7	0.36	0.30	0.35				30	22	28	55	2.0		59			24						
2	8	28.0	24.2	17.1	1.64	1.16	1.42	40.2	13.3	12.5	14.3	0.33	0.31	0.36	1	2	2	40	55	40	65	80	2.5	風化	なし	風化	なし	指頭	なし	なし	2		
2	9	27.8	22.2	13.4	2.07	1.25	1.66	40.0	15.6	12.2	12.2	0.39	0.31	0.31	1	3	3	60	30	40	65	75	全	中下	不明	なし	指頭	なし	なし	3			
2	10	29.0	21.8	17.1	1.70	1.33	1.27			13.9					3	3	30	45	35	65	90	5.4	溝状	ナデ	消去	ナデ	指頭	ナデ	ナデ	1			
2	11	27.6	23.9	17.2	1.60	1.15	1.39	39.0	13.4	11.4	14.2	0.34	0.29	0.36	1	1	3	35	35	45	60	90	2.3	風化	タタキ	なし	指頭	なし	なし	4			
2	12	27.4	21.8	14.0	2.00	1.26	1.56			12.4					2	1	1		50	55	90	3.9	風化						なし	3			
2	13	30.0	26.3			1.14				12.5	12.5				3	3	3		30	50	45	3.1										○	
2	14	24.1	20.4			1.18				11.4	13.4				3	3			35	60	65	2.5										○	
2	15	27.0	18.3			1.48				14.0					3	2			40	20	40	3.2										○	
2	16	24.5	23.5			1.04				12.3					2	1			25	45		2.0											
2	17	28.8	24.5			1.18				12.0					2	3			40	45	80	3.2											
2	18	26.5	21.8			1.22				13.3					3	3			55	60	80	2.8				欠							○
2	19	23.6	22.8			1.04				13.2					3	3			40	40	40	2.2										○	
2	20	26.2	22.5			1.16				12.4					2	3			30	35	45	全	2条									○	
2	21	23.8								12.8					3	3			35	40	35	2.2										○	
2	22	22.7													3				45	30		2.6											
平均		26.5	22.6	15.8	1.80	1.20	1.46	39.7	14.1	12.0	13.1	0.35	0.30	0.34				41	39	42	54	85	2.9										
総平均		26.4	22.5	16.6	1.68	1.20	1.38	40.9	15.0	12.2	13.4	0.36	0.30	0.35				36	35	40	55	86	2.7										
参考																																	
3	24			15.7				13.3							1	1	-35				-60	1.4		指頭		押圧	-25	-70	なし	なし	2		
朝顔1	25	37.0	23.0												3	4		40	55	50	85	2.3											
朝顔2	26			22.3													35				50	4.1							ケズリ	B種	なし	なし	4

(朝顔は正立)

突帯の近くが中心である。突帯貼り付け時のナデとの切り合いから、ヨコハケは突帯の後に施されるのが明らかである。個体9は中段の全てと上段の下3分の2にヨコハケをもつ例で、ヨコハケは上下の突帯を貼り付けた後に、下から時計回りで施されている。個体6では中段に加えたヨコハケの上から部分的に正立のナナメハケが追加されている。その意図は不明である。

## 6. 基底部倒立再調整

自重により潰れた基部を、倒立して整形する基底部倒立再調整の状況を観察できる資料は、部分的なものも含めて9個体ある。

1類と2類合わせて6点で、外面にタタキによって形成された面あるいは稜線を観察できる(写真4)。個体7では、面や稜は見られないが、タタキ具の端によると見られる細かな横方向の線を確認できる(写真5)。押圧技法の特徴とされる、端部付近の斜め方向の細かな線が認められる資料はなく、全てがタタキ技法によっている。内面の当て具痕が観察できる資料は4点で、3点は溝状なので(写真1、2)、板状当て具の側面か角柱状当て具に対応するだろう。個体5のみは、円頭形のくぼみが並んで残っているので、円柱状当て具を用いているかもしれない(写真3)。ただし、このくぼみには縦方向のナデ線も認められるので、強いナデの結果残された痕跡の可能性も否定できない。興味深いのは、個体9で、外面に明瞭な面があり内外面とも1次のナナメハケが潰れているのでタタキが加えられているのは確実であるが、倒立ナデや倒立ハケメがないのにもかかわらず、内面には当て具の痕跡が確認できない。専用の当て具を用いずに、例えば礫や素手を用いたような場合が考えられるだろうか。

1、2類合わせて6点で端部内面に指頭圧痕が残っている。また、いずれも端部から4～5cmのところ、外面はわずかに内傾する。端部に近いところでは当て具を使わずに指を当てて意識的にタタキの角度を変えるか、指を使って端部を整えているようだ。1類の指頭圧痕は、倒立ハケメの上から付き、カットによって半分ほど削られているので、カットに関係するものかもしれない。

1類ではタタキ後に全て倒立ハケメを施す。外面では20～30度、内面では50～70度の入念なもので、それぞれ1次調整のハケメの角度とほぼ一致している。2類は倒立ハケメを加えないが、個体10だけは、基底部内外面のタタキを加えた箇所に入念な倒立ナデを施す。

端部は、1類の個体5と6ではカットを加え、個体7と23では端部に近い内外面を含めてヨコナデを施す。特に個体7ではヨコナデにより平坦な端面が形成されており、ヨコナデがカットの役割を担っている場合があると思われる(写真6)。2類では、端面にカットやヨコナデは加えない。個体10だけは、端面のみナデを加えて平坦面を形成している(写真7)。カットによる可能性もあるが、指頭圧痕が完全に近い形で残っているので、ナデと判断した。端部内外面への粘土のはみ出しと円周方向の砂粒の動きが観察できるので、おそらく端面に板を押し付けて回転させているだろう。同じナデ調整でも、1類のものとは内外面にヨコナデがない点で違いがある。

## 7. 口縁部の調整

口縁部は、全ての個体で強いヨコナデを加えて調整されている。ヨコナデは、内面により多く加えられるものと、外面により幅を取るものがあるが、断面形や類型との相関は見出せない。口縁部の断面形は、1類はすべて平坦であるのに対し、2類は平坦面が外傾するものが半数を占める。口縁部形と突帯形など他の属性との間に相関は認められないので、2類を細分する手がかりとはならない。口縁部が調整されるのは、基底部倒立再調整後に、正立し直してであると考えられる。基底部よりも口



写真1 溝状当て具痕(個体10)



写真2 溝状当て具痕(個体18)



写真3 円柱状当て具痕(個体5)



写真4 タタキによる面(個体9)

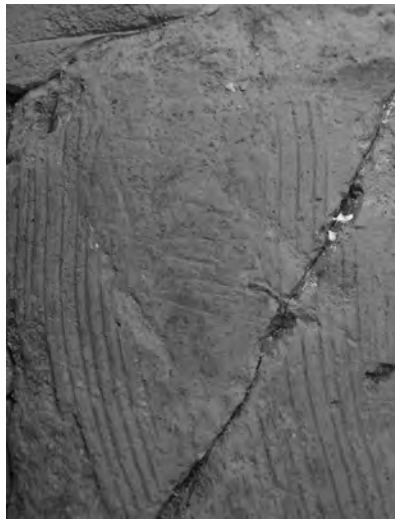


写真5 タタキ具痕(個体7)



写真6 ヨコナデによる端部(個体7)



写真7 端面のみのナデ(個体10)

縁部の方が後で作られるので、基底部再調整のために倒立すれば、口縁部には歪みが生ずる可能性が高い。特に、2類の外傾する断面形をもつものは、稜線で接地するので傷が付きやすいだろう。しかしながら、いずれの個体の口縁部にも、顕著な傷や、板や藁などの敷物の痕跡は全く認められない。

## 8. 透かし穴

透かし穴は、器壁断面において、例外なく外側が高く内側が低い。また、砂粒の動きが読めるものは、工具の回転は時計回りである。楕円形のものには軸が向かって右上方に偏る。以上から、1、2類の製作者はハケメから全員右利きであることが明らかなので、透かし穴は埴輪を正立させてあけると考えられる。中段の強度を弱めることになる以上、粘土がほぼ乾き切った後、つまり基底部倒立再調整後の作業と考えるのが自然である。なお、個体18では深く差し込まれた当て具の痕を透かし穴が切っているようだ。透かし穴径は平均で、1類で6.2cm、2類で6.8cmを測る。1類は平均値前後でまとまるが、2類はばらつきが大きく、7.0cm前後のものが多い。さらに、1類の方が器高が大きいため、見た目の印象では、1類では透かし穴が小さく、2類では大きく見えることになる。

## 9. ヘラ記号

ヘラ記号は1類では必ず刻むが、2類には全く見られない。基本的に上段の透かし穴直上に刻まれ、細く鋭い工具を用いているので、透かし穴をあけた後の作業と考えられる。個体5では両方の透かし穴直上に1つずつ、個体6では片方の透かし穴直上とその左側に並べて2つ（もう一方は部分的な欠損のため不明）、個体7では透かし穴直上に1つ（もう一方は欠損）というように、確認できるものでは透かし穴の上には必ず刻まれており、また複数もつことが基本と考えられる。したがって、製作者のサインというよりは、装飾的あるいは透かし穴をあける行為に伴う儀礼のような意味合いをもつものかもしれない。2類にヘラ記号がないのは、装飾という点では上段にヨコハケを施すものがあるとの関係があるかもしれないし、儀礼という点では省略として理解できるものかもしれない。

## 10. 黒斑

黒斑は2類に限られ、ほぼ半数の7点に認められる。3点は、突帯か口縁か底部に点状にごく部分的に見られる。個体20では、突帯上の点状の黒斑と口縁内部の面的なものとの構成される。個体11には、外面に口縁部から底部までつながる線状の黒斑があり、あたかも埴輪の側面のラインを転写したかのように口縁部側が外反する。個体14と15も上段外面に線状に分布する。外面の黒斑がかなり部分的であることからすると、埴輪は焼成時には正立して並べられ、隣のものとの接触はなるべく避けられていると考えられる。2類内で、黒斑をもつもの同士の技術的な共通点や、そうでないものとの違いは特に認められないので、黒斑をもとに2類を細分することはできない。1類に全く認められないのは、焼成方法の違いか、あるいは焼成施設内での埴輪間の距離の差によるのだろう。

## 第3節 まとめ

以上をまとめると、長者原18号墳の円筒埴輪は、1類がより丁寧に作られ規格にまとまりがあるのに対し、2類は技術的にはやや粗雑で変異の幅が広い。1類と2類の差はそれだけにとどまらず、粘土の調合から焼成までの製作全般にわたっていると考えられる。したがって、本古墳の円筒埴輪は、2つの異なる製作集団あるいは製作地から調達されていると結論される。このことは、重要な問題を含んでいる。第一に、異なる製作集団間に共通する規格の存在を指摘できる。供給元が異なっても、本古墳の埴輪のように中段高がほぼ同じならば、突帯を揃えて配列することができる。実際、第5章



で触れたような、1類と2類が混在して2個一対で並べられている状況は、共通規格の存在があって可能になることであろう。このような規格が、1つの古墳の築造ごとに注文先から決められたものか、一定時期あるいは一定地域の生産地に共通するものかは、今後の課題である。第二に、編年研究における問題が挙げられる。近年関心を集めている基底部倒立再調整に関して見ると、倒立ハケメやカットを伴うほぼ完全なタタキ技法（1類にみられる）とされるものと、ハケメとカットを省略したタタキ技法（2類にみられる）とが、本古墳では同時存在している。つまり、再調整技術はある程度重なり合いながら変化していることになる。本古墳における出現頻度を見ると、再調整の状況が分かる資料では約1：1であるが、1類と2類の比では約1：4になり、他の属性の類似性を考慮すると、後者の値が実態に近いであろう。古墳ごとに基底部再調整技術の出現頻度を量的に示すことができれば、埴輪を基準に古墳を細かく編年することが、理論的には可能になるかもしれない。

大谷晃二氏によれば（大谷2003）、カットは出雲東部のみに見られるもので、さらに、溝状の当て具痕は主に安来平野に分布するという。この2つの特徴をもつ長者原18号墳の埴輪は、現時点では、東出雲との関係が強いものと考えてよさそうである。米子平野の周辺で埴輪を出土する後期の古墳群としては、長者原古墳群の他には、淀江平野の向山古墳群と、日野川左岸の宗像古墳群や陰田古墳群があげられる。向山古墳群の埴輪（淀江町教育委員会1990）が形態および技術的に明らかに本古墳のものと異なった特徴をもつものに対し、東宗像5号墳（鳥取県教育文化財団1985）や陰田42号墳（米子市教育委員会1984）などのものは、非常によく似ているので、日野川左岸までは東出雲の影響下にあったと考えることができるかもしれない。本古墳の埴輪が東出雲から運ばれたものか、東出雲の影響を受けた工人によって付近で製作されたものかは今後の研究課題であるが、複数の製作集団からのものが含まれていることや、埴輪をもつ古墳が当地域に少ないことから、前者の可能性が高いように思う。

最後に、当地域の埴輪の編年に関する予察を行ってみたい。長者原古墳群において18号墳の他に一定量の埴輪が出土しているのは、16号墳と17号墳である。16号墳については、第4章で既に触れたとおり、過去の調査で大量の埴輪が出土している。ほとんどが須恵質で、小型で中段にB種ヨコハケを施すものが認められる。基底部倒立再調整はナデ調整のみである。円筒埴輪だけで朝顔形埴輪を含まない（岸本町教育委員会1984、伯耆町教育委員会2007）。17号墳は2種類の円筒埴輪で構成される。土師質でB種ヨコハケをもつもの（Aタイプ）、半須恵質で基底部倒立再調整に下突帯にまで及ぶ押圧技法を用いるもの（Bタイプ）で、後者が大多数を占める。また、前者と同質の朝顔形埴輪が存在する（米子市教育委員会1986）。17号墳のAタイプは18号墳の2類にあたるので、2類の割合を基準にすると、18号墳→17号墳→16号墳という順序を組むことができる。この流れの中には、(1)小型化：中段高を例に取れば、12cm→11cm→10cmとなる、(2)焼成方法の土師質から須恵質への変化、(3)供給元の一元化、(4)朝顔形埴輪の消失、などの変化の方向を指摘することができるだろう。もちろん、3者は連続するとは限らず、他の埴輪群が間に入る可能性は十分にありうる。

## 謝辞

本論を書くにあたっては、鳥取県立博物館 東方仁史氏から多大なご教示をいただきました。感謝いたします。なお、本論に明らかな誤りがある場合には、それは筆者の力量不足に由来するものです。ご指摘をいただければ幸いです。

## 第7章 考察

### 参考文献

- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2
- 米子市教育委員会 1984 『陰田』
- 岸本町教育委員会 1984 『長者原遺跡群発掘調査報告書』Ⅲ
- 寺西健一 1985 「円筒埴輪の地域性—館蔵円筒埴輪を中心に—」『鳥取県立博物館研究報告』第22号
- 鳥取県教育文化財団 1985 『東宗像遺跡』
- 米子市教育委員会 1986 『長者原5号墳発掘調査報告書』
- 淀江町教育委員会 1990 『向山古墳群』
- 山内英樹 2003 「埴輪研究の現状と課題」『宮山古墳群の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告書16
- 大谷晃二 2003 「円筒埴輪基底部再調整の技法復元」同上
- 伯耆町教育委員会 2007 『大殿狐谷遺跡 長者原16号墳 大殿墓ノ谷遺跡 長者屋敷遺跡』

## 第8章 まとめ

今回の、大殿狐谷遺跡および長者原16・18号墳の調査で得られた成果を、時代順にまとめると以下のようなになる。確認された事実と、そこから考えられる諸問題について最後に簡単に触れてみたい。

### 弥生時代後期から古墳時代前期

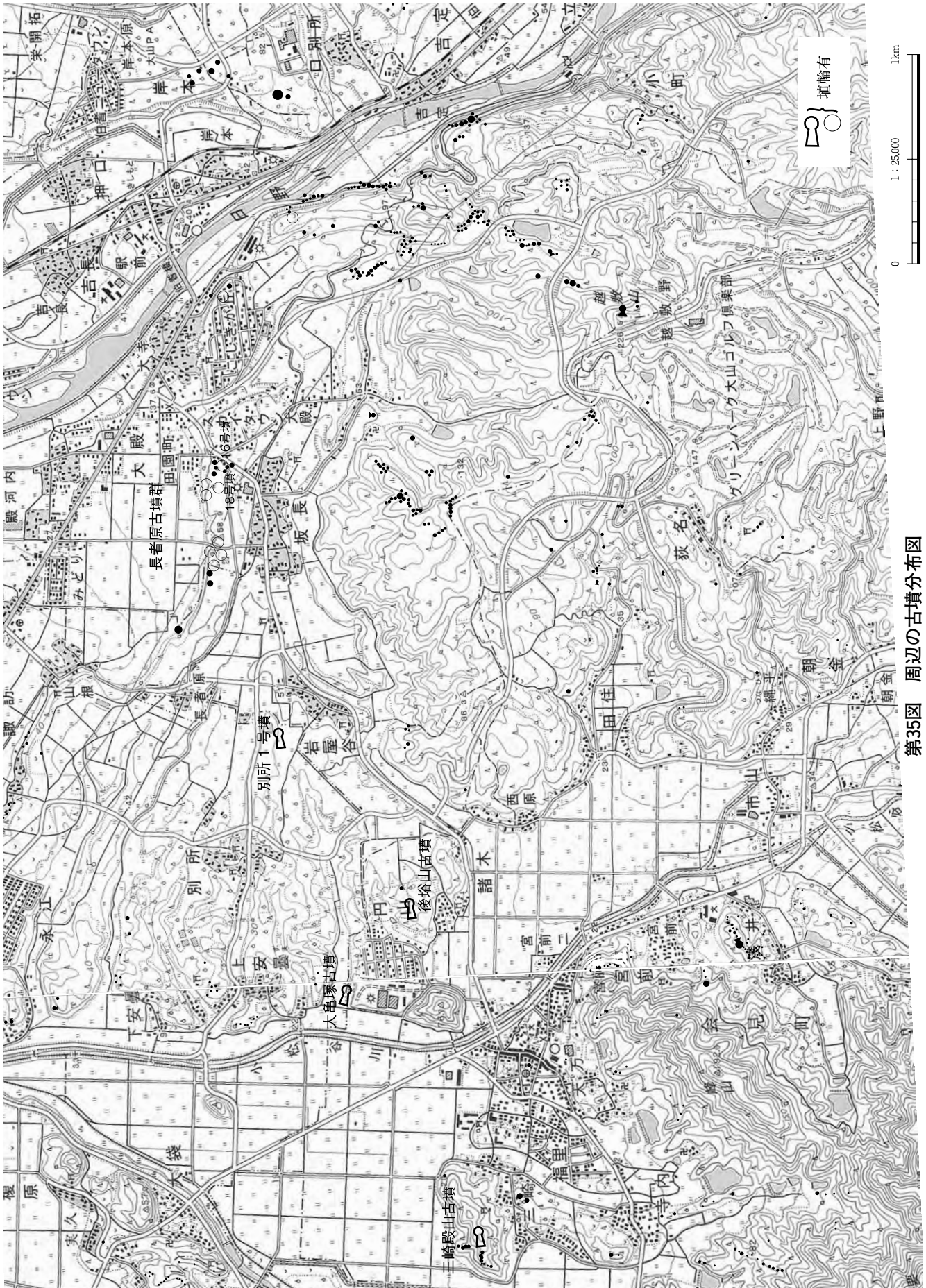
調査地周辺は、集落として利用される。今回の狭い調査区内だけで、5棟の竪穴住居跡と1棟の掘立柱建物跡が検出されており、過去の調査でも同時代の竪穴住居跡が複数見つかっていて、集落の規模は径130m以上と推測される。竪穴住居跡S I 5は、旧材をそのまま利用した建て直しの状況が窺える遺構である。いずれの住居跡も遺物の量は少なく、古墳時代中期の遺物は全く出土していないので、長者原古墳群が築造される100年以上前に廃絶したとみられ、集落を潰して古墳群を造るといったような直接の関係はないと考えられる。

### 古墳時代後期

18基からなる長者原古墳群の東支群として、5世紀後半から6世紀中頃にかけて少なくとも9基の円墳が築かれる。古墳の直径は約20～30mと特に大きくはないが、埴輪をもつものが多い点で、周辺地域では出色の群集墳である。今回の調査では16号墳と18号墳の周溝の一部を検出した。特に18号墳からは円筒埴輪と朝顔形埴輪からなる良好な一括資料が出土した。製作技術には、東出雲地方の強い影響が認められる。本古墳群の東南2.5kmの範囲には、別所1号墳・後塔山古墳・大亀塚古墳といった、人物埴輪や円筒埴輪を出土したことで知られる古墳時代後期の前方後円墳が、あたかも出雲へと続く古代山陰道の推定線に沿うかのように分布している（第35図）。古墳時代中期までには、三崎殿山古墳のような例外はあるが、周辺地域に埴輪を有する古墳はほとんどなく内在的な展開は考えにくいので、埴輪の盛行、中でも小規模古墳への樹立は後期に入ってからのものであると見られる。そこに、古代山陰道に先行する交通路の存在と、出雲からの集団の移動と定着、さらに降って大寺廃寺や会見郡衙などの造営への関係を想定するのは、想像が逞しすぎるだろうか。

### 古代

長者原18号墳の周溝埋土上部から、流動滓を中心とする製錬系鉄関連遺物と、官衙に関係する可能性がある8世紀頃の土器が出土した。遺構は見つからなかったが、付近で行った製鉄の廃棄物をまとめて投棄したものと考えられる。過去の調査では、調査地付近から同時代の竪穴住居跡や土器類は出土しているが、製鉄に関する遺物がまとまって見つかったのは初めてである。伯耆国からの鉄の貢納が文献に記録されるのは延喜14年（914）が最も古く、今回の発見はそれよりも100年程度は遡るものである。なお、平成19年に本財団が調査した坂長第6遺跡からは、古代会見郡の官営工房と推定される遺構と、精錬鍛冶に関するものを中心とする大量の鉄関連遺物が出土している。18号墳の例は、会見郡官営工房に対する鉄素材供給の一つのあり方を示している可能性があり、周辺地域における製鉄の歴史と展開を考える上で重要である。



第35図 周辺の古墳分布図

図 版  
PLATE







1. 調査地周辺の地形（東から）



2. 調査地周辺の地形（上が北）



図版2 大殿狐谷遺跡



1. 1区完掘状況（北から）



2. S I 1完掘状況（北から）



3. S I 1土層断面（西から）



4. 2区完掘状況（南から）



5. S K 1完掘状況（南から）



1. 3区完掘状況（東から）

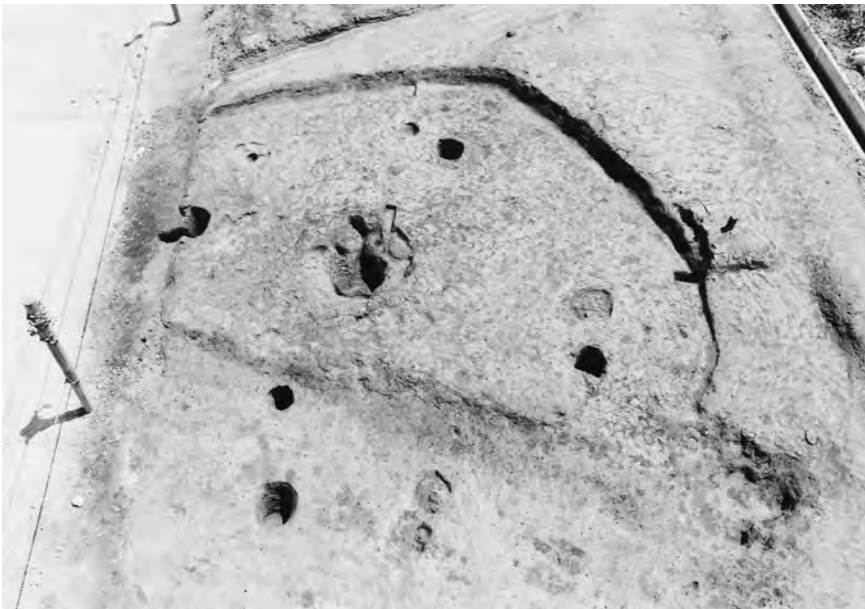


2. 4区完掘状況（北西から）

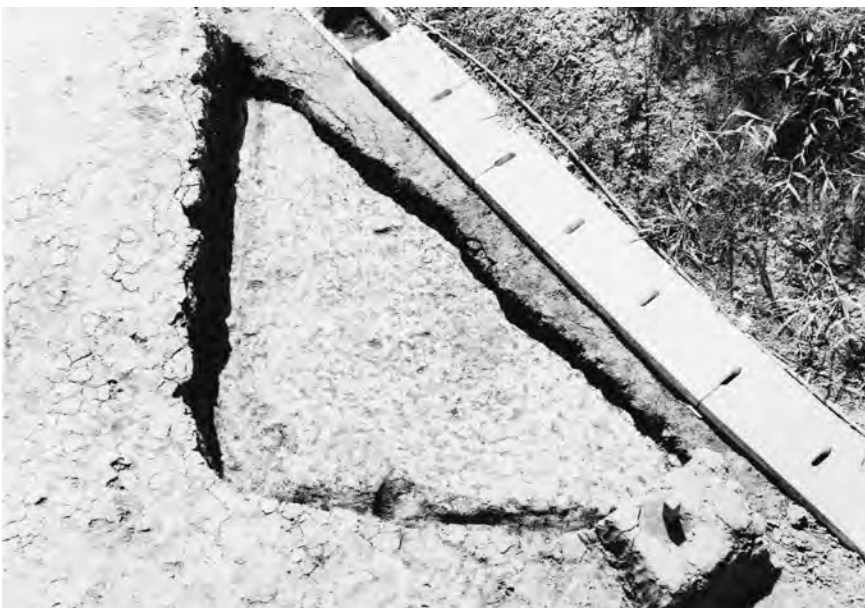
図版4 大殿狐谷遺跡



1. S I 2 検出状況 (東から)



2. S I 2 完掘状況 (西から)



3. S I 3 完掘状況 (北西から)



1. S I 4 検出状況 (西から)



2. S I 4 完掘状況 (西から)

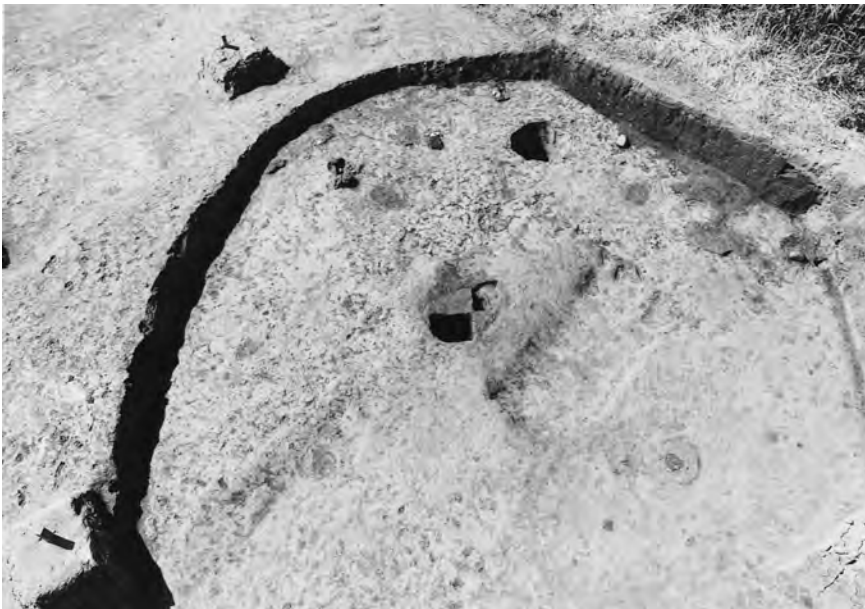


3. S I 4 と18号墳間の土層断面 (南から)

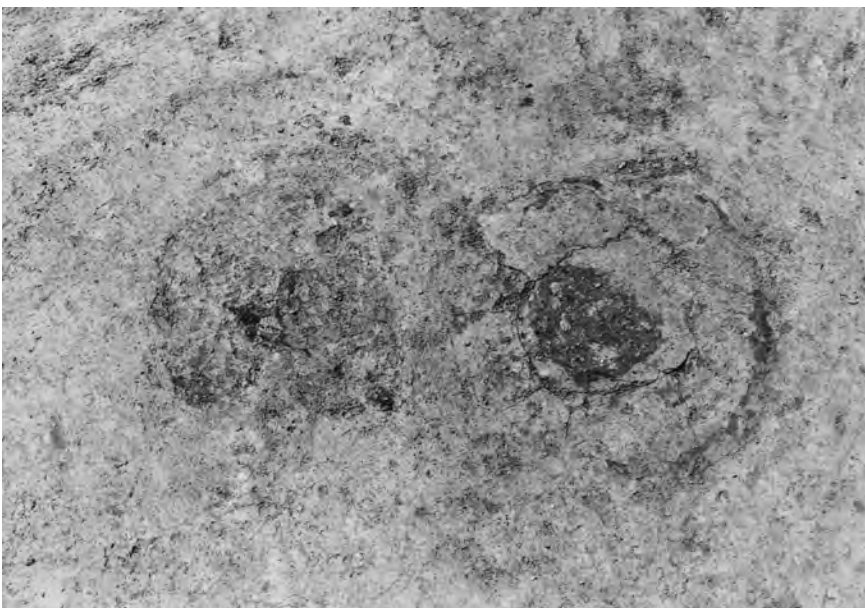




1. S I 5 検出状況（北から）



2. S I 5 床面検出状況  
（北から）



3. S I 5-P 5、P 6  
検出状況（北から）



1. S I 5 完掘状況 (南東から)



2. S I 5 炭化物および焼土出土状況 (北東から)

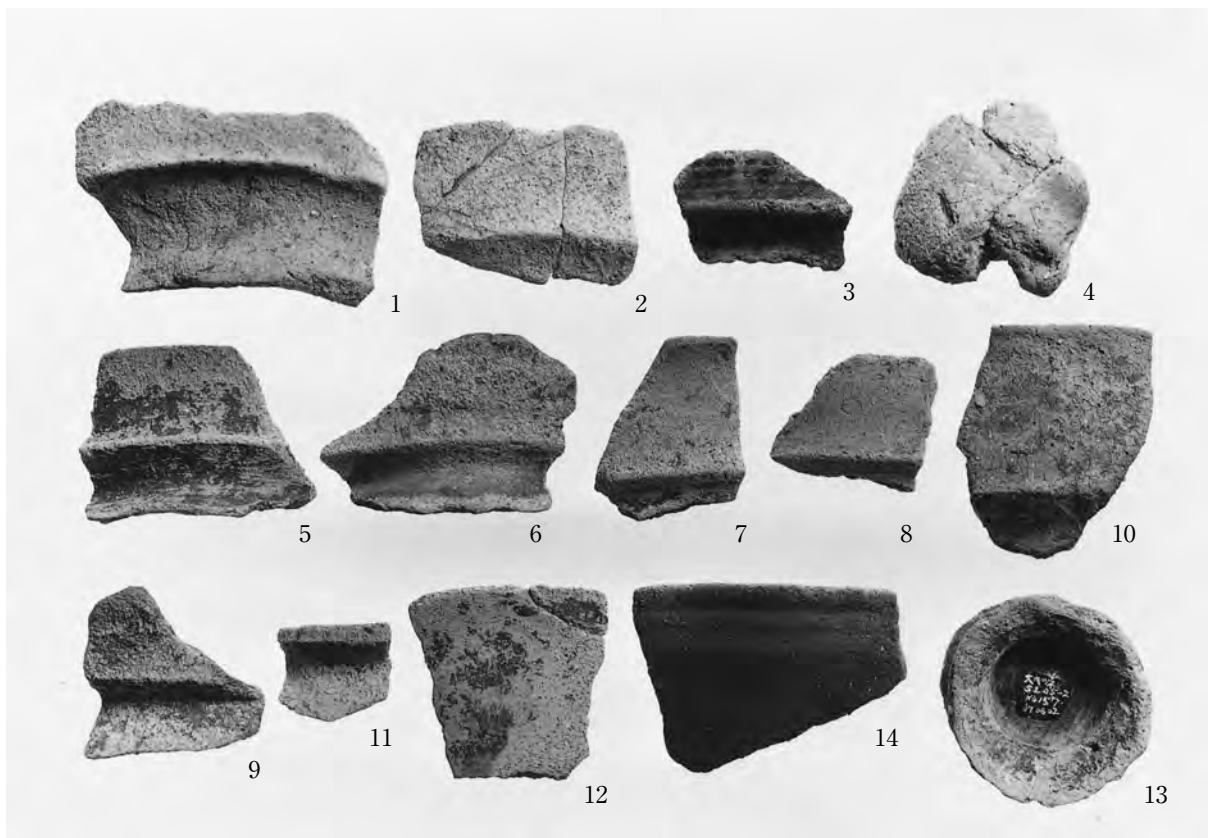


3. S I 5 鉄製品出土状況 (北から)

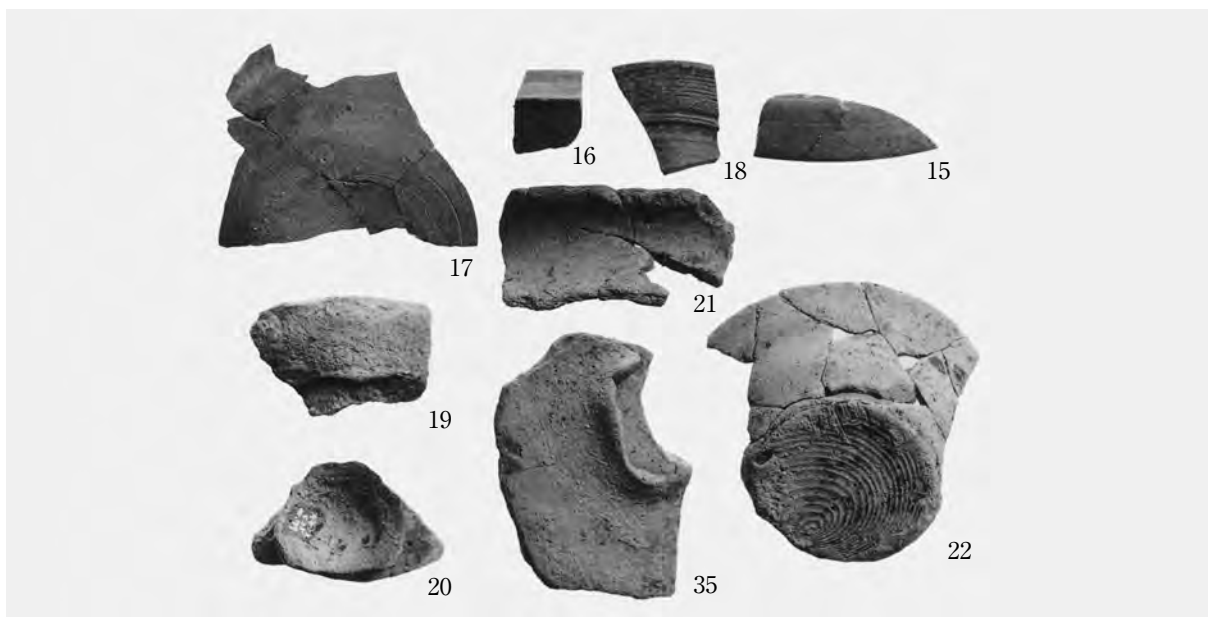


4. S B 1 完掘状況 (南西から)

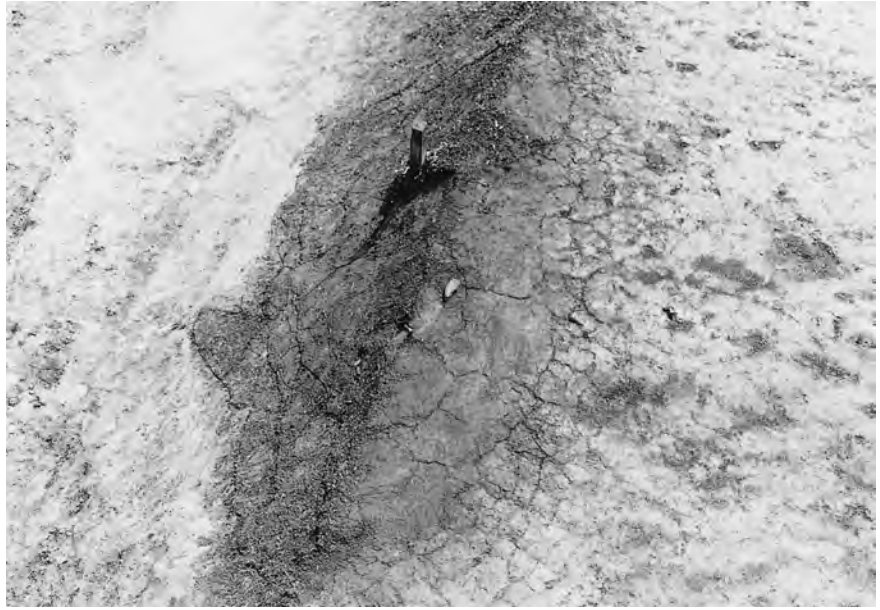




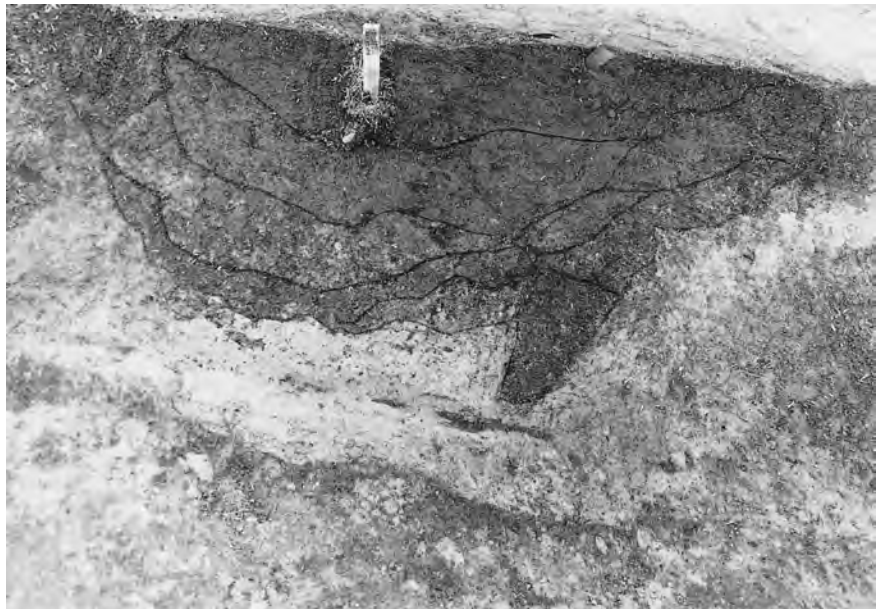
1. 豎穴住居跡出土土器



2. 遺構外出土土器



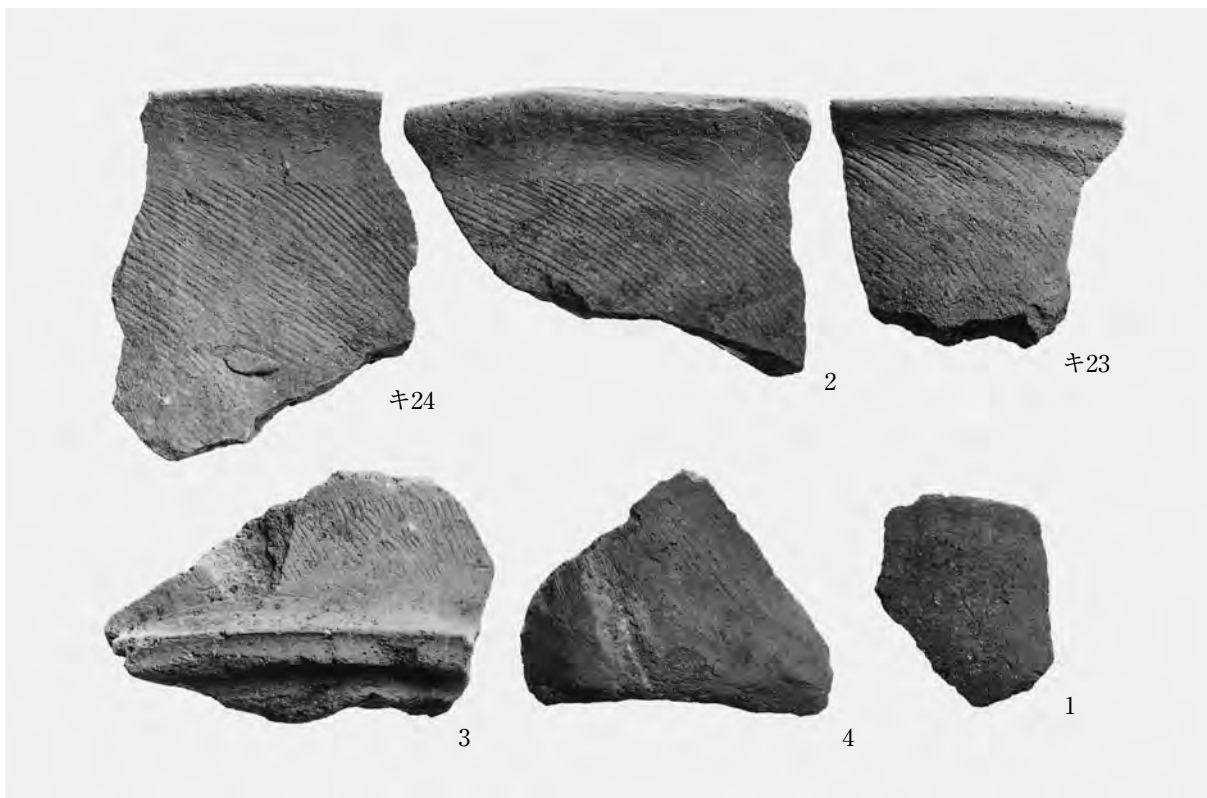
1. 周溝検出状況（北東から）



2. 周溝土層断面（南西から）

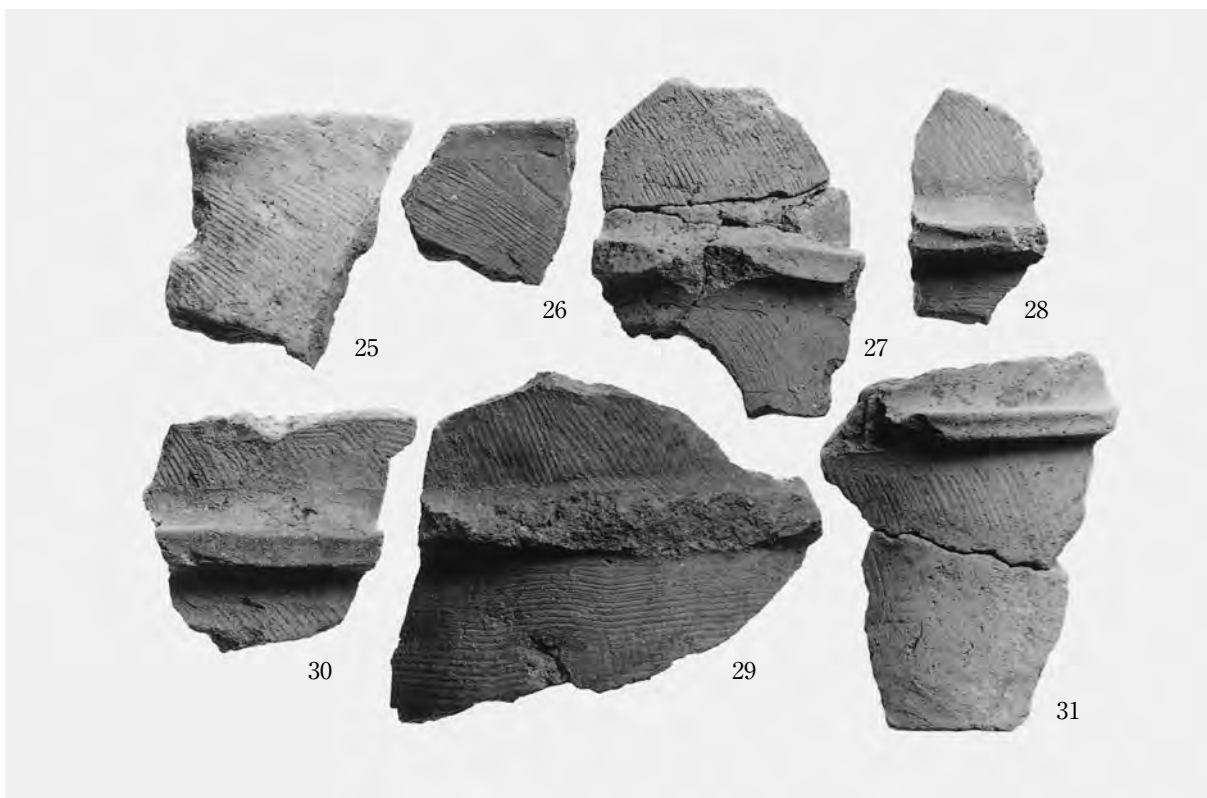


3. 周溝完掘状況（北西から）



1. 長者原16号墳出土遺物

(キ：大殿狐谷遺跡)



2. 大殿狐谷遺跡 遺構外出土埴輪



1. 周溝検出状況（東から）



2. 周溝内埴輪出土状況（東から）



3. 周溝完掘状況（東から）



4. 周溝内炭化物出土状況（南から）



1. 周溝土層断面（東から）



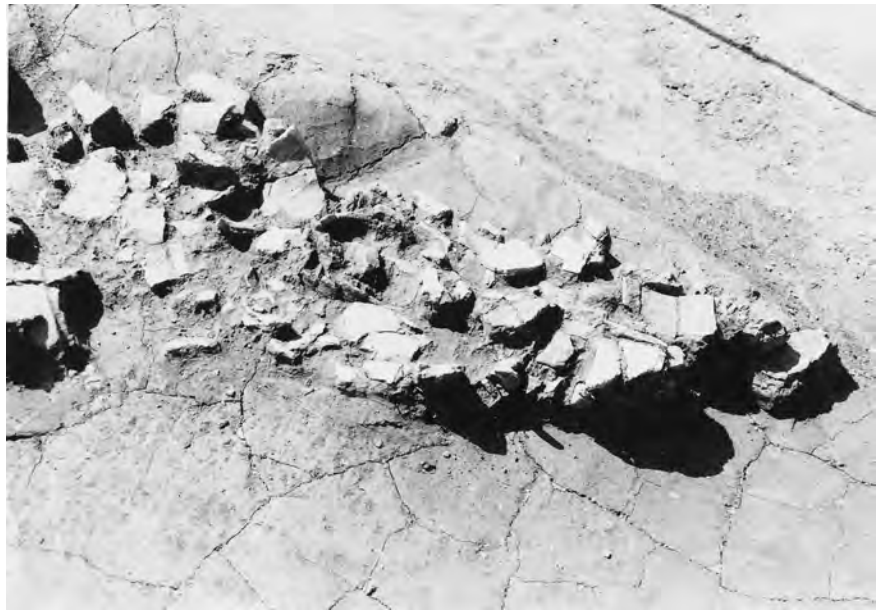
2. 埴輪出土状況  
東半（東から）



3. 埴輪出土状況  
西半（西から）



1. 埴輪A群出土状況  
その1 (南東から)



2. 埴輪A群出土状況  
その2 (南東から)



3. 埴輪B群出土状況  
(南東から)







1. 埴輪D群出土状況  
その1 (南から)



2. 埴輪D群出土状況  
その2 (南から)



3. 埴輪D群出土状況  
その3 (南から)



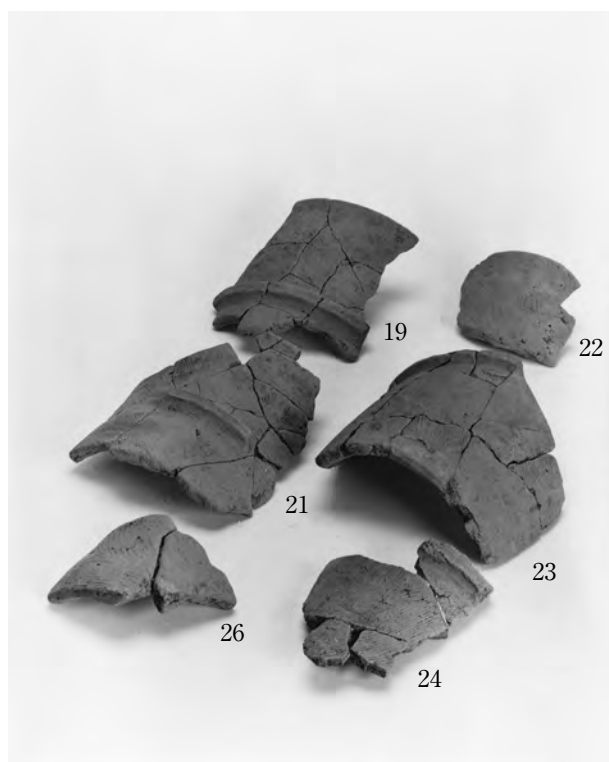
埴輪 (1)



埴輪(2)



埴輪 (3)



埴輪 (4)



1. 古墳時代の土器

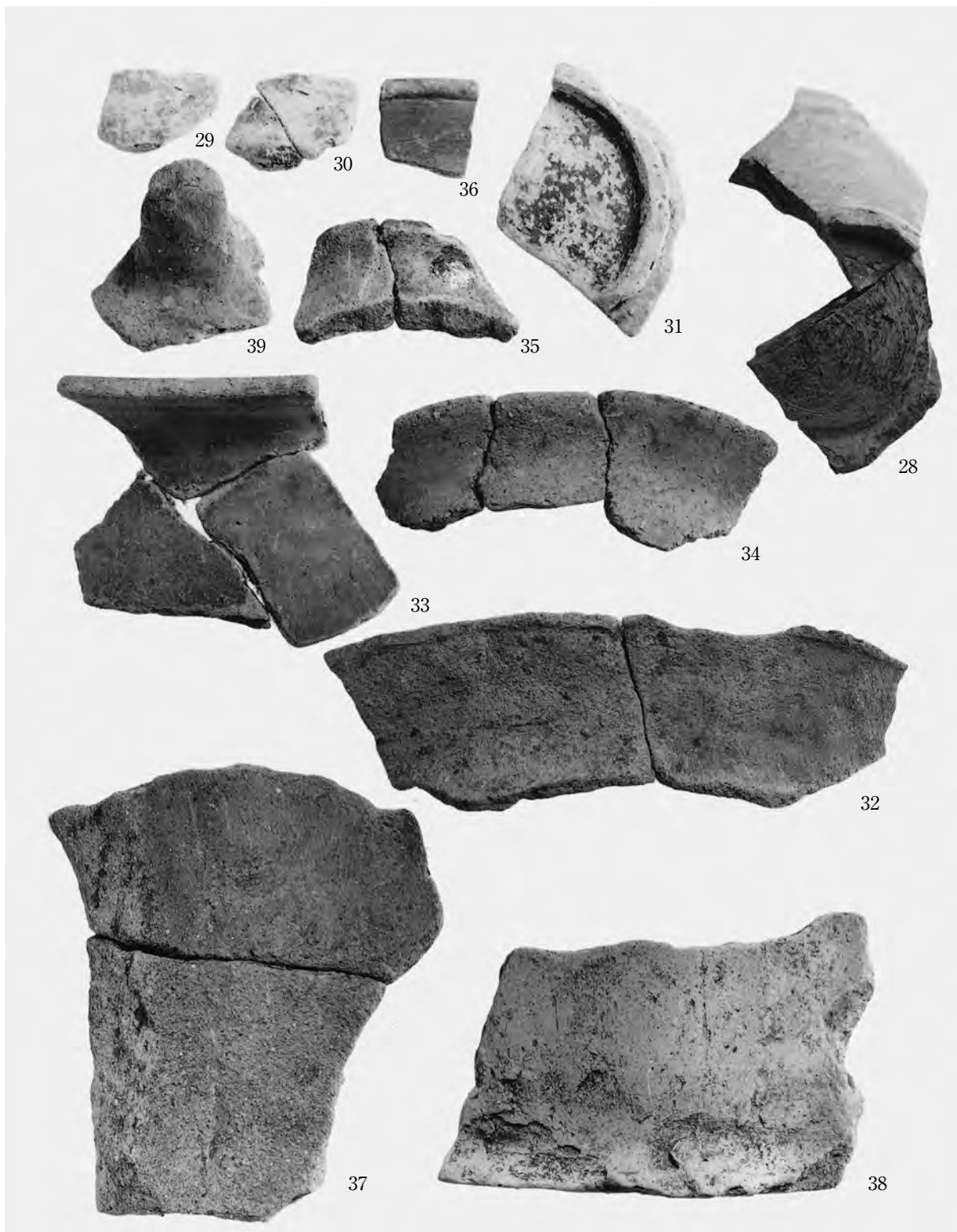


2. 土製品 (キ：大殿狐谷遺跡)

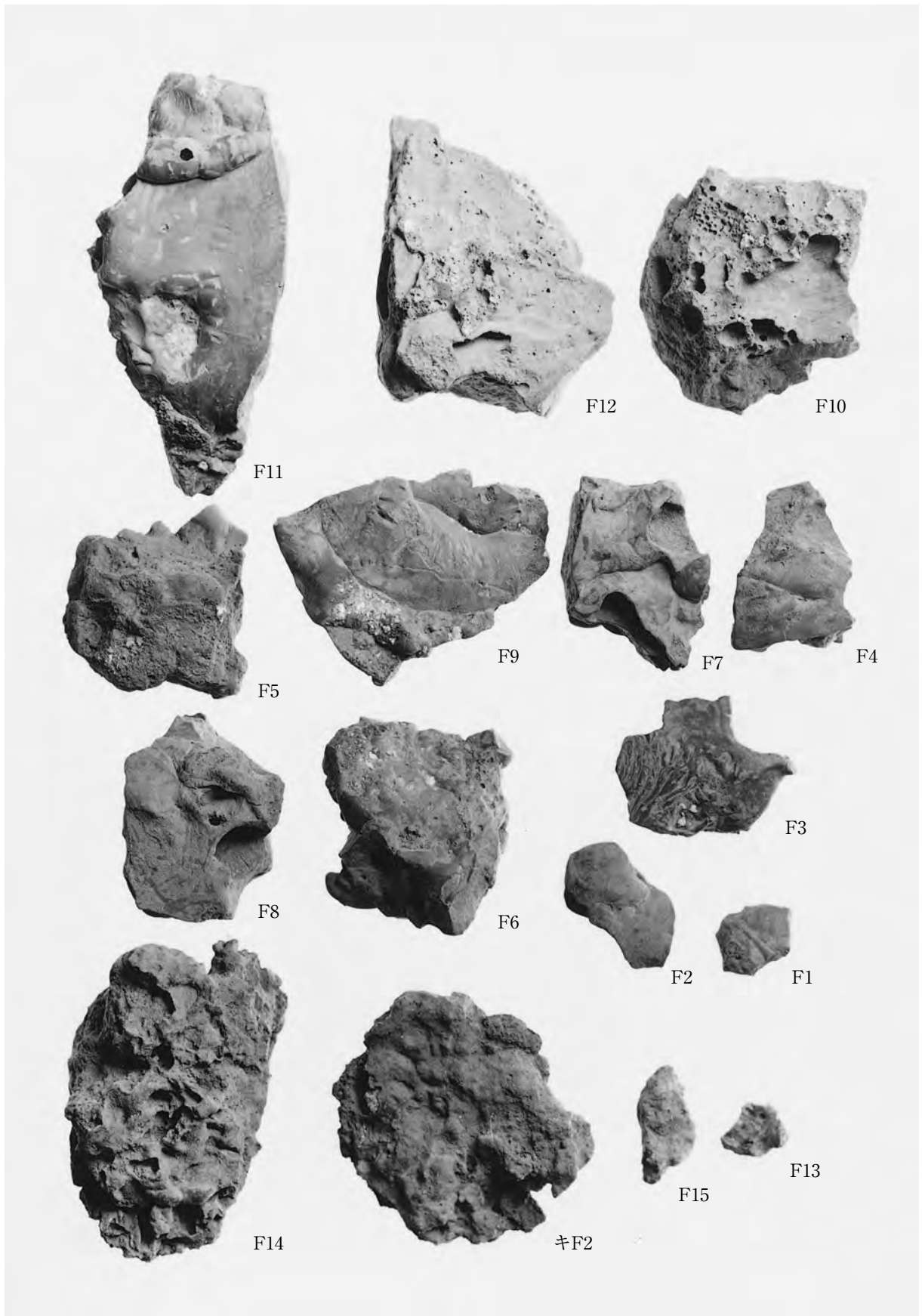


3. 古代の土器 (1)

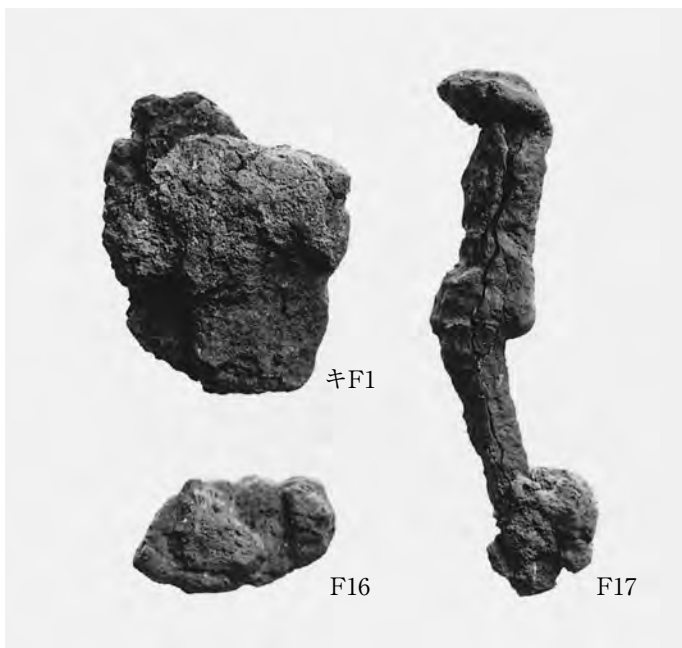




古代の土器（2）



鉄関連遺物



1. 鉄製品



2. 石器および砥石

# 報告書抄録

ふりがな	おおとのきつねたにいせき、ちょうじゃばら16・18ごうふん							
書名	大殿狐谷遺跡、長者原16・18号墳							
副書名	県道米子岸本線（坂長バイパス）改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	110							
編著者名	高橋 章司							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団調査室							
所在地	〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地 TEL (0857) 27-6717							
発行年月日	西暦2008年（平成20年）3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおとのきつねたにいせき 大殿狐谷遺跡	とっとりけんさいはくぐんほうきちょうおおとの 鳥取県西伯郡伯耆町大殿  あごみなみきつねたに 字南狐谷2553ほか	31390	1-361	35° 23′ 02″	133° 23′ 36″	20070412 ～ 20070823	1140m <sup>2</sup>	県道米子岸本線（坂長バイパス）改良工事
ちょうじゃばら16ごうふん 長者原16号墳		31390	1-11					
ちょうじゃばら18ごうふん 長者原18号墳		31390	1-362					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大殿狐谷遺跡	集落	弥生～古墳時代	竪穴住居 掘立柱建物 土坑	5棟 1棟 1基	弥生土器 土師器 鉄器			
長者原16号墳	古墳	古墳時代	周溝		円筒埴輪	円墳		
長者原18号墳	古墳	古墳時代	周溝		円筒埴輪 朝顔形埴輪 須恵器 鉄関連遺物	円墳		

鳥取県教育文化財団調査報告書 110

県道米子岸本線（坂長バイパス）改良工事に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県西伯郡伯耆町

おお との きつね たに い せき  
**大 殿 狐 谷 遺 跡**  
ちょう じゃ ばら 16 ・ 18 号 墳  
**長 者 原 16 ・ 18 号 墳**

発 行 2008年3月21日

編 集 財団法人 鳥取県教育文化財団 調査室  
〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地  
電話（0857）27-6717

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印 刷 勝美印刷株式会社